

明治參拾六年拾貳月貳拾四日發行

(非賣品)

# 加辰會雜誌

第參拾六號

第四高等學校校友會

北辰會雜誌第三十六號目次

論說

學問は己自身に之を修むべし漫に他に  
 依頼すべからず  
 歌人としての和泉式部(承前)  
 國民の發達  
 宗教につきて  
 慷慨悲憤之助の檄を讀む

雜錄

歷史的諺(承前々號)  
 地球の成因及發育に就て  
 塵影錄  
 世界の文明  
 佐和兄を懷ふ  
 Die Zwei Blinden.

文苑

露草日記  
 戀瀨の流  
 落葉籠

吉村但豊  
 八波則吉  
 碧山  
 龍山  
 北海浪雄  
 浦井恒堂  
 中野嘉作  
 孤憤生  
 神保金衛  
 冠木劍狂  
 H. ARIMA.  
 山崎麓  
 野田人  
 野田鴨水

京みやげ  
 思川出  
 橘山露  
 夕白車  
 乳母車  
 Der Stahlerbst.  
 無花果  
 山科吟  
 木村博士頌拜引  
 書源烈公畫高游外像并讚後  
 漢詩(六首)  
 和歌  
 俳句  
 新體詩  
 枯葉集  
 漢文  
 斗刀牛水  
 外風生  
 外風圃  
 Kiso,  
 村上函峯  
 村上函峯  
 露波  
 秋風  
 眞名の里人  
 水衣

卒業證書授與式○特待生○北辰會役員の改正○北辰會代議員の改選○北辰會新委員交名○乘艇規約の改正○テニス部報告  
 寮報  
 ○時習寮規○時習寮規○時習寮規約の沿革一覽○新入寮生宣誓式○時習寮現在人員級別○時習寮出身中學校別○時習寮生道廳府縣別○前學年時習寮人員○時習寮前學年退寮人員表○第一回大茶話會時習寮創立十週年祝賀會在野寮務主任就職十週年祝賀會記事○第一回鐵脚隊遠足記事○一高崇拜熱を戒む○新入寮生に告ぐ○舊寮生通信○書窓雜感○永談○明治三十五年度北辰會決算書○三月以降寄贈雜誌

北辰會雜誌第叁拾六號

論說

學問は己自身に之を修むべし漫に他に依頼すべからず

吉村但豊

學問は其の學科の何たるを問はず必ずや己自身に研鑽すべくして漫に教師や書籍のみに依頼すべしにあらざるなり、彼の常に漫に教師と書籍とのみに依頼し自ら奮起して刻苦研鑽の功を積まざる人は縦令ひ僥倖にして學校卒業の名を得るあるも唯教師の口説と書籍の文章とを誦記せしと云ふに過ぎずして毫も己の智徳に損益する所あるにあらざるなり、之に反して常に教師と書籍とに不足を訴ふる人と雖も自ら勵精尋究すれば必ずや智徳共に日に月に増進し遂には卓越拔群の人となることを得べし、例へば等しく大學出身の人にして甲は社會有用の材幹と爲りて世間一般より大に持難やされ乙は自活の道さへ得ること能はずして常に他人の憐愍を乞ふと云ふ、こは素より天稟の智不智運命の遇不遇に因るものなきにしもあらずと雖も要するに其の多くは學校生活の間己自身に學問を修めしと常に他の力に依頼せしとの差より生ぜし所の結果に外ならざるなり、抑々學問を爲すに良師良書の幫助の必要なることは固より論を俟たずと雖も其の主働者は必ずや自己ならざるべからず、之を旅行に譬へんに教師は單だ初旅の手引なり道中の案内者なり近路を

指導する人なり道中の嶮難所を通過する方法を教ふる人なり旅人たる者は必ずや己自身に歩行せざるべからず、書籍も亦教師と同じく學問智識の本來の泉源にあらず全く補助器械にして己の誤れる所を正し己の及ばざる所を足し己の適せざる所を切にする所以の道具なることは彼の物體を研究するに要する所の望遠鏡又は顯微鏡などと毫も異なる所あらざるなり、故に眞個に學問を爲さんと欲する者は必ずや先づ自ら思考し自ら工夫し自ら實驗し常に活々として自働せざるべからず、蓋し此の自働力なき人に對しては如何なる良教師と雖も亦如何なる良書籍と雖も恰も彼の膏雨や日光の礎確なる土壤に於けるが如く何等の効果をも收むること能はざるなり、

近時中等教育の狀況を觀察するに世の文運に伴れ長足の進歩を爲し到る處に廣大なる校舍を設け圖書器械標本の類一として備はらざるなく教師の如きは未だ満足すべきにはあらざるも亦年に月に適任の人を得て教授管理兩つながら大に改善し之を十年前の情態に比するに實に霄壤の差あるを見るなり、されば此等の學校に於て薰陶せらるゝ所の學生の幸福は昔人の夢にだも見ることは是はざりし所にして隨て此等の學校よりは智徳共に昔人に一頭を抜きたる人の續々輩出すべきは理の當然と謂ふべきに似たり、然るに實際の結果は概ね此の理想の如くならずして比較的俊秀の出づること少なきは何の故ぞや、思ふに之れが教育に従事する人々の多くは徒に外面の設備規則の完成に急にして學生の内心に獨立自治の精神を養ふことを忽かせにし學生も亦多くは外面の設備規則のみに依頼して學問は主として己自身に爲すべきものなることを知らざるに職由せずんばあらざるなり、

古來云はずや沃土の民は懶惰に流れて進取の氣象に乏しく瘠土の民は奮發心強くして世に頭角を顯はす者多しと、又云はずや俊秀は富貴より出でずして貧賤に生ると、又彼の學者なり事業家なり政事家なり發明家なり凡そ世に一大事業を爲して其の功徳を天下後世に残せし人々の歴史を見よ多くは貧賤より起りて己自身に奮勵し己自身に學問し己自身に工夫を凝せし人々なることを知るべし、是に由て觀れば學問と云はず事業と云はず徒に身外の事物に依頼して常に其の助けを求むるに汲々たる者は決して成効すること能はざるや瞭かなり、

老生は常に我が親愛すべき北辰會員諸子に鼓吹するに獨立自治の精神を以てす而して會員諸子も亦大に心を用ひて常に此の精神を發揮せんことを勉むるものゝ如くにして近來其の實迹の稍々見るべきものあり、而も其の形迹たる多くは日々諸子が一身を處する上に於て見るべくして老生が竊かに大に喜ぶ所なり然れども眼を轉じて學業研鑽の上に就て之を察するに未だしと謂はざるを得ざるものなきにあらず、願くは諸子學業の上に於ても又大に獨立自治の精神を奮起して漫に他に依頼するの心を除却せんことを勉めよ、諸子能く斯の如くにして怠らずんば久しからずして我が北辰校の美風大に昂がり以て今日の一般學風の弊害を一掃するに庶幾からん乎、

### 歌人としての和泉式部 (承前)

八 波 則 吉

### 第五 章 結 論

原野に一木あらんか、縦し甚だ喬大ならずとも吾人の注意を惹くこと頗る顯著なるものあらん、何となれば四面渺茫一の之と頡抗するものなければ也。然るに今之を移して森林の中に植ゑんか、偶々以て他木に秀づることありとせんも焉んぞ衆目を引くこと前者の如くなるを得んや。思ふに和泉式部は森林中の一樹ならんか。

奈良朝の文學は平安朝に至て愈々隆盛を極め、名家巨匠の多き當時の如きは殆んど稀なり。中にも一條院の中宮學を好み遍く天下の才色を集む、女媛輩出の盛んなる國史を通じて寛弘時代の如きは未だ曾て例あらざる也。見よ彼の源氏物語の成りしも此時なり、枕草紙の出でしも此時なり。赤染衛門、伊勢大輔、相摸など凡そ我國女流作家の名あるもの其大半は皆此時に出でたり。誠に百花亂發の時季といふべし。而して和泉式部も亦この時の産なり。嗚呼當時の名花や其一枝を折るも優に美觀となすに足る。況んや満山皆これ櫻花なるをや。是に於てか知る和泉式部は嵐山の一朶たる也。

昔は額田王一代の歌人と呼ばれき。大伴坂上郎女は萬葉女流作家の筆頭に置かれぬ。下つて小野小町と伊勢大輔とは古今に於ける兩星と見るべし。この中小町と伊勢とは詞藻艷麗もとより大家たるに恥ぢずといへども名汗佳肴の今日に殘れるもの甚だ多からざるを如何せん。況んや坂上郎女をや、更に況んや額田王をや。されば競争者多き時代に出でたる和泉式部は、抽象的に式部一個の力量を論せんには實際世人の想像するよりは更に長且つ大なるものあるを知らざるべからず。何となれば森林中の樹木は之を代て原野もしくは市街に出せば時に吾人をして其の豫想外の大

さに驚嘆せしむる事あれば也。これ吾人が人物を論ずるに方つて先づ第一に注意せざるべからざる事項に屬す

然れども又翻て思ふに、夫れ人物は時代を作る事あると同時に時代は又屢々人物を出すもの也。所謂進歩は競争に由て生ずるもの、彼のエリザ朝には百の小沙翁あつて沙翁の大いよく大、十九世紀の英文壇には千の小テニソンあつてテニソンの筆ますく進めり。且つ長と云ひ短と云ひ大と云ひ小と云ふも畢竟は比較上の言に過ぎざるを以て、上來式部が和歌を評するに方ても主に同時(もしくは其前後)の歌人を左右に招いて長を掲げ短を抑へ以て彼女の價値を品嚙したりき。而して今また最後に彼等競争者の姓名を列記し簡單に各自の特色を示して歌人式部が地位に及び以て此論を結ばんとす

貫之死して五十年、才子雲の如く佳人林の如し。中にも公任卿の如き多能の文士尠なからずといへども、まづ文學者としては當時の男子は女子に一步を譲らざるを得ず。殊に歌人として和泉式部が好敵手を得んには之を同時の同性中に撰ぶを至當なりとす。而して當時女媛の有名なるもの多くは上東門院の飛香舎に集まりしを以て、まづ同所の女房よりして之を檢せんに、紫式部日記寛弘五年一月十七日の條に「髮あげつゝゐたる人三十余人、その外にも見え分かず」として宮の宣旨以下拾有餘人の姓名を連ね「次々は例の心々にぞ乗りける」と記して以下を略せり。而して是等の人々は其多少こそあれ何れも和歌を能くしたりしは榮花大鏡其他諸書に見えて明かなり。盛ならずや。就中最も名あるは紫式部と和泉となりし事は争ふべからず。次に一條院の皇后の宮

に清少納言あり。御堂關白の北の方倫子の女房に赤染衛門あり又共に和歌に妙なり。この外伊勢大輔、相摸など各々歌集も存して侮るべからざる歌人なり。八雲御抄に曰く「赤染衛門、紫式部、相摸上古に恥ぢぬ歌人なり云々」されば予は多きが中にも特に以上の六女子を擧げて、當時歌人の代表者となし以て式部が地位を定めんとす。

紫式部は古今獨歩の賢婦にして紫家七論のいはゆる「才德兼備」の文學者なり。行文流麗意匠緻密、千載の下國文界の寶典として貴重せらるゝ源語に對する批評の如きは既に古來の定説ありて茲に論ずるの必要なしといへども、歌人としての彼女が價值は或は眞價以上に賞嘆せられたるにあらずやとの疑なき能はず。夫れ散文を善くするもの概して韻文に拙に、韻文に巧なるもの強ち散文に妙ならざるは古今東西其例多かり。紫女は元來非凡の人、殆んど其兩面に於て圓熟せりといへども尙ほ且つ和歌に於ては之を彼女が文章に比すれば稍々遜色あるが如し。源語中の短歌いづれも艶麗優美、前後の文章と對照して興味甚だ深しといへども、若し單に其歌のみを抜抄して之を検せば俄に索然たるべきものなきを得べきか。家集の百餘首概して變化に乏しく想も亦大率平凡にして云はゞ千篇一律の概あり。之を彼の清新にして多角的なる和泉が集に比すれば其間たのづから多少の經庭ありて存するが如し。予常に之を思ひ歌人として紫女を式部が上に置くことの少しく當を失するにあらざるかを疑へりき。偶々富士谷成章の百人一首燈を見るに此説あり、曰く「紫式部は文かくことこそ類なかりけれ歌はこの式部(和泉)にはいたく劣れるをや」云々。これ甚だ大胆なる議論にして而も予が持論に合せり。抑も我國の歌學論者は作家の人物如何に由

て直ちに其作品の高下を論ずるの弊あり。從來和泉式部が名の動もすれば赤染衛門にすら壓せられんとするの傾あるは全く之がため也。衛門歌に巧なりといへども到底式部が敵手にあらず。然るに其性頗る温厚にして腐敗せる世に比較的貞淑を保ち式部が如き醜名なかりしかば、其人物を慕ふの結果世人遂に其和歌をも眞價以上に尊重せる也。さすがは公任卿卓見ありて、或人この兩女が優劣を問ひしに、式部は赤染と同日の談にあらずと賞し、長明は無名抄に、式部は雙なき上手なりと云へり、誠に當を得たりといふべし。伊勢の大輔は歌人としては尙ほ赤染が下に位す。されど是また温厚篤實、當時稀なる好人物なりしかば其歌たのづから「奈良の都の八重櫻」を見るが如く極美濃艶にして、歌のたもめでたきを以て、實よりは寧ろ花を愛玩せし世には頗る珍重せられし也。されば清輔の袋草紙には紫式部と並び稱して名家となせり。之に反して清少納言こそいみじけれ。彼女が卓勵風發、漫罵調刺の筆鋒は實にすさまじきまで靈活にて、百花繚亂千紫万紅の裡特に一種の異彩を放てり。其歌また奇抜にして異香馥郁たりといへども、元來彼の女は散文を以て勝り、和歌は勅撰集に十二首家集に僅か二十餘首あるのみ。されば取り出で、茲に云ふには及ばざるべし。最後に相摸が歌集を見るに、此人誠に才氣に富み、歌よむ道には頗る達せし人なりけり。例へば春夏秋冬雜夢思ひ等、同じ題目の下に滔々拾餘首乃至數十首をさへ連ねたり。宜なるかな後拾遺以下世々の勅撰集に其歌一百〇六首撰はれて和泉式部が二百〇七首に次いで女流中最も其數の多きもの也。予思ふに歌人としての技倆は相摸こそ慥に赤染が上に居らんか。惜いかな相摸が歌の今日に残れるもの多くは題詠なれば、從て文字にのみ重きを置て却て風

致を損せるものあり。一二を擧ぐれば

我ながら我身をいかになしてかは、見ゆるに見えつ身をばなすべき

つれなしと見つゝつれなく忍ぶ間に、我もつれなき名をぞ立てぬる

思はしや苦しやなぞと思へども、いざやわびしやむつかしの世や

過ぎたるは及ばざるが如しとやいはまし。而して相摸は心私に和泉式部に私淑したりき。見よ式

部が「津の國」の歌より

ひまなくぞ難波の事も歎かな、こや津の國の声の八重ぶきは出で

大空を眺めてのみぞ慰むる、戀しき人は雲居ならねど

は式部が「つくく」と空ぞ見らるゝ思ふ人あま下り來んものならなくに」といへるに酷似し

數ふれば年の終になりけり、我身の果はいともかなしき

は「數ふれば年の残りもなかりけり、老ぬるばかり悲しきはなし」と幾何の相違ぞ。其他「今はいかゞかあはんとすらん」は「うはの空なる眺めをぞする」等、數へ來れば如何に相摸が式部の句調を喜びしかを知るに足るべし。只彼女が歌は式部に比して變化に乏しく、且つ文字を彫琢し強て一首に多くの意を包含せしめんとして却て餘韻を失へるが如き缺點あり。式部ならば單に「頼めたる事はなけれど」とすらりと述ぶる所を「人知れず人待たざりし」とひねりて云ふが相摸なり。尙ほ詳細に兩女の和歌を比較せば互に得失ありて興味多かるべしといへども、茲には其大略に止

めて只相摸が式部に及ばざる所以を示しつ

此外式部が前後に小大君、中務、馬内侍、道綱、母などあれど、彼等は到底式部が敵手にあらざれば之を略せん

要するに和泉式部は同時代に於ける閨秀文學者中歌人としての技料は優に其第一位に在りといふべし。否菅に同時代のみならず上下三千載、我國女流作家の中にて短歌を以て彼女の右に出づる者、予淺學いまだ之を見ざるなり

而して其名聲の甚だ揚がらざるものあるは何ぞや。これには大凡二種の理由あるが如し。一は、云までもなく彼が素行の一件にして、其一は當時彼女が上に二大女星の輝くありて爾來幾百年、常に彼女が光を蔽はんとするものあれば也。何ぞや、紫清兩女これ也。空海寂して百五十年、貫之出で、一百年、世は單に和歌のみを以て婦人の文才を許すに足らずなりけり。換言すれば竹取物語土佐日記等を見て假名文の妙味を悟りし日本は更に偉大の讀本を望みき。時なる哉五十四帖の源語は顯はれ、叙事嶄新の枕草紙は出でぬ。かくて苟も文字あるものは皆其嗜好を彼に轉じて最早三十一字は大文學者たる唯一の資格と稱すべからざるに至れり。而して其後幾何ならずして世亂れ文衰へ、北條足利の時代に及んでは再び貫之以前に復して堂々たる男子すら只々和歌を善くするの故を以て嚴然一家をなし名威並び行はれきといへども、今日なほ平安朝の後宮文學を論ずるに於ては紫清兩女まづ顯はれ、以て式部が光輝を消滅せんとするなり、小野小町何物ぞ、俊成の

女何物ぞ、しかも彼等は各々其時代に於て赫々の光を放てり。嗚呼、式部や其生るゝ時代に於て頗る不幸なりきと云はざるべからず。然り而して彼女が僅に有する名譽の光は、上來屢々云ひしが如く、高潔ならず、貞淑ならず、將た又謙讓ならざる素行のために世人の目より全く消されぬ。由來我國は東海の君子國たり。德行なきものは如何なる技能あり又才藝ありといへども遂に名聲を博する能はず。これ蓋し我國美風の由て存する所以にして大に誇張すべき特点なりとす。然れども一方より見れば一種の潔癖にして狹隘なる島國的根性とも云はぶべし。其罪を悪んで其人を愛するは古來聖賢の理想、予は固より詩人を以て性行に關係なしと云ふものに非ず、文人を以て放逸遊惰なるも害なしと主張するものに非ず。然れども其性行に由て直ちに其詩を誦し、其人物に由て一も二もなく其文を難せんとするが如きは評家の爲めに取らざる也、然れども實際に於ては、古往今來幾多の人士が、性行の爲めに其名を没し、人物の爲めに其藝を斥けられしよ。又現にしかせられつゝあるかよ。嗚呼憤むべきは素行なる哉。而して誰か式部が爲めにミルトンのマコーレイたりクロンウエルのカライルたるものぞ。そも、彼女が多情の性は遂に千載の祟をなすか (完)

## 國民乃發達

碧 山

個人の發達が、其能力を發揮し、其境遇を改善せんとの欲望と、社會民衆の切磋によるか如く、國民の發達も、亦其社會に伴ふ所の欲望と、幾多の國民間の競争によりて、始めて進歩の域に入るを得可し、蓋し各種の國民的要素の激烈なる競争あるにあらずんば、國民が十分に其能力を發揮するの機に到達するを得ず、且つ互に相異なる文化を有する社會が、觸接し、融和し、其結果として、一層高度の文化を生ずるに至ること有り得可らざるなり、之れ即ち孤獨的生活を爲せる國民の、當初其發達の著るしき者あるに拘らず、其文化の發達は沈滞し、其思想考察は狹隘なる範圍の中に限らず、遂に日新の風潮に伴ふ能はずして、廢物と異なるなきに至る所以にして、之に反し、幾多の國民互に相影響して、變遷極りなき大潮流の中に有るものは、時に國民の獨立國粹の保存に關しては、危險あるを免れずと雖へども、同時に愈其國民の諸能力を幾倍せしめて、更に新勢力を勃興せしむる所以なりとす、敵國外患無き時は國亡ふと云へるもの、亦這般の消息を洩したるものに外ならざるなり、

今本邦史に付て、其發達の跡を瞥見するに、我日本民族は當時我國に存在せし諸民族中最優等なる特性を有し、熊襲蝦夷等の諸民族との激烈なる競争に打勝ちて、遂に國民の基礎を置きしも、當初は尙一國民一團體としては鞏固なる状態を有せず、九州邊土の住民は、或は朝鮮に頼り、或は漢土に通して、其印綬を受くるが如き有様なりしが、神功皇后の三韓征討の事あるに及て、始めて日本の團結は愈鞏固となり、益親しく外國の文物を輸入して文化の發達を見るに至りたり、抑も一物の成立せんとするや、其自身耳にては成立する能はず、必ずや之に對するもの無かる可らず、例せば彼我の觀念は、兩者相待て成立することを得るが如し、之を以て眞に日本國民の團

結を見んと欲せば、之と對峙する所のもの無かる可らず、即ち日本に取ては、支那朝鮮は實に日本  
の成立の確かめたるものと云ふべし、神后の三韓征討以來、常に日本の團體を離れて獨立せん  
としたる熊襲の、全く屏息するに至りしは、西方邊陲の地が、日本團體を自覺したるの時とすべ  
く、日本の團結の始めて鞏固となりたるの時期と云ふ可し、斯の如くにして本邦は先づ朝鮮と交  
り、支那に通し、愈外國文明を吸収して其發達を遂げしが、彼の蒙古襲來の如き、豊公の朝鮮征  
伐の如き、近くは日清戰役の如き、如何に國民的精神の鼓舞激勵せしかは、また云ふに及ばざる  
なり、而して彼の西人渡來後は、彼土の宗教文物を輸入し、一部人士の思想上にも少からざる影  
響を及ぼすに至りしが、嘉永以後に於ける西人の壓迫は、國內に於ける氣運の變遷と相待て、急  
轉直下の勢を以て、國運の一新を促かし、遂に今日あるに至らしめたり、三十余年前に於ける東  
洋の一隱遁國の、今や實に世界の列強と雁行して、其が一舉一動は直に極西の外交局面を動かす  
に至りぬ、日本國民が自己の眞價を覺知するの時機愈到來せりと謂ふ可き哉、史界の泰斗レオポ  
ールド、フォン、ランケ、論して曰く、世界歴史は國民史の鞏固なる基礎を離れんか、將に空想  
的はた哲學的の論説と化すべし、乍然又同時に世界歴史は國民史の基礎の上に固着するものに非  
ず、凡そ歴史的生活なるものは、一國民が他國民に發展し、一團體より他團體に變遷する上に於  
て存するものにして、實に一般史なるものは、種々の國民的体系の觸接に於て、始めて生ずるも  
のにして、各國民亦始めて自己存立の自覺に到達するものなりと、嗚呼日本は今や實に世界史上  
の一國民として、所謂檜の木舞臺の上に立つもの、今後果して何等の自覺に到達せんとするか

抑も一國民の隆興が、突如として來る者に非るは、猶一個人の多年の修養を待て、始めて運命の  
寵兒たるを得るか如き耳、今日日本の兎にも角にも盛運に向ひたるは、徳川氏の末葉に當路の關  
老が、國論を排して開國の方針を斷行したる、其れ或は一因たらん、維新後頻りに彼土の文物制  
度を輸入したる、其れ或は一因たらん、然れども今日の盛運を以て、直に是等の原因に歸せんと  
するは、最も淺薄なる見界たるを免れず、其眞因は別に在る有り、何ぞや、他無し、徳川氏二百  
六十余年間泰平の世に於ける國民の修養之耳、此の間文學起り、美術榮ゑ、道路開け、海運通し、  
商工業に農業に、百般の方面に於て著るしき發達を爲したり、加ふるに徳川氏の外交は、宗教上  
はた經濟上より、幕府當初の開放主義を棄て、鎖國主義を取るに至りしと雖とも、西歐諸國中  
特に和蘭の通商を許したれば、西歐の文物は徐々として輸入せられ、殊に八代將軍吉宗の時享保  
五年公然洋書船載の禁を解き、宗教に關せざるものは、之を講説するを許すや、西歐の科學は滔々  
として輸入せらるゝに至りたり、之を以て嘉永六年彼理の艦隊が、邦人の膽を寒からしめたるは  
事實なるも、必ずしも蟹行文字に對する智識の深淺を論するを要せず、要するに彼れの文物を咀  
嚼するの頭腦は、業已に發達を遂げ居たりしなり、之れ即ち驚くべき短日月の間に、海外の文化  
を吸収同化して、今日の觀を呈せしめたる所以なり、嗚呼維新後三十余年間の歴史は、斯の如く  
にして名譽ある一般落を告げぬ、世界の進運は侵々たり、本邦の位置亦三十余年前の位置にあ  
らず、漸く門戸を開て、世界列強の仲間入りを爲すに汲々たりし時期は、己に過ぎ去りぬ、日本國  
民の眞價を試みらるべき世界的舞臺は開かれぬ、燦然たる文化の潮流に浴するの曉には、又滔天



の濁浪澎湃として來るの時あるをも覺知せよ、知らず第二の國民たる年少氣銳の士は、何等の方針を以て國家の進運を企圖すべきか、徒に偉人を叫び英雄なきを訴ふる勿れ、徒に輕躁淺浮なる空想に耽けることを止めよ、國民の元氣は天外より來るに非らず、其れ個人の修養にあるか、其れ個人の修養にあるか、

## 宗 教 に つ き て

龍 山 北 川

宗教問題に就きては近來大に世人の注意を促し、頻に宗教を求めんとするものを發見するに至れり、是れ果して如何なる現象なるか、要するに世人が社會道義の敗類を認識し、宗教に依て之を救はんとするや明かなり、かゝる重大なる論議を輕視するは吾人のなすに忍びざる所なり、故に淺學菲才を顧みず所感を叙述せんとす、

夫れ宗教は何ぞやと論ずるに當り先づ宗教てふ字義を明かにするを要す、試に古に溯て之が語源を求むるに、シセロの言に曰く、宗教といふ語は復讀てふ語より轉せしものなりと、又レクタントイ曰く、宗教は結合より轉じ其意は神と人との結合なりと、其他異說紛々之を擧ぐるに違なしと雖も、何れにしても神と人との關係たる分子を含有せざるものなし、故に吾人は「宗教は神人二昧の信仰なり」と定義せんとす、然らばかゝるもの如何にして生ぜしか、是れまた種々の説あり、或は草昧の時代に於て人民の恐怖心より生ぜしといひ、或はスペンセルの如く祖先の靈魂

を慰藉するより生ぜしといひ、其說千種萬別之を數ふるに堪ふべからず、されど現時宗教そのものを代表す可きものは佛耶兩教なり、果して然らば此二教は如何にして生ぜしかを論究すれば、ともに世上道義の破壊せらるゝを慨し、世人を罪惡より脱離せしめんとする精神より出でしや昭々乎として明かなり、故に其目的とする所は結局人に安心立命を與ふるにあり、

元來世上あらゆる物質は一定不變なるものに非ずして、時々刻々轉化するものなり、故に十五世紀の眞理は十七世紀の不眞理とせられ、彼處の善は此處の不善とせらるゝや既に吾人が認むる所なり、斯くの如く人間は常は變異的性質を有するを以て如何なることにも異説あるを免れず、若し是にして止まざらんか、世界は忽焉修羅場と變じ争鬪喧嘩の絶ゆることなからん、是に於てか社會維持上、又は國家の保存上、之を整理するもの無かるべからず、是に於てか宗教といふもの起りて之を調和し以て、其安寧發達に妨げなからしめんとす、果して然らば宗教は如何にして此大任を全うするか、凡そ人は悉く聖賢たるを得ず、是を以て罪惡は一日も世上より離るゝ能はず、即ち老子の所謂沖なることは社會全般に向て望み得べきことに非るなり、若し世人悉く聖たり賢たりとせば道德の講義の必要もなく、社會の制裁も其要なし、されど是れ大に實地に遠きことにして聖賢は百年か千年かに一人あるかなしものなり、是に於てか世人の罪惡を消滅せしむる方便として法律の必要あり、社會的制裁の必要もあるなり、されど人智未だ開けざるの國にては住民の性質純朴にして之に違背するもの稀なり、然るに人智漸く進み諸般の事物を解するに至ては其智を利用して罪惡を犯さんとす。吾人嘗て聞けり、世界が進歩するにつれて犯罪の數増加すと、

實に然り愚人は罪を犯すを知らず智者反て之を知る、古人が澆季の世とか末世とかいふは全く此方面を觀察して發せし嘆聲ならん、故に罪惡は世上に於ては滅せんと欲するも滅し得べからざるものなれば、之をして消滅せしめんとするものは宗教の力に非ずして何ぞや、吾人は吾人が祖先より能く知れり、古人は電氣の利を知らざりき、然るに吾人之を知る、古人は遠地にて話すこと能はざりき、然るに吾人は電話にて遠地なる人と話すを得、其他數へ來れば屈指するに遑あらざるなり、されど知れ、古人は十の中の一を知れり、吾人は十の中之三を知る、將來幾百年の後には十の中九を知るを得ん、されど其十たるものは到底知るを得ざらん、願ふに天地には一種不可思議の力を存するあり、之を知らんと欲するも知るべからざるなり、試みに夕陽將に西山に沒せんとするのとき青紫の雲相交りて天の美を示すを觀察せよ、如何に美妙に構造せられたることよ、固より理學者は是れ色の合成の致す所なりと解かん、されど誰がかゝる構成をなすかと問はゞ、恐くは答ふる能はざらん、是れ吾人が絶對的に宗教を有する證に非ずや、故に天地には一種の不思議なる力の存在するは決して否定すること能はざるなり、此力を名けて神ゴットといふ、世界は此の神の支配の本に成立す、故に之に對しては絶對的服從の義務を負ふものなり、神は絶對的のものなり（世上の萬事は皆相對的なり）。故に之に向て説明を加ふる能はざるものなり、是に於てか吾人々類は日夜犯しつゝある罪惡を此神に對して懺悔し、常に惶々然として罪を犯さんことを是れ恐れ、己が身は神に一任し、以て安心立命を得、然る後人の人たるの道を全うせんとす、若しかゞる境界に達せば國家的觀念は直に増進せられ、社會の秩序は井然たるものに至らん、世人徃々我

は宗教を有せずと、宗教は由來生れながらにして是を具ふ、吾人は之を信せざらんとして信せざる能はざるなり、何ぞ其言の暴にして風癪白痴に彷彿たるや、

既に吾人は宗教を信仰せざるべからず、是れありて初めて身を處するを得るなり、或者は叫んで曰く、道德さへ完全ならば宗教の要なしと、固より然り、道德完備の人は他に求むるには及ばざるなり、されど是れ果して實地の議論なるか、吾人は斷じて其實地的信實のことにあらざるを信せんとす、或は或期の間に一のかゝる人あるやも計られず、されど萬年に一のものを以て萬事を理せんとす、其無理たるや明なり、苟くも社會全般の人類を律せんには此宗教を措きて他に良法を發見するを得ざるなり、然らば吾人は如何なる宗教を取るべきか、釋宗演曰く、總て宗教なるものは道德的方面と哲學的方面との兩面を有せざるべからずと、是れ實に吾人の意を得たるものといふへし、由來宗教は世人を救護せんとするを目的とす、故に十分道德的ならざるべからず、又縱令道德的なるにもせよ世の進むにつれて學理に矛盾するものは人之を信せず、信仰は宗教の本躰なり、故に十分哲學的ならざるべからず、見よ佛教にまれ基督教にまれ悉く此兩面を具備するものなり、されど其取る所の度に至ては甲乙あるを免れず、果して然らば基督教の解く所は何ぞや、天に神あり萬物を創造して之を主宰すと、又曰の、神は其子基督をして一切衆生を罪惡の淵より救ひ上げしむと、何等の言ぞや、學理的より之を觀察すれば是れ一の謬語のみ、されど其語のたとひ偽なるにもせよ、其神の慈悲の念の深き雙手をあげて之を感謝せざるべからず、是に於てか基督教徒は萬斛の熱涙を以て之を信するなり、翻て佛教を見よ、其説く所固より深遠、其

教ふる所高尚にして愚人之人に入る難く、爲めに皮相の地獄極樂説のみ妄信す、是兩教はともに中庸を失するものといふべし、之が爲め往々宗教は迷信なりと難せらるゝなり、之を要するに基督教は情に強く理に弱く、佛教は理に強くして情に弱きもの、ともに偏見なりといふべし、此偏見こそ速に改革を要すべき点にららずや、抑人は智の貴ふべきを知らず又情の貴ふべきを知らざるべからず、偏すれば必ず弊あり、智なきの情は亂に走り、情なきの智は亦狂に赴くの害あり、既に吾人は宗教は道德、哲學二方面を並せて進むべきを述べたり、然らば現時吾人の信するに足る宗教ありや否や、

世界は宏々たり漠々たり、其間の存する宗教は一にして足らず、佛教あり、基督教あり、神道あり、道教あり、回々教あり、婆羅門教あり、モルモン教あり、儒教あり、是れらは既に世に噴々たるもの、其他山川草木禽獸蟲魚等の拜物教を算すれば其數幾何そや、されど上述の二要件に通するものいくはくある、何れも偏僻に陥り、能く吾人の意を充すに足るものなし、是に於てか種々の説あり、井上哲次郎氏曰く、道德は即ち宗教なり之を要するに先天内容の聲を本とするの倫理、即ち小我を捨て、大我に従ふの倫理上實行上最も効力ある主義にして諸宗教共通の点なり、是故に一切の宗教の形体を離れて我教育界現時の缺点を充たすべきは此の如き倫理をわきて他に求むべからずと、實に氏の言の如きは道德さへ完全なれば宗教は不必要なりとの意なる如し、固より一理なきに非ず、されど此言は理に奔りて實地に遠きもの、此紛雜なる世界に於て獨り聖賢にとくが如き口調を以てす、唯理の然るを見て結果の然らざるを見んか、然らば吾人は如何にすべきか、凡そ言ふは易く行ふは難し、理論上はよきかの如き觀あれど、實地の点にては千思萬慮を要するなり、吾人は多きを望まず、唯、現時の宗教を改良し、即ち各自の弊を除き、迷信は絶對的之を排し、哲理的根據を具へ且道德的信仰を有する宗教を形成し以て人心を救はんこと、是れ吾人の切に望んで止まざる所なり、若しかる宗教形成せられんか、吾人は雙手をあげて之を信せんと欲するなり、固より其宗教の佛にせよ、基にせよ、是れ吾人の敢て問ふ所に非ず、佛基督各其長所あり、短所あり、故に其長所を取りて矩を捨て、能く世とともに進化したる宗教こそ、今日の世を救ふべき宗教なれ、嗚呼此宗教問題は誰人も輕視すべからざる重事なり、聊か感ずる所を陳べて識者の高評を仰がんと欲するなり、

### 慷慨悲憤之助の檄を讀む

○彼が慷慨を疑ふ

北 海 浪 雄

北辰の光芒また昔日の光輝を放たず五百の青衿惰眠に耽る此時北辰會雜誌三十五號に「一部生諸氏に檄す」と題し冷罵熱嘲大に一部生の優柔を慨し去歲撰手の無氣力を憤る覆面の士顯はれ自ら稱して慷慨悲憤之助と云ふ何ぞ意氣の壯なるや彼が聲は實に空谷の聞寂を破る聲音なり北海生亦彼が爲めに意の強きを覺ゆるなきに非らざれども唯惜くは至誠熱情なく抱負畫策なく空しく放言危語に終りしを放言危語をして唯それに終らしめは尙可なりと雖も累を他人に及ぼすあるに至り

ては断して許すべからず曾參の母も機を下るなきを保せず余は茲に去歳の撰手の爲めに其志を辯して誤解者の惑を解かむと欲す

彼が一部舊撰手に對する攻撃の論点之を要するに左の四點に歸す

- (一) 全然撰手競漕を廢止すべきを主張したるは卑劣なり
- (二) 撰手の名目を甘受しなから出て戦はざるは何故ぞ
- (三) 勝敗の數明なるありて戦に臨む意なかりしか
- (四) 學課匆忙に名を藉りて其撰を辭せり

余は余が聞く處の事實によりて彼が爲めに説明の勞を與へむ

一、夫れ撰手は一時的の者にして永續的の者に非らず去年の撰手必しも今年の撰手に非らず今年の撰手又必しも明年の撰手に非らず要は有力者の立つに在り従つて其名目の專有的の者に非らざるは明なり去歳出漕の一部撰手は今年其撰を辭せりこれ事故の止むを得ざるあらば亦奈何とも爲し難し且夫れ彼等は各自個人として辭せしのみにして決して一部撰手を全然廢止せしめむとの意は寸毫も存せざりき况や撰手競漕の廢止をや否彼等は有力者の代りて立たむことを懇願したり而も代りて立つものなく奔走の有志斡旋其効なく百計玆に盡くるに至り一部番組係は止むなく當時の係長上原教授に其由を陳し二部三部番組係に交渉し兩部の競漕を求めたり然るに越えて一日三部番組係は更に又係長に競漕場裡より退くを申出て遂にかの結果を見るに至れり三部の意向は余が知らざる所なりと雖も以上はこれ本年春季競漕會に於ける經過なり然らば一部が撰手競漕全廢

説を唱へしと云ふが如きは彼が虚構の言たる明なり彼が所謂慷慨は知るべきのみ

二、去歳出漕したる一部撰手の多くは今年其任を辭しながら猶撰手の名の下に出漕したりこれ實に彼の言の如し然らば彼等は自家撞着を爲せしか、あらず、抑も今年の競漕番組に於ける撰手の各目は番組係が出漕申込者中より比較的有力なるものを撰び各部三隻宛つをつくり以て舦裁上假に此に付せしものにして名目如何は出漕者の關知せざる所なり故に彼等が出漕は矛盾に非らず撞着に非らずあゝ誰か撰手の名目を甘受したりと謂はむ彼等は幸にして未だ撰手の名目に隨喜渴仰する程の名譽の奴隸とは化し了らざるべし運動屋とは墮落せざるへし

三、彼等は敗るが爲めに敵に背後を示すが如き卑劣漢には非るべし否彼等が胸中既に勝算の歴々たるもの有りて存せしや疑なし噫彼等をして截然事情の纏綿より斷絶を得て奮然蹶起するを得せしめば何ぞ他部に月桂冠を戴かすめむや想起せよ去歳の役彼等が實力の如何に猛然たりしかを而して去歳の撰手は今春競漕の當時在學せり彼等何を苦むでか遁逃せむ

四、然らは何が爲に名譽ある戦場に臨まざりしか且又事情とは何ぞや或者は病に斃れたり或者は學課に蹉跌したり身軀の疾病は舦格検査に於て校醫の認むる所學課の蹉跌は擔當教授の知る處此れ決して口實に非らずして眞實なり猶且幾多繁累の纏綿たるものありしに於てをや唯其れ多數が同時に此の如かりしを以て人或は異となさむ而も事實は狂くべからざる者なるを奈何せむ却て怪む新進の士は此際何ぞ奮つて起たざりしか嗚呼一部生の冷淡不熱心は遂に此事を見るに至らしめたる一大理由が難者曰く疾病事故練習の劇に堪えずむは練習を爲さず唯員に競漕に加はらば如何

と噫これ責任の語の存する間は決して爲し得べからざる事ならずや

● 撰手は責任を負へる犠牲なり

一點の微火激すれば千里の野を焚き一端の同情感すれば鬼神を泣かしむ志士は已を知る者の爲に死し犬死は丈夫の欲せざるところ嗚呼人生意氣に感しては身命も物の數かはそれ撰手とは犠牲の躰裁よき又の名なり犠牲に對して同情なくむばそれ天下國家を奈何せむ伯牙の斷絃に見よ須賈の一縋袍に見よ社會とは是にこれ同情より成れる所帯なり今や兩者渙然氷釋して歡笑互に手を握る時此不祥の言を爲すは固より余が欲せざる所なりと雖も去歲大野川の役深意あるにあらざりしならむも二部撰手が一部撰手に加へたりし侮辱に對して大多數の一部生は如何なる態度を以て此を見しか又兩度撰手となりて爲に白玉樓中の人となりし某氏に對して幾人か同情の涙を注ぎし此れ一部生の冷淡不熱心を顯さずして何ぞや噫此の如くむば誰か又奮ふて立つものあらむや余は茲に一部二百の青衿に向つて告ぐ沈黙時あり今や徒に阜上の鳥を學ふ時に非ざるなり飛むて天を衝け嗚て人を驚かせ余は刮目して明治三十七年の春季競漕裡に於ける一部生が捲土重來の活勸を見む

● 彼が忘言を信するものあるを恐る

余は全校諸君が悲憤之助の忘言に惑はされ一部舊撰手を以て校の平和を攪亂せむと欲する惡意を有せしものと誤解するを恐れ茲に聊か以て一部舊撰手の爲に冤を雪かむと欲するのみ我豈辯を好まむや唯不文意を盡さず推讀を給はゞ幸甚

悲憤之助今猶健在なりや仄かに聞く足下は一部生なりと足下眞に慷慨家を以て自ら任する者な

らば何を奮然起て事に當らざりしか無責任の毒語は足下の所謂慷慨か若し又彼等に對して所思あらば何ぞ堂々往いて會談せざりしか匿名は言責を重する所以に非らず文辭は誤解を來す恐あり余は再び貴重なる北辰誌上を無益の論争に費さざるべし、往け、聞くが如くんば彼等は足下と會し大に足下が曲說誣忘の罪を問はむと欲すと

血氣之氣、血盛則亦盛、血衰則亦衰、故不足恃、

浩然之氣則不因血盛衰以爲盛衰、而常充塞身心、

至死不衰不變、

(洗心洞劄記)



雜 錄

歴史的諺 (承前々號)

浦 井 恒 堂

Hannibal ad portas (拉)ハンニバル門前に在り、非常の驚怖を現はす語にして羅馬の大雄辯家キケロの用ひしより始まる第二次ポエニ戰役(紀元前二一八一—二〇二)に於てカルタゴ將ハンニバル大軍を以てイタリアに侵入しチチノ(二一八)トレビア(二一八)トラシメヌス(二二七)の大捷を得向ふ所披靡せざるは莫したる羅馬人の擧げたる獨裁官ファビウス、マキシムスの政策機宜に適ふありて聊かハンニバルの銳鋒を挫くことを得しかども惜しむべし羅馬人の多數はファビウスの對ハンニバル策を認めず更に兩執政官バロ及パウルスに大兵を授け一舉して勝負を決せむことを欲す兩將アプリア州なるカンネーに於てハンニバルを要撃し一敗復た起つ能はず(二一六)此役羅馬兵の死する者無慮七萬羅馬震駭すハンニバルの將マハルバル直に羅馬に向はむことを主張したるもハンニバルはカルタゴ兵の攻城の法に熟せざると多く其兵を損せむことを虞り許さず轉して南以太利を徇へむとし羅馬は僥倖にして免ることを得たりされど羅馬に次ぐ大都なるカンパニア州のカプアは戦はずしてハンニバルに降り爲に羅馬は大痛撃を蒙れりされば羅馬人は日夜カプア克服の策を講じハンニバル南イタリア地方の征略に力めつゝありし隙を窺ひ急に兵を發しカプアを圍

むハンニバル之を聞きカプアを救援せむことを圖りしが事急にして策の施すべき無し乃ち兵を率ゐて直に羅馬に向ひ城下に陣す蓋しカプア攻圍の兵之を聞きて還り救ひカプアの圍自ら解けむことを期せしなり然るにカプアの攻圍軍能く其任務を守り羅馬の急を聞くも動かざ是に於てハンニバルの謀計齟齬しカプア終に陥る(二二一)然り而して羅馬馬人がハンニバルを畏るゝこと鬼神の如くハンニバルの名は兒啼を遏めきといへは其兵の羅馬城外に現はれし時羅馬人驚怖の情察可しさればキケロの一度此語を用ひしより永く恐怖を表示する語とはなれり

Hercules' Choice Hercules am Scheideweg ヘラクレスの選擇とは決斷を表はす諺にして此ヘラクレスに關する説話は後世詭辨哲學者(ソフィスト)プロロヂコスに出づといへり曰く勇士ヘラクレス青年の頃野外に遊び岐路に出で佇立躊躇孰れの路に因らむかを思へり既に二人の美婦同時に兩路より現はれ競うてヘラクレスを招く其一をバーテューといふ曰く妾は從はゞ種々の艱難辛苦に遭遇すべきも名譽は長久に天下に傳はらむと他の婦をプレジューアといふ曰く妾に從はゞ天下の快樂欲するまに／＼求めて得ること莫けむとヘラクレス沈思稍久しく頗る惑へる態なりしが終に心を決してバーテューに從へりとぞ

Hercules' Pillars Hercules' Pillars ヘラクレスの柱とは今日のジブラルタル海峡の古名にして歐州のジブラルタル岸のカルペ岩とアフリカのセウタ岸のアピラ岩とは元連續しけるがヘラクレスは地中海と大西洋とを聯絡せしめむと欲し之を劈きしかば今日の如く海峡となれりとぞ中世時代に於ても此名用ひられしが七一年サラケンの將タリクアフリカより此地に上陸して西班牙を征服し

けるより此地を Gebel al Turk に呼び訛りてジブラルタルと稱す古代の人は此海峡を以て世界の極端と考へられしを以て I will follow you even to the Pillars of Hercules といふ諺起れり如何なる世界の果まで追ひ行くべしとの意なり

Hercules' Labour 獨 Heraklesarbeiten 非常なる辛苦勞力の意ヘラクレス説話に有名なるミケネ王エウリステウスの命を奉じ十二の難業に服し盡く成功せりといふに出づ It requires more than the Labour of an Hercules なづいふ其他ヘラクレスは古代希臘人の理想的英雄なるを以て巨大雄偉等と同意に用ふることも多し Herulean frame は身體の魁偉なるを云ひ Herulean club は太き杖をいふか如き類なり

Heneka (希臘) ある發見者發明をなしし時の歡聲學生の數學問題の解釋に惱める後忽然解説を得るや拍手ヘウレカと呼ふ此語二千年前シチリアのシラクサに住めるアルキメデスの口に發せられしより相傳へて今日に及べりアルキメデスは古代の大數學物理學者なり嘗てシラクサ王ヒエロン其金冠に銀を混せることを疑ひ技師の詐僞を見出さむとし冠を毀損せずして之を驗するの法無きやをアルキメデスに諮るアルキメデス其法を知らず日夜焦慮措かさりしが一日浴場に至り充滿せる浴槽に入りしに其湯の溢れたるを見て身體の容積と其溢出したる水とは同量なることを知り従の金冠を水中に浸たし同量の純金塊と比せば容易に其純金なるや否を決定し得べきを悟りければうて彼歡喜に堪へず衣を着くことを忘れヘウレカ(余は發見せり)と連呼して家に馳せ還りきといふ彼は又槓杆(レバー)の理論を發明し嘗て人に語りて曰く余にして地球外に支柱を得ば月を動か

すこと意の如くなるへしと此學者の晩年羅馬との戦端啓けシラクサ羅馬艦隊の攻圍を受くアルキメデス其智囊を絞り大に防戦の具を作りて羅馬兵を防禦せしかば三年の時日を支へたり其防戦の具の一は城壁の後に大木巨材を懸け之に大なる機發の器を設け敵船の城壁に接近するに及び之を船中に擲入す敵船之がために沈没する者多し其二は數多の大木材を水中に沈め其木材に鉄鉤を作り更に機關を設けて高く敵船を鉤り其船を擧げて反轉し最後に城壁に向つて其船を抛擲し徹塵に之を碎く其三は巨多の大鏡を集め巧に之を配合して天日を取り之を反射して敵船を焚けり羅馬將アルケルス城固うして抜けず徒らに士卒損するを以て遠く城を圍み持久の策を以て城兵を屈せむと欲すシラクサ人敵艦の遠く去れるを見て謂へらく羅馬彌久曠日戦に疲れて退くと太に守備懈る偶ま城中大祭あり市民終日歌舞酣飲夜に入りて熟睡す城中に反者あり陰に之を羅馬軍に報す羅馬決死の兵夜陰に乘じ壁を踰れて城に入り城門を開き全軍鼓噪して急に逼る城中能く禦く者無く城竟に陥る初羅馬將アルケルスアルキメデスの難に殉せむことを惜み其兵に命じ之を生擒して致さしむアルキメデス猶寢ねす室中に在りて城の己に陥りしを知らず杖を以て圖を砂上に畫き熱心數學的考案に耽る羅馬の兵士入りて之に迫るやアルキメデス之に謂て曰く請ふ吾が圖を踏破する勿れと兵士憤を發し之を殺す壽七十五(紀元前二二二)マルネルス城に入り深く之を悼み禮を厚くして葬るアルキメデスは同じ高と底とを有する圓錐球圓柱の容積は一と二と三との比なることを發見して甚た得意を催ほし常に曰く我墓表として之を用ひんことを望むと後人其言の如くす

Crane of Ibykos 獨 Kraniche des Ibykos イビコスの鶴とは因果應報觀面の意なりイビコスは南イ

タリア希臘殖民地レギオンの人紀元前五百三十年頃に榮わたり抒情詩特に戀愛詩を以て一時に鳴れり性旅行を好み永くサモスに留まり著名の僭主タイラント（ポリクラテスの朝に客たり去てイスマア祭典を看むためコリントスに赴かむとする航路に於て海賊に襲はれ其殺す所と爲れりイビコス將に死せむとするや鶴の附近に飛べるを見叫て曰く鶴よ鶴よ余かために余か横死の證人となり余か仇を報せよ余は詩人イビコスなりと後イビコスを殺せる賊徒コリントスの市場に在りしに偶ま鶴の一群空中を過ぐるを見色を變じ竊に相戒めて曰くイビコスの鶴在り馬と時にイビコス慘死の報希臘各地に喧傳せるを以て此私語を聞ける者大に怪み走りて之を警史に告げしかは直に拘へて之を鞫問す賊徒竟に辨する能はず服罪す獨逸詩宗シルレル此傳説に依りてイビコスの鶴と題する一篇を作れり

*Ilja a des Juges a Berlin* (佛) 伯林に法官ありとはフレデリキ大王時代に於て國民が法官を信用せる著明なる例として人口に膾炙せる語にして又司法官の完全なる獨立を表示する常套の言となれり此語は歴史的事蹟としては信憑の價值なきサンスシーなる風車營業者に關する傳説に起り佛國詩人アントリューのサンスシーの磨者(*Le manieur de Sanssouci*)と題せる詩より有名となれり此詩に於ける磨者の言然なり若し伯林に裁判所無き時にはといへるを簡約に標題の語に改め廣く行はるに至りしなり始フレデリキ大王は最も司法官の獨立を固うせむとを冀ひ嘗て(一七五二年)司法大臣に給へる訓示にも法律は言ふべく君主は沈黙せざる可らずといふ語あり大王ポツダム附近にサンスシー離宮を興し多く之に住みしが離宮を距る遠からざるの邊に大なる風車ありて日夜驪

轆の聲を喧しきを厭ひ之を取除かむとし再三買上を命したれと磨者は心ありてか又は頑愚の爲めか祖先傳來の業なれば其地を去るを欲せずと主張し玉命を峻拒して聽かず流石の大王も逆鱗ありて汝王命を蔑にせば立ち退きを命すべしと宣ふ主人驚かずして曰く若し伯林に法官なくむは則ち止む大王不當の處分を爲し給はる余は大王を相手取りて出訴せむのみと大王此言を聞くや平素苦心し居たる司法官獨立の勢既に成り人民の法官を信任するの深厚なるを悦び勞して主人を歸へし爾後却りて風車の音を聞くを樂めりといふさればサンスシー公園に遊ぶ者は年古りたるフレデリキ大王紀念の風車を觀るべしとぞいふなるは恰も吾邦にて何れの地にも辨慶の遺蹟あるの類のみ此風車の説話に反しフレデリキ大王か司法官の獨立を尊重せし餘り大失策を爲せる實説ありこれを水車業アルノルト訴件とす一七九九年の出來事にしてアルノルトといへる水車營業者あり地代未拂の件に因り法廷に訴へられ水車沒収の宣告を受けしが之に服せず控訴して曰く吾が地主なる郡長は其園内なる養鯉池に水を引くが爲に余が水車には水の懸らす營業休止の止むを得ざるに至りたるなれば余に於て地代を拂ふの義務なしと上級法廷更に審問の後アルノルトの上告を棄却せり於是彼は大王に直訴せしがは王は之を聽くと共に心中に疑惑を起し相手郡長なるを以て法官等之を憚り理否を曲げしにはあらざるかと侍從武官を遣はし實地を取調べしむ然るに侍從武官は王が既にアルノルトの言を信せるの色あるを察し詐り奏しけるは水車業主人の言の如く水車に水懸り居らずと王は竟に侍從武官の諛言に誤られ直に裁判所に命じて曩日の判決を取消さしむ法官頑として従はず陳辨甚だ勵む大王を是を以て法官が已を欺かむと試むる者と誤りし激怒して其職



を黜く後王遊獵に出て偶ま嚮の水車の邊を過ぐ水車の運轉毫も變せざるを見て大に驚き更に審問後狡獪なるアルノルドが巧に王を欺きたる者なるを發見しければ王は深く輕卒の措置を爲せるを悔い法官を復職せしめ自ら罪を謝しきとぞ

Il n'ya a plus de Pyrenees (佛) ビレネー既に亡しとは一切障礙の既に消滅したるをいふ一七〇〇年西班牙カカロ二世殂落し嗣無し先是獨逸帝レオポールドは其次男カカロを立てむとし佛王ルイス十四世は其孫フィリポを以て候補者とし其に瀕死の西班牙王を促かしマドリッド宮廷に於ける獨佛兩黨は凡ゆる手段を弄して運動激烈なりしが西班牙王は法王の説を聽き佛王孫を以て皇儲と定め遺言状を作れり一七〇〇年十一月王終に殂し遺言状發表せられ佛王は愈は其態度を定ざるを得ざる場合となりぬ因て急速樞密會議の開會となり王孫の西班牙王たるを承諾に決し一七〇一年より一七一四年に互る西班牙王位繼承戰役を惹起するに至りぬ此ルイスの語は王孫フィリポカ巴理を發せむとするに際し告別の語なり古羅馬のキケロがケイザルのガリア戡定を祝してアルプ山消滅せりと絶叫せると同意にして佛西兩國の疆界なるビレネーは既に亡しとなり

Impeia Marlana (拉イ)マンリウスの軍令嚴重の節度孔明馬謖を斬ると同義なりマンリウス綽名をトルカツスといふ夙ま驍勇を以て名あり嘗てガリ人の勇將と格闘して之を殺し其帶びたる黄金の頸鏈(トルケス)を得しかは國人敬うてトルカツスといふ此人執政官(コンソル)在職の時(紀元前三四〇) 拉丁戰役あり敵勢猖獗同僚の執政官デキウスムス殉難の事あり事態頗る急なりしがマンリウス能く兵を用ひベスピオ及ヒトリファヌムの二大捷を得終に大亂戡定の偉功を奏しき此役

マリン軍令を定めて曰く羅馬の將士等單身敵陣に入り敵と格闘を爲すことを禁ず若し犯す者は死刑に處すと偶まマンリウスの愛兒二三の騎兵と共に敵陣に偵察せしに突然として敵の騎兵に逢ふ敵兵呼で格闘を求むマンリウスの子出て、格闘に勝て之を驅逐し敵兵の甲冑を奪うて之を肩にし喊聲を發して馳せ歸り之を父に示すマンリウス其子の勇を賞せしが後軍律を破るの罪を正し斬て以て衆を徇ふ

In usum Delphini (拉) デルフヘニは佛のドーフェンにして佛國皇太子の通稱英國皇太子をウェールズ親王といふが如し路易十四世の時モンロージエー皇太子養育主任たり當時の文豪ボスエー及フーエに命じ皇太子閱覽用のため希臘拉丁古典を編輯出版せしむ其叢書を名けてイン、ウスム、デルフヘニといふ皇太子御用の意なり二人は古典の句にて些少にても如何はしき者は容赦なく削り去りければ古典の名句も多くは不具となり了れり是に因り後世に至り此語は當局者の偏屈なる道徳風紀論のため文藝界に干渉を行ふを嘲るに用ふ

Ipsa dixit (拉) 希臘語 antos epha 譯にして彼は如此いへりの意根據なき議論をいふ其は君だけの説(It is your ipsa dixit) 其は彼等の論に止る事(It is their ipsa dixit) などいふ類なり此諺は希臘哲學者ピタゴラスより出たり此人小亞細亞なる希臘殖民地サモスの人なりしか(紀元前五八二一五〇七) 専ら南イタリアなるクロトンに住めり此人は希臘哲學史に於て一新期を劃せる偉人にしてフィロソフヒーといへる語も此人より始まれといふ一日人彼の學殖を歎賞しけるに彼は微笑して曰く余はたゞ學を愛するに過ぎずと其よりフィロソフヒーの語生じたるにてフィロは愛の義ソフオスは

智識の義なり彼の哲學を數理哲學といふ數を以て宇宙の根元と爲したればなり其説に曰く点は一の數にして点發達して線となる則ち二の數なり線の發達せる者を平面とす三の數なり平面の發達せる者を立體とす四の數なり是を宇宙發達の極とし一三三四を合せて十の數を得是聖數なりと彼は何事にも此十の數(Decade)を適用し十善十惡を算し宇宙(コスモス)の説明には十の數を充たさむかたの日月火水金星土星の他に Central fire と counter earth との二者を設けたり彼はまた靈魂不滅輪廻の説を唱へクロトンに於てピラゴラス社を組織し數百人の弟子と共に肉類を絶ち中世時代の庵僧的生活を爲せり其徒のピタゴラスを渴仰信用するの厚きピタゴラスの言といへば毫も疑念を狹まず一意に眞理と爲せりされは彼(ピタゴラス)は如此いへりとの語イプセザキソットは早くより諺として行はれたるなり

Jaquerie (佛) 我邦にて竹槍席旗といふ如く百姓一揆のことにして一三五八年に發せる佛國農民の亂より始まるジャックリーは Jacques Bonhomme より出て英にて Johnny Goodman 獨にて Hans Simpel といふ如く我邦にていはく馬鹿の三太郎の如く農夫の純朴なるを嘲する語なり時恰も英佛百年戰役に際し國王ジョアンは捕虜となりて英國に在りしか農民は永き戰亂の爲め生を聊んせざるにも拘らず貴族輩の誅求熄まさりしかは多年鬱積せる不平一時に爆裂しジャックポントームと自稱せる巨魁現はれて敏峻しければ四方響の應ずるが如くピカルデー、ジャンバーニユ、オルレア地方盡く亂れ至る所貴族の邸宅を襲ひ焚掠を縦にし熄む所を知らず貴族輩大に愕き聯合して之に當り僅に之を戡定するを得たり是に因り各國共に農民の亂をジャックリーと呼ぶに至れり

Kalendas Graecas (拉) 英 Never 獨 Nimmermehrstag の意、あり得ざることをいふ我俗語に一昨日來よといふか如し今日の俗一月を週に分ちて第一の日曜日といふか如く古羅馬の人民は一月にカレンド、ノンネ、イデスといふ三の重なる日を設けカレンド後三日ノンネ前二日といふ如く日を算す彼のケーザルの遭難はマルチウス(二月)のイデスなりしは人の知る所にて十五日なりきカレンドは毎月の初日にて我邦のついたちといふか如し昔は羅馬の神宮總裁(ポンチフェックス、マキシムス)は毎月此日に於て人民をカピトリノ丘に召集し其月の満新月の日祭日忌日を通告したればカレンドは召集の義なりといふ又羅馬の俗は此日に於て借金の子諸賣買の精算を爲すこと我邦の月末の如くなりきされは此カレンドは羅馬特有の者にして希臘に行はれざること勿論なれば希臘のカレンドといはく決して無しと同意となるなり此語はアウグスツスより始まる帝ある時兵士より強請的に給料支拂の要求を受けしに希臘のカレンドに支拂ふ故相待てよとて之を峻拒せりといふ

Krimper system 實力を隠蔽して敵を欺くの法にして虚勢を張りて敵を脅かすの反對なり此語普魯西亞軍務大臣シャルンホルストより有名となれり普國は一八〇六一一八〇七年ナポレオンと戦ひ一敗復た起つ能はずチルジツト條約に因り普國領土の半を奪はるゝの慘狀に陥りたるにかて一八〇八年巴黎條約により普國常備軍を四萬二千に制限せらるされと此屈辱は却て後年の幸福を齎らすの媒となり普國の官民を擧げて臥薪嘗膽會稽の耻を雪かむことを期しスタイン、ハルデンベルグの普國改造の大計畫の實行となれり此改革に際し軍政の當居者シャルンホルストは諸般の改

革を行ふと同時に普國戰鬪力の充實を圖り兵役の年限を短縮し必要欠く可からざる教育を施すに止め直に豫備に編入し代るに新兵を以てし新陳交代を行ひしを以て常に條約規定の兵數を養ふの觀あれど軍隊的訓練を受けたる民多く一朝事あらは皆以て用ふるに足れり不幸にしてクリュムペル法の名のみ傳はりて此語の起源詳ならず一説に因ればクリュムペルは毛布匠の意にして此法に因り劈頭第一に豫備に編入せられたる徒に毛布匠多かりしより出たりといひ一説に因ればクリュムペルは老廢兵の義にして如此不完全なる教育法にては老廢兵と擇ふ無く萬一の際有力の働覺束なしと攻撃を加ふる者ありしに因るといへり

Labyrinth 娛樂用の迷園(八幡藪)又極めて廣大の建築をいひ轉じて難事解し難き事物等をいふ此語は古代埃及メーリス湖畔にありし殿堂の名より出て紀元前三〇〇〇年頃埃及王アメンムハット三世の興せる者なりといふ希臘歴史家ヘロドトスか此殿に遊べる記事に依れば三千餘の室ありて其半數は地下に在り一度此殿に入る者は嚮導無くは再ひ外に出つること叶はず是に因り一種不可思議の構造あるか如く傳へられたれども恐らくは誤解にしてヘロドトスの意は室數甚た多く大の通路錯綜し不知案内の輩は方向に迷ひ困却すといふに過ぎざるならばといふ埃及學者ブルグシユの説に依れば此語は埃及語のレピ(神聖の建物)とレヒント(溝渠の入口)より轉訛せる者にしてメーリス湖はニル河の洪水防禦の爲めに作れる人工の湖にして此殿は此湖とニルと湊合する地に在ればなりと此埃及なるラピリントより希臘人はクレタ島のラピリントの説話を設け(アリアドネを見よ)愈よ不思議の者となれるなり

Laconic 語簡にして意長きをいふ スバルタはラコニア州の首都なるを以て其人民をラコンといふラコニックは其形容詞なりスバルタ人は尙武を以て國是と爲し多辯を以て懦弱となし必要の他沈黙を守り一度口を開けば語簡に意明なるを尊び之を以てスバルタの國風とせりされはラコニックの語は Laconic wit, Laconic brevity, Laconic despatch の如く用ひらるマケドニア王フィリポ書をスバルタ政府に送りて脅嚇して曰く吾兵一度スバルタに至らば全市を破壊して汝輩遺類無からむとスバルタ政府之に答ふるに唯一語「」を以てせり蓋しマケドニア兵果してスバルタを占領するを得ば左もあらむか其は到底不可能なりといふなりユリウス・ケーザルはポントス王フルナケスとゼラに戦ひ一戦勝敗決す(紀元前四七)ケザル捷を羅馬の議政官に報して曰く Veni, vidi, vici(余は行けり余は敵を見たり余は克てり)と獨逸帝カロー五世獨逸教争の亂(シユマルカルデン役)に於てミユールベルグの戦に克ち敵將サクソニア公フレデリキを生擒し喜て曰く Ich kam, Ich sah, und Gott siegt(余は行けり余は敵を見たり而して神は克てり)と(一五四七)クリムの役佛の驍將マクマオン聯合軍のセバストボル總攻撃に當りマラコフ塔を占領す偶ま流言あり露兵退却に際し地雷を装置し置けりと總督傳令を馳せて之を告げ退却を勸告す將軍鉛筆を執り紙片に數語を記し之を傳令に附す紙片記す所何の語ぞ曰く J'y suis et j'y reste(余は是所に在り余は此所に留る)と Landgraf, weide hart! 方伯堅くなれとは國民が軟弱なる政府を罵り強硬主義を執らむことを促す語あり獨逸チューリンゲンのランドグラーフ、ルイスいたく佃獵を好み政務を視ず日夜出遊す權臣機を得て跳梁し荐りに秕政を行ひ怨嗟の聲日に高けれと公之を知らざるなり公一日獵して路を

失ひ深林中に彷徨し夕陽既に没し饑寒交も至る僅に一茅屋を得宿泊を請ひ許さる主人鍛冶を業とす微霽鉄槌を揮ひて一聲又一撃槌を下す毎に叫ひて曰くランドグラーフ堅くなれと囁々の聲耳に徹し公終に睡る能はず翌曉主人を召して其故を詰り始めて過を知り大に慙ぢ權臣を黜け佃獵を廢し力めて仁政を行ひ民悅服するに至りきとぞ

### 地球の成因及發育に就て

中 野 嘉 作

吾人の栖息する此の地球は如何にして創造せられたるか、又如何にして現時の有様に發育したるかと云ふ事は、最も古るき時代より人間の腦髓を惱ました問題である、然のみならず誠に大きな問題であつて其の關係するところも頗る廣いのである、即ち星學物理學化學動物學地理學などは勿論其他總ての科學が充分に發達しなければ容易に解決を與ふことが出來ない性質をもつて居る、夫れ故に太古より近世に至る數千年の間には澤山の學者が出て種々様々の説を唱へましたが、中には見るべきものもあろうが今日の科學的立脚点より見ると概ね馬鹿らしき思想に過ぎません、晩近に至り科學は大進歩をなし特に十九世紀に於ては長足の進歩をなしたから地球の沿革に就ても漸く確實なる科學的實驗と事實の觀察とを基礎として論究するに至つたのである、そこで今私が是より述べやうとするのは別段斬新なる説ではなく只古より現今に至る迄世上に表はれました種々の説を極めて簡單に話さうと思ふのであります

地球創造説の一番古いので著名なのはハビロン時代の説とモゼスの説話である、ハビロン人の傳ふところによれば世界の太初は混沌を以て始まりたるものとなした、而して天地の別猶ほ明かならざるに己に諸神は混沌の中より起り、同時に Tiamat と名づくる魔神の如きものが出で、海洋の水をして混沌の中に汎濫せしめ大に攪亂を極めました、此に於て諸神は Marduk と稱する神を撰ひて惡魔退治の任に當らしめました、すると Marduk 神は雷と稻妻とを己れの補佐として Tiamat と戦ひ遂に彼れを亡ぼし、其の身體を兩斷して一半より天を造り、他の一半より海陸を造り、次に動植物を造り、最後に粘土を以て男女一對の人間を造つたといふのである、夫れ故に往昔ハビロン人は Marduk 神を世界創造主として崇拜したる事は恰も基督教徒のゴッドに於けるが如くてあつたろうと思ふ次にモゼスの説は世界萬物の創造を全智全能なる唯一の神の作業に歸したのである、詳細は舊約全書の創生記にあるから此所には略す

以上の二説は何れも宗教と科學とを混同したものであるが、降て希臘時代に至りては稍々宗教の趣味を脱したれども宇宙の諸現象を論ずることは矢張り推論思想を専らと致したのである、而して希臘學者の世界創造論の中で最も古いのは Hesiod の創生論であります、氏は世界の始原は混沌を以て始まることなし、之より順次に天地及海洋が生し、次に諸神は天と地の兩方に現出したと述べました、紀元前六百十一年に於て Anaximander と云ふ人が生れたが此人は Thalés と名づくる哲學者の門弟で宇宙諸現象の觀察に就ては餘程高尚なる考を有つて居りました、就中世界創造に關し彼れが説く所は大略次の如くである、宇宙は最初に於て一種無限にして且つ先天的に運動力を

有する始原物質 (Primitive matter) を以て隅から隅まで普く満たされて居つた、此の始原物質は絶えず活動しつゝあつたが、遂に其のエネルギーは變して熱と寒冷との二状態を生じた、此の二状態は互に合同作用をなし更に液體の起因となり、宇宙は一般に流動體の有様となつた、次に地球、空氣、及び此等を圍繞する所の環狀火熱帶との三種のものが右の液體より分出して地球は此等の中心を占めたのである、續いて太陽及び諸星は空氣と火熱帶との作用によりて發現した、又地上には太陽熱の作用により初めて生物を發生したが此等の生物は其の四邊猶ほ元との液體の状態充分に去らないが爲め悉く魚類の形をなして居たと云ふ

Heraclitus (紀元前五百三十五年生る) は宇宙の萬物は永久變化しつゝありて其の變化作用は寸時も休止すること能はざるものであると云ひ、此の世界を造り出したる原因は火熱の力であると想象したのである、即ち火熱は絶えず自から變遷變化をなしたる結果第一に海洋を造り出し、更に變轉して陸地となり、又生物となり、陸地より昇る所の蒸發氣は大氣に觸れて燃燒し一團の火熱體となりて太陽を形成したのである、斯の如く一度成生されたるものも常に變化性を有つて居るが故に千變萬化して或は全く破滅して仕舞ふこともあろう、又破滅したるものより更に新世界を作り出すと云ふ様な工合で宇宙の變化は到底豫測することの出来ないものだと言論結しました

Empedocles (紀元前四百九十二年生る) も亦ヒラクリタスの永久變化説を主眼として宇宙を觀察しました、氏は萬物の起源は四大元素より來れりと説きました、四大元素とは土、水、氣、火の四種である、此等の元素は初めもなく又終りもなくして永久絶へざる變化をなしつゝあると考へま

した、現世界は即ち此等の四元素より組織さるゝが故に其變化作用により再び元の四元素に分解して世界は全く散失するの時期が來らねばならぬと論しました

Democritus (紀元前四百九十年生る) は原子説の創定者にして古代希臘哲學者中現今の學説に最も近似せる考を持た人である、其の主要は凡そ宇宙の萬物は皆な原子より成る、原子の外は總て空想に屬し事實として考ふること能はず總ての變化は原子の結合と分離とに基き原子の數量及び種類は無限にして常にあらゆる方向に運動し且つ相互に壓迫して居る、現世界は乃ち此等原子の旋轉運動によつて造られたのである、又宇宙の諸現象は何事によらず一定の規律即ち自然の原則に由て起るもので決して偶然の出來事に非ずといふのである

Anaxagoras (紀元前五百〇一年生る) は世界の最初は混沌の有様であつて常に旋轉運動をなして居つたが、其結果は大氣水及びイーサーの三要素を現出し次て地球は水中より起り、大氣より種子を得て地上に生物を發生するに至りた、而して地球の形は圓筒狀をなして宇宙の中心に懸り總ての星は其の周圍を迴轉すと説きました

是より凡そ一世紀を経ると希臘哲學の全盛を極めたる Aristotle の時代に移ります、而して此の偉大なる哲學者が世界創造に就て如何なる考を持つて居たかと云ふに矢張り一の妄想に過ぎなかつたのである、今其の主要を言へば宇宙は天と地の兩部に分れて居る、不滅無窮なるイーサーは天に充滿し地球及び總ての惑星は地の部に屬して土、氣、水、火の四要素より組織せられて居る、地球は中心にありて動かす惑星は地球の周りを回轉して居る而して最も遠き惑星の軌道外は即ち

天の部に屬し、諸星は天の部にありて惑星と反對の方向を取りて回轉して居る、又地球には一定の壽命があつて發育成熟、老衰の時期を経て遂に死期に至るのである、生物の最初は至極下等のもので地球の幼稚の時代に於て始めて泥中に發生し地球發達と共に漸次變遷進化して高等の動物を生ずるに至つたのである

以上述べたるが如く希臘の學者は一般に推斷的考察を逞ふしたが降て羅馬時代に至つては學術考究の方法稍々面目を改め多少實際に適合すと言ふを得べけれども確實なる科學の根據乏しきが爲め著しき進歩はなさなかつた、然しながら Brabo, Seneca, Pliny 等の有名なる學者興りて火山、地震、化石、地層疊積の理、土地の隆起及び下降等に就き大に研究をなし夥多の新事實を發見し、地質學界に貢獻したる事は實に少くないのであります、羅馬帝國滅亡は學問界に大打撃を與へ爾後數百年間は所謂學問の暗黒時代であつて特にサイエンス研究の如きは全く廢してしまつたのである、漸く十五世紀に至り學問復興の兆候現はれ爾來年を経るに従ひ化學、物理學、博物學、其他科學のあらゆる方面に於て著名なる學者輩出し、種々なる發明は續々起り、學術界は追々光を放つに至りました、斯の如くして地質學の科も十九世紀の初めに至り堅固なる基礎を以て獨立する事が出來たのである、然しながら十六世紀より十八世紀の中頃迄は移り變りの時代であるから中には高尚なる學説を唱へた人もある換りに猶ほ意外の考を持つた人もある佛のデカルト獨のライブニツ、の如きは物理學及び數學の原理を基礎として地球の起因及び發達を論じ、大に學者の注意を惹きました、之に反し英國の Thomas Burnet と云ふ人は聖書の記事に反戾せざることを主

眼として立論しました、氏は一千六百八十一年に於て Sacred Theory of the Earth と名づくる書を公にしました、其の書に論ずる所は大略次の如くである、地球は元と土、水、油、及瓦斯の四要素より成り最初は混沌たる有様であつたか段々と凝固するに従ひ岩石の如く重きものは中心に集まり、遂に球狀の一團体を作り、水は其の周圍を覆ひ、油は水面に浮び出て、太氣は更に全体を包めり、次に太氣中に浮遊せる物質は沈下して油と合し、此に粘狀油質の外皮を形ち造り、人類及び動植物は此の油質の外皮より滋養を得て始めて發生するに至つたのである、而して斯の形成されたる地球は楕圓形をなし地軸は常に軌道面に直角を作すが故に四季時候の區別を生ぜず風の起ることもなく、又陸地の上には山嶽河川海洋と云ふものなく只時々兩極に於て降雨あるのみ然かも降下したる雨は直に地中に吸収せられて仕舞ふのである、こんな有様であるから當時の世界は極めて平穩鎮靜の狀態を呈したのである、斯の如き極樂世界は凡そ一千六百年間續いたと云ふ、それから此の豐饒潤澤なる地皮は漸々太陽熱の爲に乾燥して所々に裂隙を生し地下の水は蒸昂して太氣と觸れ激烈なる雷雨を起こし、地皮の裂片は或は重疊し或は互に衝突し攪亂を極めて地心に轉落し遂に山嶽島嶼等を生した、此の時期は即ち聖書に所謂大洪水 (The Great Deluge) の時にして人畜は勿論総ての動植物に至る迄悉く盡滅したのである、大洪水去りて茲に世界は改造され始めて現時の狀態に移つたのである、世界變遷の順序は今日にて終りたるものではなく、將來再び世界大混亂の時期來り、夫れより更に更に鎮靜して遂に黄金時代になると論じました

十八世紀の終りに至り有名なる獨逸の學者 Werner 氏出て地殼を構成する總ての岩石は皆水の作

用によつて生し、現時陸地の形狀千差萬別なるも悉く水の浸蝕作用によつて出来たものだと主張しました、之に反し蘇蘭の Hutton 氏は岩石成生の主なる原因を熱の作用に歸し、山嶽の成生、地盤の變位島嶼の突出等總て地殼の變動は悉く地熱の作用によつて生することを主張しました、前者は之を水成論 (Neptunism) と稱し、後者は之を火成論 (Plutonism or Volcanism) と稱しまして、當時此の二説は學者間の大問題となり大に勝敗を争つたのであるが、終に十九世紀に至り火成論の全勝に歸しました

塵 影 錄

孤 憤 生

秋 夜

あゝ秋は來れり、秋は來れり、四方の山邊は既に秋色に満ち、樹々の梢は錦を飾りぬ、嗚呼美なかな秋色、芳はしや秋香、自然の美は實に秋に於て最たりといふべし、

時鳥片月をなき落し、四隣寂々として聲なく、遠犬かすかに耳底に到る秋の夜、獨り草むす野邊に蟲をきけは、嗚々乎たるあり、哀々たるあり、切々たるあり、人をして覺えず襟を正して此悲曲を感せしむ、或はなき友を追懷するもあらん、或は遠き古郷の空を望みて嚴父慈母を想ふもあらん、或は人生を觀じ、或は過去の過失を悔ゆるもあらん、其思ふ所、感ずる所一として人間の本性を現はさざるはなく、悪人は善人となり小人は君子となる、此處には一の不孝者なく、放蕩

家なく、詐僞師なし、あゝ此時ほど人をして眞面目ならしむるものなからん、試みに古人が物せし詩歌を述べんか、

やま端のかたわれ月を眺れば、我古郷の思はるゝ哉 (藤原忠房)

白雲に羽打ちかはしとぶ鴈の、かずさへみゆる秋の夜の月 (千浪)

秋風起兮白雲飄、草木黃落雁南歸、蘭有秀兮菊有芳、懷佳人兮不能忘、泛樓船兮濟汾河、

橫中流兮揚素波、簫鼓鳴兮發悼歌、觀樂極兮哀情多、少壯幾時兮老何。

(古詩)

古人今人若流水、共看明月皆如此、惟願當歌對酒睡、月光長照金樽裏、

(蘇子瞻)

活 學 問

嗚呼我邦四千餘万の同胞中何ぞ人物に乏しきや、國家の發達は人物の有無による、人物なき國家は死せる國家なり、人形の國家なり、由來邦人は小成は安んじて遠大の氣象なく、膽は小、心は粗、徒に猿猴的摸擬に長じ創造の力なし、故に小刀細工的小才子多く出づれども偉大なる人物といふものを見ず、是れ果して如何なる所以ぞ、聞くならく邦人の海外に留學中にありては其成績優秀なるも、一旦歸朝して後は平々凡々、反て外人の劣等なりしものに先せらると、是れ邦人の短所を暴露し得たる好例に非ずや、凡そ試験は表面的のもの、之を以て人を判せんとするは大なる誤なり、實力は之を見るの才あるものに非れは見る能はず、願ふに今や明治三十有六歳、既に摸擬

時代去りて創造時代に向はんとす、固より模擬時代に於ては小刀細工的教育必要なりしならんも、今日は既に其要を見ざるなり、今後は全然實力の世にして本箱學者、活字引は須く社會外に放逐すべきなり、翻て我校の現時を見るに果して如何なる感がある、徒に積込主義を貪りて實力の如何を顧みず、所謂活字引的學生其多きを占むるに非るか、あゝ活氣なき人形とは現時我校の概評に非ずや、試みに活氣の源泉たる運動界、演說界、文藝界を見よ、其不振何ぞ甚しきや、それ吾人の活氣を養ふ、須く運動を以て身をかため、三寸の舌頭以て懸河の辯を振ひ、五寸の毛錐以て己が所志を表すべきなり、然るに我校や一として其盛なることなく、唯青息を吐きて形骸を存するのみ、運動部は漸く其不振を回復せんとするの機に達せり、されど他の二部に至ては其片影だに認めず、夫れ辯の要、文筆の缺くべからざるは既に諸子の詳しく知る所、今之をいふは釋迦に説法の觀なくんはあらず、既に其要を知る何を以てか之を試ざる、殊に吾人の意を得ざるは此二部の事たる、一部生の占有物の如く考へ、他部の多くは之に關係せざるは何等の理あるか、嗚呼六百の健兒、北辰校裡堂々演臺に立ちて萬丈の大氣焔を吐露し、會誌紙上絶世の大議論を述べざるか、既に之をなす能はずとせば是れ憐むべき動物に非ずして何ぞや、乞ふ其説を聞かん、

パン 問題

嗚呼金錢は實に貴きものか、吾人世上に出づ、金錢に非れば一步も動く能はず、黄金萬能力とは果して今日の世か、試みに現時の政界を見よ、實にいふに忍びざるなり、彼等が其代議士を擇ぶや、金錢を以て其操を賣り恬然として愧ぢず、嘗に代議士のみならず一村の長や議員を擇ぶさへ

然り、人權の蹂躪是れより甚しきものあらんや、故に或者は嘆じて曰く、あゝ今日の世は現金世界なり、如何に徳あり才あるも金錢なきの士は之を現はすに由なしと、是れ目下我國全社會の實況なり、金錢はさほご貴きものなるか、吾人之に對して否々と叫はざるを得ざるなり、世人悉くパン問題の爲め東西に奔走し唯利の少きを是れ懼る、彼等は實に食はんが爲めに生くるものか、果して然らは何を以てかくの如き悲況を得しか、是れ全く道義の敗類に歸せざるを得ず、願ふに我邦は維新の大事變により、從來の武士道は一時に破壊せられ、西洋の外面的文明頻々として輸入せられ、道徳の幹根確に定らず五里霧中に彷徨しつゝあり、されど既に混亂時代は去り、整理時代を迎へんとす、此際確乎たる道義の大本を定め、絶對的に黄金萬能主義を排し、金を使うて金に使えるゝなからんことを務めざるべからず、聞くならく現時の學生間に於てパン問題頻に喋々せられ、己が目的は全くパン問題に歸し、甚しきは之が爲め其目的を變ずるものありと、何たる卑劣漢ぞや、彼等は實に食ふ爲めに生くる動物(人間に非ず)といふべきなり、苟くも將來大事を成さんとする前途遼遠の健兒徒に金錢の奴とありて焉ぞ其目的を貫徹するを得んや、

世界 の 文明

神 保 金 衛

僕が斯の如き大げさの論題を掲げて宗派違ひの議論を並べるのを見たら。諸君は必ずガラに無いと思し召さるゝでも有ふ。實際自分もさう思ふのである。併し例の野治馬根性で。不文拙案も省



みず雜誌迄もやじつて見るのである。

諸君夫れ史を繙て太古より近世乃ち今日迄を通誦し。靜に目を閉ぢて熟々世代の變遷を回顧して見給へ。實に一種不可思議なる現象を見出すで有らう。抑も遠くアダム。イブの昔は扱置き。人類の初めて繁殖せしは彼の Euphrates, Tigris, 河間に生れ出でたりと。而も姉妹二人である。何れも言語あり。制裁あり競争あり。而して少なくとも文明の胚子は萌出するのである、故に僕は斷言す。世界の文明は初めて Euphrates, Tigris, 河間に生れ出でたりと。而も姉妹二人である。何れも文學美術に富んで居たが其性質は丸で違ふ。姉は神佛を信じ内氣で人と交際するは至つて下手の方で、人を愛する念は深いが苟くも口にそれと云はぬ傾が有つて。獨り山水明媚の地を見ては心に樂むと云ふ風で有つた。妹は之れに反し所謂オテンバで、神は一神なるを信じ人と交際するを喜び。盛に愛を歌ひ男女同權を主張し。實に社交的才物で有つた。そこで兩人共漸く長じ少しく東西を辨ずる様に成て。共に後會を期し世界漫遊と出掛けたのである。姉は東に向ひ妹は西に向た。姉を東漸の文明と云ひ妹を西漸の文明と云ふのである。先づ姉は徐々に歩を進めて Persia に來て。暫く風月を侶として居たが未だ心を慰むるに足りない。で進んで印度に來た。此國は土地富饒穀物繁茂と云ふ有様で頗る心に叶うた。そこで一家を構へ。得意の宗教を布き文學美術を講じたのである。釋尊は實に此姉姫の膝に Paria の留針を置きたる一人である。で此處も氣候は暑しさをしたる風景はなし長く留るに値せぬと。暇を告げ歩を轉じて支那に向つた。尤も支那では。後漢の明帝の頃屢使を遣はし姉姫を聘した位で有るから姫の來るや非常なる歡迎で。直に宮殿を

作り之に招じ其命に従て事を成した。姫は先づ手初めとして惠帝挾書の禁を解き。大に古書を索めしめ。又諸儒をして各其得る所を傳へ解釋注疏を加へしめた。此時に當り文學は益々發達する學堂は出來る隨つて美術工藝にも思想を廻らす様に成た。宗教は大体姫の理想通りて有たが。中には半可通が有つて生かぢり聞かぢりの宗教を擴めた者も有つた。爲めに種々雜多の宗教が出來る様に成つた。先づこんな風で支那には隨分長く足を留めて居たが其間に。東方に日出の國が有つて。土地富饒國民質朴で。氣候温和でたまけに山水明媚なる事他に比類なき國ある事を聞いた。で姫は遂に意を決し。我遣唐使の船に乗じて初めて日本國に遊ぶ事に成つた。是實に皇紀千二三百年時代の事の有つた。日本人は從來快活粗放の傾で有つた故佛敎を布いて之を柔げ。文學を盛にして風俗を矯正した。又普く工藝繪畫を敎へた。近代明治初年に至る迄の日本の進歩發達は實に姉姫一人の骨折で有る。日本の地勢は四方海を環らし殊に東方は廣漠たる太平洋を望む故に姫は何處へも行くと得ず。又未だ嘗て味はざる風光を見ては他へ行く氣も起らず。以て Permanent habitation. として永く日本に留る事となつた。

扱て妹姫なる西漸の文明の方は如何にせしかと云ふと。彼女は初め Egypt に行き大々の建築を起して名を擧げた。則ち獨逸語で Sphinx, Felsenräber, Obelisk, Pyramiden, Labyrinth. など云ふ皆姫が指揮の下に出來たのである。此時文學美術宗教なども敎へたが。未だ發達するの間もなく Greece の方へ行た。此處で初めて彼女の快手腕を振つたのである。則ち政事法律より百般の學術技藝に至る迄。獨立以て之を創造し範を後世に胎し。幾千年の今日各國をして其餘澤に浴せしむるに至ら

しめたのである。又此處を去て次は Rome に至り前とは大に方法手段を改め、高尚美術と云ふよりは寧ろ進取的で、富國強兵を造り明瞭なる法律を編むを勉めた。故に兵制には Veltes, Hastati, Principis, Triarii の四種ありて最も攻城の術に通じた。法政には幾多の人才を排出し特に Papian, Ulpian, Paulus 等は最も有名なる法學者で「羅馬法」Pandect の大部は此時代に成就せられたのである。宗教には Saturnalia の神祭あり。文學には詩歌散文能辯術等あり美術工藝に於ては Greece 程ならずとも相當に發達見るべき者無きに非らず。斯くして姫は此處に住居を構へ歐洲各國を徐々に漫遊し普く耶蘇教を擴め哲學技藝及び産業を興した。則ちバリ、フックスアードボロンヤ等の大學を起し哲學神學を講究せしめた。又 Albertus Magnus 或は Roger Bacon 出で、博物光學器械學に於て最も伎倆を表はし。其他 Alchamy は一般學者の勉むる所で有つた。技術は宗教と關聯して建築術を重とした。教會堂の基礎は十字形をなし内面は高大にして神威の尊嚴を示し。塔頭は高く聳へて十字の花形天を指し以て信仰と希望との念を表はし。窓内は尖穹にして彩色硝子を張り其他各部は彫刻繪畫を以て裝飾し。實に美麗堅牢を極めた者だ。間もなく中世紀も過ぎ近世の始めに至り。益々文明の域に進む様所置し。成し掛けの仕事は万端残りなく皆侍臣に托し姫は十五世紀の中頃 Christopher Columbus の船に便船し北米に航渡する事に成つた。米國は姫が來てからと云ふ者は、國勢駸々乎として日に開明に向ひ。農藝の如きは其進歩殊に著しく。教育は大に奮ひ Harvard, Yale, Wilia Mand. 大學も設置せられた。千七百四年には米國最初の新聞 Boston. New Letter が發行せられた。宗教は大概新教を奉じた。學者には Ames, Hopkins, Bellamy, Emmons.

Mason, Dwight, Trumbull, Tael Barlow 等ありて盛に文學神學を講じた。美術家には Copley, Venjamin Tael, Washington Allston 等ありて肖像畫を良くし或は彩色の艶麗なると畫風の清雅なるとにて名聲を博せるも有つた。其他科學者、醫學者、實業家、等一々擧げて數ふる事は出來ぬ。とにかく國民一般自由の風を尊び。熱心なる宗教家で社會的交際家で事業家で有る事は殆ど姫の意の通りに行つた。然るに姫は不圖した事でベルリの船に乗込で丁度我嘉永六年日本國へ來てしまつた。來て見ると日本は氣候と云ひ風景と云ひ人氣と云ひ實に云ふにいはれぬ味あるので大に意に適つた。間もなく横濱東京間に鐵道を布設させた。開通式には自分が主人公の位置に立ちて東京へ乗り込んで來ると新橋は非常の歡迎者で有つた。其内に姫の最も早く目に映し心に銘じたるは彼女の姉姫東漸の文明で有た。而かも五千年以上も音信不通なりし同胞が偶然の邂逅床しさなつかしさ。思ひやるだに餘り有りて、其積る話の數々筆紙の盡す所ではない。是からと云ふ者は何事も二人相談の上事を成した。故に政事文學軍事工藝美術皆兩人合意布設の跡判然として見る事が出来る。兎に角何れも幾千年の星霜を経て世の辛酸を味ひ事物に熟練し經驗し來れる事とて、爲る事に成つたは。偏に兩人の徳なる事を感謝せねばならぬ。姉は早く來て長く居る丈それ丈日本の事情にも通して居る所からして。暇ある時は名所舊跡扱ては温泉場等へも妹を案内し普く日本の風景を示し自ら極力之を賞讚した。妹姫の考ふるに姉は東に向ひ世界の半分を見て初めて此良國を見たりと云ふ。已れは西に向ひて其殘る半分を見て又初めてである。して見ると此國こそ則

ち我等の永住する所ならめど。是に於て本邸を東京に構へ處々に別莊をこしらへ二人共に生活する事と成た。現に本年大坂博覽會には兩人共滿鑑飾で舞踏せられしを見た人有りと云ふ。以上述べたる如く我日本帝國は。東漸の文明西漸の文明なる姉妹が互に相提携し歩調を一にし益々文明の域に進めんと勉めつゝ有るのである。故に彼の野蠻極はまるスラブニアン種の露國にては如何にかして姉妹の内より一人にても奪ひ取らんと苦心していると云ふ。我々帝國臣民たる者昔ナイトの跡に習ひ。此の尊き淑女の爲め粉骨截身し。例令黒龍江岸に唐くれなるの雨を降らすとも。日本海上に暗黒なる烟雲をたゞよはすとも。怖ちず恐れず奮勵すべし。彼等を安寧にすべし幸福にすべし。彼等の安寧幸福なるは則ち我帝國文明の擧がる所である。遂には世界文明の中心として目せられ。世界各國は留學生を我に送り或は貿易品を我に乞ひ。以て彼女二人の餘澤に浴せん事をのみ之れ勉むる様になるは實に火を見るより明である、諸士夫れ勉めよや。

## 佐和兄を懷ふ

冠 木 劍 狂

嗚呼人事は一場の劇の如し、聚散常なく離合定むべからず、一世は莊周の夢の如し、昨夕の歡會は之れ夢にして今朝の愁苦は是れ既に覺めたるものか、將た今朝の愁苦は却て之れ夢にして昨夕の歡會は是れ未だ覺めざるものか、茫々漠々我と人と皆知る能はざる所なり、予不幸にして蚤く父を喪ひ、孑々獨り東都に遊學し志を壯にして日夜書を讀み、古英傑の跡を看大に爲すあらんと

して事志と違ひ、雄圖空しく畫餅に歸し策の出つる處を知らず、密かに敗衄失意の同志と手を携へて外游の途に上らんと決し、旅裝既に成りて帝都を辭し將に發せむとするに當り、親戚故舊の知る所となり或者は情を以て責め、或者は理を以て推し、切諫忠言殆んど至らざるなし、是に於てか予も亦意を枉げ途に倍ひて金城の曩舎に身を潜むるの止むを得ざるに至れり、故に予は學生以外更に世味の辛酸を嘗めて波瀾万丈の境涯を経過し來りたるもの、是を以て同學幾百の青衿に向つては超然として聊か期する所あり、爲に其校にあるや自から進むて交を結び友を求むるの舉に出でざりしなり、然りと雖も我と人と意義相投し思潮の相合するものあるに當つてや、其間互に隔離を許さざるものありて、時に遇ひ機に會して融合緩和し、胸襟を開いて意中を談し、遂に傾蓋如故の交を結ぶに至りしもの三人を得たり、一は則ち貞柏佐和兄にして他は黃安守行の二子なり、貞柏守行の二子は遊いて既に幽明の境を隔つ、幸に黃安兄健在東京法科大學に在りと雖も、學を半にし予を捨て不日外游の途に就かんとす、噫時に日月の蝕するありて群鴉時に迷ひ、二子既に没して同人悲情す、然かも日月の蝕は倏ちにして復た明に歸すと雖も、二子の死や竟に旋すべからず、予既に二子を失ひ今又黃安子と永く海外萬里に袂を分たんとす、金城々下雲雨蕭々として過雁空に叫び轉た游子をして感慨無量の想に堪えざらしむるの秋、獨り書窓に端坐して亡友を懷ひ身の不遇を嘆す、萬感胸臆を衝き來つて落淚滂沱鐵腸爲めに九回せんとするあるもの固より其の所ならずや、

守行子や磊落不羈苟くも小事に拘泥せず頗る古武士の風ありき、故あり中道にして鬢を捐て單身

禹域に入り、絶大の抱負を持して非常の事に従ひ、留まること僅に數閏月、一夜月明を賞し誤つて大江赤壁の下に溺れ、胸中の偉略未だ施すに至らずして空しく異域の鬼となる、然かも子逝いて未だ幾何ならずして、東亞の風雲早く既に急を告げ、妖霧濛々として支那の山河を鎖す、知らず子の氣魄今や果して何れの邊にか漂ふ、眞に悲い哉、

佐和兄の死や守行子の死と大に其の赴を異にす、兄の二豎の犯す所となるや湯藥に侍するに弟妹あり、慰藉を與ふるに慈母あり、更に意を強うするに嚴君のあるあり、醫療秘術を盡して遺憾なく終に近親圍繞の中に眠る、守行子の死に比して奈何んぞ夫れ死期の斯くの如く幸福なりしか、雄志を抱いて道に従ひ青春氣熾ゆるの時に於て俱に天死す、二子の痛恨固より察すべしと雖も、佐和子の死や守行子に對して又聊か慰むべきものなしとせんや、

佐和兄と予とは來往僅かに歲餘の短日月に過ぎざりしも、子や常に誠を以て予を迎へ、情を以て予を感せしめたりき、然かも子と予と初め其の病を同うし、子は重くして予は輕かりき、子金城の病舎を辭し愛弟に援けられて歸京の途に向ふや、元氣却て平日に倍し病を相陽の靜地に養ひて歸來再び覺庭に相見えんと、以て發す、既にして車中病頓に革まり急遽車を下りて濱松友施院に治を請ふ、居ること旬餘日病勢稍愈るを見て一書を裁して予に投ず、奚んぞ知らんや此書金城を發して以來親ら知友に送れるの第一信にして而かも絶筆の書ならんとは、讀下するに曰はく、(上略)兄近來病むで 床にあり而して病症余が初期に等しと、同病相憐れむとかや申せど、吾は吾が經驗に鑑みて君が胸中を察す、然れども兄の病や未だ深きにあらず、專心醫療を盡されば回

復の期亦遠からざるべし、痼疾子の如きに至りては容易に救ふの途なかるべし、去みながら子の如きすら猶ほ生き長らへ大に爲すあらんとす、殊に吾人の活動すべき舞臺は豈に成規の學程を経過するにあらずれば能はざる如き極小天地ならむや、況んや兄の如く經驗閱歷衆に優れ、才學の他に卓越するに於てをや、幸に意を強うし氣を勵まして加療せられよ、予は昨今稍輕狀に向ひたれば數日の後沼津地方に轉地すべき考なり、轉地の際は重ねて御通知いたすべければ兄も是非來遊俱に加養せられては如何や、(中略)本年新艇成り艇庫建設せられたれば、徹々として振はざりし我短艇部も之れより必ず大に見るべきものあるべしと信じて居りしに、意氣地なくも我一部は自ら撰手競漕を廢せんとすと、昨春の卑劣漢は吾れ之れを本春に膺懲して大に我部の元氣を示さんと期したりしに今や病むで此地に在り、兄も亦病床に苦吟す、止ぬるかな止ぬるかな、吾人が幾多の力を盡して短艇部をして今日あるに至らしめたもの抑も何の爲めぞや、我一部生の柔弱此の如きに至りてはボートも艇庫も何にも彼も焼き棄てたる方よろしかるべし、兄病床猶ほ健筆を揮ふを得ば北辰紙上に於て一大打撃を與へくれ賜へ、(下略)と、子の言や予固より當らざるものありと雖も、子の意氣や病床猶且つ斯の如ものあり、吾れ豈に子の囑に對して聊か答ふる所なかるべけんや、即ち予や床中病を推して秃筆を驅り慷慨悲憤之介の名を以て前號誌上に一文を草して年少氣銳の士に囑せし所以なり、然るに子の文に習はざる遂に二三有志の怨を買ふに至りしと雖も、此等の士や固より萬綠叢中の紅一點、之れ在つて初めて稍意を強ふするに足れり、若し此業の二三子微せば一部は遂に人無きなり、必竟予輩の期せし所は此等の士をして興奮せしめんが

爲めのみ、二三子たるもの幸に自重士氣の振興に努められよ、徒らに言辞の末を執つて喃喃々々自ら辯護の苦しきを敢てして予をして再び筆を勞せしむる勿れ、況んや兄等と雖も予をして此に至らしめし所以のもの佐和子の囑に外ならずと聞かば、誰れか又佐和子の意氣に感せざるものあらんや、子や朝に夕を測るべからざる大患の床に在つて猶ほ這般の壯烈あり、堂々頑健の青年輩又當に慙死すべきにあらずや、嗚呼雜木徒らに繁榮して喬松却て風のために挫かる、佐和子の如きは遂に夫れ喬松の類か、悼ましい哉、

佐和子が温厚篤實の性格を有し孝悌友愛情誼に濃かなりしは、家庭の圓滿にして和氣霽然たるを知るもの誰れか之れを疑ふものあらんや、曾て弟妹と争はず長老に逆はず、常に自ら持すること甚だ厚かりし、嘗て同窓某氏が窮厄學資を支ふるに堪え難きを見ては一二同人と力を協せて之れを救濟し、某氏をして素志を果さしめしが如き、已れを薄うして人の急に赴くの情甚だ切なるものなり、以て子の性行を知るに足るべし、子が初めて四疊に遊はむとして先進某氏を訪ふて告別の辞をなすや、某氏語つて曰はく、金澤の地や淫靡壞倫年少子弟をして身を誤らしむるもの事々皆然らざるなし、是を以て予は從來青年諸氏が四高に遊ぶを多く喜ばざるものなりと、言ひ終つて子を顧るに子潸然涙を垂れて默然たり、某氏怪みて故を問ふこと三度に及びて始めて口を聞いて曰はく、予や四高に遊ぶ固より深く期する所あればなり、然るに今予は優柔不斷爲すなき天下の子弟と同一視せられしを自ら深く慙つる所あればなりと、某氏之れを聞いて其の過言を陳謝したりしとかや、子既に斯心を以て來り遊ぶ自ら任ずる所ありしや必せり、故を以て出入常に學生風

紀の頽敗を慨し、之れガ廓清を以て居り同人の間に言ひて曰はく、四高學生士氣の振はざる所以のもの、或は之れを先進の責に歸し、或は土地の感化に因ると爲すものありと雖も、予を以て之れを見れば之れ誤れるの甚だしきものと言はざるべからず、由來學生あるものは不羈獨立他に倚るべきものにあらず、却て他をして已れに則らしむべし、則ち社會の先きに立つて之れを導き決して社會に感化せらるゝ如きあるべからずと、又士氣をして盛ならしめんと欲せば運動場裡の手段を應用するの其の効果偉大なるを言ひその擧げられて短艇部委員となるや、素志を實行せんは正に此時にありとなし、専心之れか開發に従事し刻苦經營百難を排して遂に短艇の新造艇庫の始設を完成するに至れり、子の功や豈に夫れ大なるぞせんや、而して短艇部の企畫漸く完成を告ぐるに及びてや卑屈柔弱なる一部は遂に本春の醜を演ずるに至れり、佐和子の遺憾憤慨固よりそれ幾何ぞや、佐和子や即ち短艇部中興の功に居り、守行子や即ち我校短艇部創設の首唱者にして與に俱に斯界の傑物たり、豈に亦奇ならずや、然れど今や此の好漢俱に去つて復た語るべからず、あゝ天地蕭條として寂寥の氣人を襲ふの秋、一條の客路万里の山河、豈に至悲斷腸血涙の衣襟を濡はすものなからんや、

吾人若し靜止默考人生死活の問題に到達せば誰れか能く迷はざるものあらむや、人は期せざるに生れて欲せざるに死し、唯無限に出づて無限に歸するもの、此間果して如何なる物をか寓する、必竟自然絶大の偉力は吾人遂に解すべからざるものか、あはれ犀川の流は綿々として盡くるの期なく、加越の山河は依然として舊狀を存すと雖も、而かも子が無限の痛恨は果して何れの日にか

消えなむ、河北の水聲は鏗鏘として玉を碎き、北海の巨濤は澎湃として金龍を跳らし、皆俱に子の靈を弔ふものゝ如し、噫

## Die Zwei Blinden.

(Schluss.)

H. ARIMA.

*Sannichi:* „Was, habe ich ihn vergessen?“ (Fühlt um die Tasse herum.) „Wie wunderbar ist es! Aber ich will jetzt noch eine Tasse nehmen.“

Als er aber seine Tasse wieder mit Wein hüllte, wovon er eine Schluck nahm, und sie nieder hinstellte, da trank sie Kitahachi wieder leer und setzte sie auf denselben Platz.

*Innichi:* Wie scherzhaft wäre es, wenn jene Schenken hierher kämen, während wir so trinken.

*Sannichi:* „Oh, sie mögen noch an dem Flusse das Kleid auswinden und trocknen. Was für dummeszeug!“ Indem hebt er die Tasse auf und findet sie wied leer. „Halloh, was ist das?“

*Innichi:* Was, hast du den Wein wieder verschüttet?

*Sannichi:* Nein, habe ihn niemals vergessen. Es ist wirklich sehr, sehr, wunderbar.

*Innichi:* „Ha, ich sehe, Sannichi! Das ist alles Täuschung, was du sagst und thust; und so trinkst du den Wein aus für dich allein.“ Hier nimmt Kitahachi die Flasche her, schenkt sie in seine zwei Tassen leer und setzt sie heimlich wieder hin.

*Innichi:* Hier, Sann, gib mir eine Tasse! Er ergreift die vor ihn und hebt die Flasche auf.

„Jah, sannichi,“ schrie er, „Du Schuft, du hast die volle Flasche für dich allein angetrunken.“

*Sannichi:* Wo denkst du Thun?

*Innichi:* Doch steht sie leer!

*Sannichi:* Wie, leer? He, Herr Wirt, kommt! .....(der Hauswirt kommt.) Dachten Sie, dass Sie unsere Blindheit benutzen und in dieser schamlosen Weise uns benützen könnten. Wie ist es sonst, dass wir von einer zwei Go Flasche nur zwei Schluck bekommen können.

*Der Wirt:* Nein, sicher gab ich Ihnen zwei Go, und richtig voll Mass. Wahrscheinlich vergessen Sie den Wein wohl.

*Sannichi:* „Wie, ich ihn vergossen? Ich will nicht gern dafür bezahlen; denn ihr sprecht wie kein rechter Kaufmann.“

Eben in diesem Augenblicke, als er so verdriesslich wurde, zeigte ein Mädchen, das von Anfang an mit seinen Freunden vor diesem Hanse zusammen gespielt und die Thatsache von a bis z gesehen hatte, auf Kitahachi, und sagte: „He! Der Mann dort hat den ganzen Wein des Blinden in seine Tasse heimlich hineingegossen.“

*Kitahachi:* „Wie kannst du eine solche Lüge sprechen, du Mädel? In meiner Tasse gibt es nur Thee.“

Er trank eilig den Rest Wein in denselben ans.

*Der Wirt:* Oh, du bist von Weingeruch und dazu dein Gesicht ist rot. Vermuthlich hast du den Wein getrunken.

*Kitahachi:* Du! Du sagst auch abscheulich. Mein Gesicht wird rot, weil ich Thee trinke. Es ist eine merkwürdige Neigung bei mir, dass mich eine grosse Menge von Thee immer berauscht; und dann sage ich solchen Unsinn, wie ein von Wein berauschter Mensch.

*Sarwachi:* Nein, wir werden nicht so leicht überredet. Das Kind spricht wahr. Da ist's ohne Zweifel, dass du unseren Wein getrunken hast. Also, sollst du dafür bezahlen.

*Kitahachi:* Aber wirklich, du hast eine falsche Meinung von mir. Ich habe nur Thee getrunken, ja nur Thee, keinen — deinen Wein nicht getrunken.

*Inachi:* Höre auf mit so einer Täuschung! Glaubst du, unsere Bihheit kann so leicht benutzt werden? Jenes Kind, das dich gesehen hat, ist unser sicherer Bürge.

*Sarwachi:* „Und es giebt noch einen andern Beweis. Herr Wirt, sehen Sie alsogleich, ob seine Tasse von Wein riecht.“ Als Kitahachi diesen unerwarteten Auftrag vernahm, versuchte er die Theetasse zu verstecken, welche aber der Wirt von ihm wegriess und roch.

*Der Wirt:* „Holloh, riecht sie nicht nach Wein? Zudem ist sie auch sehr klebrig, und das zeigt uns ja einen unwidersprechlichen Beweis, dass du Wein getrunken hast. Du sollst dafür

bezahlen.“ Kitahachi, der sah, dass das Spiel aus war, sprach: „Nein, weil ich keinen Schluck Wein nahm, will ich für Wein nicht gern, sondern für Thee so viel, wie du begehrst, bezahlen. Wie viel ist es?“

*Der Wirt:* Gut, dann bezahlen Sie für den Thee. Ja, es beträgt im ganzen 64 Mon für zwei Go Thee.

*Kitahachi:* Wie! So viel hab'ich nicht getrunken.

*Jajiwobei* (wispernd): Eh, bezahle nur alles ohne ein Wort! Alles, was du thust, giebt immer Schwierigkeiten, und wenn du nicht schnell bezahlst, so werden wir mehr Lärm haben.

*Kitahachi:* dar selbst auch eine bessere Weise nicht fand, bezahlte das Geld mit Widerwillen.

*Sarwachi:* Welch ein schrecklicher Mann! Es ist gewiss derjenige, welcher beim Querwaten des Flusses auf meinen Rücken sich setzte, glaube ich. Den Wein des andern Menschen zu trinken, ist nichts anderes, als ein Diebstahl.

*Kitahachi:* Was! Du nennst mich einen Dieb! Du B-Blinder!

*Jajiwobei:* Höre auf, nun Bei Dir ist das Böse. ....Bitte nehmen Sie nicht Acht auf ihn, meine Herren. Dieser Kerl wird immer so straffertig, wenn er an Thee sich berauscht. Komm, wollen wir in diesem Augenblick gehen. Adien. Herren, dien.

Er zog Kitahachi vom Theehause mit weg, und gingen, auf der Strasse sich beilend, ihren Weg.

## 文苑

## 露草日記

山崎麓

## 大坂の郊外

空いと晴れたる朝なり。妹と瀛車の踏切を越えて郊外に出でつ。露けき菜籠を肩にしたる村の若人に逢ふ事二度、街道を行けば、市より牛乳を買ひ出しにや來りけむ、緑の髪小櫛に巻きし二十妻の、清き浴衣着たるが牛乳の罐の大なるを提げて泥川に沿へる路へと曲りぬ。我等も其處を曲る。川岸の雜草茂りて水を蔽へる邊に、西瓜の皮、茄子の小さなと漂ひて、微かなる泡黒く濁れる底より湧き出づ。此路の左方は一面の夏野なり。白き花咲ける草露を帯びながら蓬々として茂り續き、草の盡くる處、梅田停車場の建物、電柱、紅紫の色鮮やかなる煙草の廣告、其等を貫きて過ぎ行く瀛車、列車の屋根に乗りて洋燈ランプを脱する人夫など、曉靄晴れ清く澄みたる空氣にさへざる物もなく明に我が眼にぞうつりたる。

小川は道を横ざりて其處に小き橋ある處に來りぬ。低き欄干に腰かけて市街の方を觀る。黒烟天を染め烟筒數知れず立ち、靜に耳仰くれれば、人車往來の音商人の叫聲雜然騒然として響き來るにあらずや。罪惡に埋れ人世の冷さに滿されたる此大なる市に、我が暖く懐しき家庭ホームの隠れたるは、人ば此處へ入りしと覺し。猶行く。

遙に新淀川の鐵橋望む。此鉄橋の上に淡く空を書けるは六甲摩耶山なり。山の肌は諸處赤土なりと覺しく淡褐色と淡紫色相雜りて山皺を現はせる様、花形を織り出したる帷帳てんどうの古びて色褪せたらんか如し。靄然たる裡に横はれる此攝津の山々こそいと懐しけれ。

## 郊外の夕暮

獨り團扇片手に朝來し瀛車の踏切を越ゆ。線路に沿へる柵に身を寄せて涼む小商人頻に米の相場を語る。

北野の凌雲閣は暮靄の裡に聳ねて巨人の立てるが如し朝來し小河の畔を逍遙ふ。蛙の聲草の葉昏き處より起り、あたりの瓜畑茄子畑漸く黄昏の色に染まり行く。

西の空を仰げは鉄橋近き烟筒一つを空に濃く書き出して攝津の山暮れんとす。幾度見ても飽かぬ彩雲の繪巻物は今しも山の彼方にて開き出されぬ。落日の大なる輪よりくり出される黄金の糸、紫紅の辨亂れたる牡丹の花に似通へる雲を縫ひ、日を包める黄雲の裂けて破れて澄み渡りたる空を浮び行くは、尾鱗美しき金魚の遊ぶ様にも似たるかな。あゝ日は山に隠れぬ。涼風颯と面をかすむ。山は永遠の姿を以て靜に眠りぬ。願れば梅田停車場のあたり、電燈紅燈或は輝き或は動く。



走る灯あり歩む灯あり東西に往來して止まず、其様誠に此處に住む市人の心にも似たらずや。自然の悠々たるを思ひ、人生の活動を思ふ。暗中に佇んでみ空を仰ぐ事暫時、云ふ可からざる樂み悲み我が苦き胸に湧き出づ、何故とも覺えず。(七月二十九日)

## 吉田山

夕暮、兄と共に吉田山に登る。日は愛宕山の彼方に落ちて西の京は蒼茫たる裡にあり。四條大橋は彼處なるらん、黄昏れたる京の町の一部をほのかに照し出せる電燈の光見ゆ。今四條大橋の中央に電燈裝飾ありとか思ふに是れなる可し。紅の振袖を川添の欄干に垂れて眺むる舞姫もある可く、絹の繪團扇に白き頬隠して徘徊ふ町の乙女もあるらん。

四方全く暮れぬ。濃き紫靄の中に灯のみ見ゆる京の町は、さながら森深き畔の湖に藻の花の漂へるにも似たりや。兄の我が爲めに指さし教えたる下加茂上加茂のある處、仁和寺のある處、既に見る可うもあらず、比叡山我が背に黒く迫り來り、青葉がくれに灯幽かなる白河の里、牛車の影も見わかで稻田の中に慄れたらんが如し。諸處に響く紡績會社の凧笛にもうち消されず、松の葉杉の葉を傳ふて響く黒谷の鐘聲に、舊き歴史を帯べる西の京の、悲哀なる詩は籠れるに似て、幽かなる讀經の聲、山鳩の聲、亦淋しさをぞ添えし。(七月二十四日)

## 蜷川

北新地の遊廓の裏手に幅狭く水濁れる川あり。妓樓の軒端近く釣れる葱草の露も、白紛の香する化粧の水も皆流れて此川に入る。此川長く横はり中の島公園へ行く道を貫ける處に小き橋あり。

夕暮公園への散歩の途次常に此ほとりに佇む。

紅燈も見えず弦聲も聞えず、陰鬱なる妓樓の裏の石垣を洗ひて唯淙々たる暗流、花の如き市の賑ひを外にし知らず顔に流るゝを見る。其度毎に云ひ知らぬ趣味を覺ゆるなり。君よ、此川こそ近松巢林子の靈妙なる筆に畫かれし天の網島、曾根崎心中などに、或は燃ゆるが如き女主人公の叙情中に點出され、或は浮世の悲の果敢なきにたぐへて唄ひ出されし蜷川なれ。戀風の身に蜷川と云ひ、たとへば骨は碎かれて身は洒落貝の蜷川、底の水屑となりても汝とは離れじと云ふ。紙治が泣ける涙が蜷川へ流るれば小春が汲んで呑まんとや。げに下行く水は暗けれど戀の仇波は今も猶湧き返らんとやすらん。此小き橋の下には常に二三艘の納涼船繋かれたり。四角なる行燈暗く船宿の名記せる字も臙に客待ちげなるも哀れなり。

其を眺めつゝ欄干に倚り、聲音優しき大坂人のもの語ふを聞く。常に戲曲的の趣味を思ふ。(八月十二日)

## 京の湯屋

吉田の町は漸く開けたれど猶田舎びたるぞ面白き。夕暮手拭肩に、瓜畑を横ぎり新築の棟割長屋を右手に見つゝ湯屋に行く。此頃開業せしと覺えて、高き二階屋新しく旭湯と記せる暖簾も心地よき迄色鮮やかなり。

浴し終りて二階に上る。綠樹の間より黒谷の塔の朱欄碧瓦畫くが如く見え、右手には大極殿の崇嚴なる屋根に白鳩の首ひそめて留れるをも眺め得可し。左手には如意ヶ嶽の大字斜に、比叡山は

頂のみぞ現はれたる。懐しき東山の巒色我が眉に迫る心地こそすれ。濡れ手拭欄にかけてしばし休む。此二階の間は數多の客或は裸体のまゝ臥し或は櫛けづるなり。中にも一間を占領せるは二面の基盤を圍める數多の客なり。巧拙は知らねど、石の打ち方速く思案を要せざるが如きあれば、横手より口入れられ思案に暮るゝもあり。皆総て是れ赤裸々、山間の小亭に戯るゝ羅漢の集りかと疑はれ、又そゞろに式亭三馬が浮世風呂も想ひ合はさる。

かゝる美しき山水に懷かれて暮せる京の人、げに心は長閑なるよ。(七月二十五日)

## 博覽會の歸途

美術館工業館を始め博覽會場、皆電燈裝飾イルミネーションの光水晶樓の如く輝けるを後にし正門をぬけ出て、各縣出店の紅燈紫煙華やかに色どれる中を過ぎ我は其まゝ茫然として停車場に出で、偕流車に乗り腰うち掛けし時、涼しき夜氣の額に迫るに心付き初めて春の如き夢より醒め出でぬ。夜やゝ更けぬらし、青田のほとり可憐なる虫聲の金鈴を振れるが如きを聞く。

やがて列車は運轉を始めぬ。我が客車は同じく博覽會見物の客と覺ぼしきが身動きもならぬ程乗りたり。羅袖香ばしき乙女は猶工業館なる織物の美しきを訴ふるが如く母らしきに告げ、質朴なる農夫は小學校の教師らしきに機械館を説明されて感服せるものゝ如く、商人らしきは會場の大さに驚きて其建築費を算用して仲間告ぐるあり。其他皆口々に博覽會の壯麗なるを嘆賞して止まざるに、我も亦今日の思ひを再びたどらざるを得ざりき。

美術館の繪畫や織物海産物の目を驚かすは云はずともあれ楊柳觀音の側に立ち、此方に登り來る

幾千と知られぬ見物人を眺めし時我が浮き立てる心や如何なりし。青春の血を燃わしむる音樂隊の響さや、あたりを徘徊する紅紛の装ひや、さては浪花躍を見、其錦裳玉帶の氣氤たる電燈に輝き、緑髪にせざる寶鈿の翠裾に映ずる時や、機械館に運轉せる諸機關の鬼工を欺く精巧を見し時や、我は酔ひぬ。我や人世の榮華に酔ひぬ。我が心は唯浮き浮きて、冷に只騒喜ぶ人々を觀察する能はず、我亦其渦中に投じて躍り徘徊へるなりき。人世の榮華を嘲り人爵を罵りて、唯自然の暖さをのみ、あこがれんと欲せしは我にあらざりしか。天滿橋上より暮れ行く大坂城の白壁を眺め、ソロモンの榮華も一ツの百合に如かざるを今更の如く覺わしは猶遠き過去にあらざりき。あゝ文明を唯賞讚の眼もて見んとせず直に酔はんとする我か心の弱きかな。

沈思の裡に流車は梅田に着きぬ。(七月十二日)

## 北 教 會

中の島の、商會の倉庫、製造所などならび立てる其が横町に、小き教會を立てる。市の紅塵に、狭き庭の樹も葉の色なく、窓の色硝子も曇り勝ちなるに、町に向へる方は石投する小き子の惡戯を防がんとや、金鋼を張りたり。是ぞ余が休暇の日曜毎に赴きたる北教會なる。

利に追はるる大坂の人には高き美しき心は起らざるや信徒の人五六十人を越えざれど、堂内に籠る靄々たる氣の聲なく我が胸に通ふ心地して、幾度か犯す罪の懺悔をなし、迷へる心を危く踏み直し得るぞ嬉しき。朗々たる讚美歌の聲に微妙なる氣宿りて、此人の世の罪の一瞬間なれども我身を脱くるを覺ゆ。教會の吉岡牧師は白鬚長し徳高き君なり。元は漢學者なりしとか。信仰の心

極めて少く砂漠にも似たる此大坂の地に、清き泉を湧さしめんとつとめらるゝは極めて勞多からまじ。

葉柳戦ぐ川岸の朝、聖書抱ひてひとりたるとる。云ひ知らず嬉し（八月三十日）（完）

## 戀瀨の流

野の人

秋暮れむとす。野分の風日に寒うして、その吹くところ草は悲しみ水は咽ぶ。悽たり、寂たり、秋郊の景。流に臨める家の籬に咲き亂れたる黄菊白菊、そもいつまでの匂ぞや。花深かりし秋の野に、さながら陽炎の如く香に酔い色を尋ねて、花より花に迷ひ入りたる秋の蝶、晩秋の風に堪ふべく汝れが翼やあまりにやさしかりけむ、遺骸空しく路の邊の塵にまみれ、萩の下蔭、かつてはげしかりし蟲の鳴く音、今はかすけき聲すら聞くべくもあらず。あはれ秋は暮れむとすなる。或は風清き夕、千草百草咲きぞ匂へる秋の野の小川のほとりに座して、呷く如き秋の聲に耳傾くる時、或は月明かき夜、岸に佇みて仰ぎて千古變らぬその光をながめ、伏して波に碎くるその影を見る時、吾は云ひ知らぬ思の胸に湧くを覺えつ。我が身一ツの秋にはあらねごと云ひけむ昔も今も人の心は變らじけりな。まこと物悲しくうら淋しき秋の夕の、悶になやむ人の子をして、如何に深き思の淵に沈ましむる事ぞ。

國を去り郷を離れて、雲烟萬里、山重り江重れる二百里の外、知る人もなき越路の空にさすらふ

我等の身に、楽しきものは歸省、待たるゝものは休暇ならずや。或はその身恙なかりしを見てこよなく喜はるゝ兩親、誰より先に驅け來りて土産をねたる幼き弟妹に迎へられ、暖きホームの愛に包まれて、ありこし事の物語りに夏の夜の明け易きをかこつもあるへく、或は竹馬の友垣を訪ふて、榎柵火あかき爐のほとりに苦茗をすゝりつゝ、野邊の逍遙、小川の游泳、さては學び舎に世の浪風の荒きも知らで騒ぎ狂ひし當年の記憶を呼び起して、彼笑ひ我興じ、津々として盡きざる興に酔ふもあらん。其も可なり、之も可なり。然れども歸りて喜ぶ父はあれど慰め呉るゝべき母を持たず、性怯にして幼きより家のみありて敢て友を求めざりければ歸るも共に舊事を談ずべき友もなき我が身には、歸省の歡樂すでにその一半を削られたるなり。遮莫、我は決して母の愛を覺えず友の情に洩れたりしを悲しみ嘆くものにあらず。我に戀瀨の清流あり。自然の懷は廣且つ大、よく我が不平と煩悶とを容れて、慰藉の泉長へにこゝに涸るゝ事なし。あゝ戀瀨の流、我は母の愛と友の情と之を汝に得たりき。思へばはかなき夏の夢にも似たりける幼時の思出草、こゝにしはらく我をしてなつかしき里川に就きて語らしめよ。

日に七度の色變ふるてふ筑波峯の麓、沃野百里、其處に河あり、森あり、村あり、而して戀しき、我が里またこゝにぞあるなる。我が里今は眇たる一商區にすぎねど、もとは府中と稱へ國分寺のありし舊地なり。其の昔官民相聚り商賈相競ひし繁榮の俛は今之を何處にか求めむ。憾しい哉、舊記一も存せらなく興亡の跡知るに由なきなり。町の西南隅なる小高き丘の上に一の神社あり。社を囲みて森あり。幾百年をや經にけむと思はるゝ古杉轟然として陰暗き處、境内聞として人語

稀なり。南の石段の上に立ちたる囲り二抱に餘る楠の大木、風雨幾年、今もなほ高く茂れるあり。他は皆枝や幹や眼界を塞げどこの大木の下のみ獨り遠く見渡すべし、人若し此處に立ちて南の方を望まば、紫匂ふ筑波根の麓より透迤として流れ來れる一葦の流、ゆるやかに森をめぐり野をよぎりて西の方遙に鏡を磨せる霞が浦に消ゆるを見ん。之ぞなつかしき戀瀨川なる。

あゝ戀瀨の流、何ぞその名の優にやさしき。よし其の水は淺く其の幅は狭くして汪々濊々たる大河の趣はなくとも、我に多大の慰藉と追懷とを値る汝戀瀨の流よ。汝が懐温かな慈愛に生ける如何に多くの魚屑をや抱ける。

葉山繁山しげれごと云ひけむ古は知らず、今も翠り色濃き筑波峯や、北に連れる加波、足尾の山々より、涌き出づる水、葉末の雫、落ちて合して朽葉の下音なく流るゝ水となり、彼を集め是を集めてこゝに滌々たる響を負ふて山を出て、或は炊烟立ち昇る茅屋の垣をめぐり、或は若草萌ゆる春の野を縫ひ、或は暮靄たち置めたる楊柳の下枝をなぶり、或は朝風そよぐ枯葦の根をわけつゝ行方も知らず流れ行くなる戀瀨の水よ。朝には蒼穹にたゞよふ白雲の影を浮べ、夕には輝きそめたる一つ星とそのさやめきの聲をかわす。その姿、その響、如何に和かに如何にやさしからずや。

花散る春や、流水悠々 浮べる落花にたぼつかなき蝶の夢をのせて、人の世遠く離れ行く。月清き秋や、流水無情、岸による波に露より冷かなる月の光を碎きて、金鱗銀砂汀に散りしく。平和の香り日ごと年ごと静けき水の面より上りて空をこめ野をこめ、愛のさざめき夜なく葦の葉を

よぐ兩岸より起りてエーテルよりエーテルに傳はり行く。思ふ天地混沌の始め平和の女神その旨長へに唱ふべくここにこの川をや造りなしけむ。

戀瀨の流にのぞむごとに我は必ず春の靡散る花と共にこの世去りにし友を想はずんばあらず。彼は我がたゞ一人の竹馬の友なりき。齡に於て我より長ずる事二才、とある事より極めて親しき友情の我等が間を結びつけてよりは學ぶにも遊ぶにも必らず相伴ひたりき。彼小學を終りて中學に入るべく水戸に去るや、我もその跡を追ひぬ。かくて歸省の度ごとに共に先づ訪ふものは戀瀨の流なりき。

長閑けき春の光を浴びつゝ若草萌えそめたる岸の堤に立ちて、陽炎舞ひ起てる春の野を見入りたる時、如何に我等が心自然と融和せしを覺えたりしか。霞こめたる小筑波の峰にたゞよふ雲も長閑にて、姿は見えね、み空に高き雲雀の歌、落つるは何處如何なる野の末ぞ。菜の花十里、黄金の波を湛えたる中にありとしも見えぬ田舎道を、辿れる馬の歩み如何に遅々たる。背なる馬子は眠れるにやあるらん。静なる田園の眺め哉。同情に富み自然を愛する深かりし吾が友はいたく之を愛し之を慕ひぬ。

才と學とを彼に與へたりし神は更に健康を與ふるを拒みぬ。才子多病の語は不幸にして彼か識をなしぬ。彼中學にある四年にして腦をやみ是非なく郷に歸り無邪氣の小兒を相手に教鞭とる身とはなりぬ。珠を抱きて空しく塵に埋もるゝ事の如何に口惜しかりけむ。我このまゝ朽ちじとは彼の常に口にする處なりき。かくて我等は休暇ならではまた相逢ふ事も叶はずなりぬ。我郷に歸る

や先づ逢ふを願ひしものは彼、我が中學を卒ふるや滿腔の熱誠を以て我が前途を祝せしものもまた彼に外ならざりき。我辛くも入學試験に及第して將に白雲迷ふ北海の濱こゝ加賀の國に向はんとせし時、暫しの名殘惜しむへく相携へて戀瀨の流に行きぬ。

思へばそは新月山の端に淡き夕なりき。蒼烟深く千樹を立ち置めて薄き墨繪をさながらなる鎮守の森陰にきらめきそめたる灯二つまた三つ、暮色濃き紫色なせる山の裾よりやゝに迫り來りて、麓の森先づたそがれ、村たそがれ、田も畠もさては後方の丘もたそがれたる中にはの白き戀瀨の河波、潑として水に音あるは魚やはねたる、悄乎たる友が姿、いたくも瘁れし友が面輪を見て我が心一種云ふべからざる怖の爲めに捕へられつ。友の曰く、さらば君また來ん年の夏休にこゝにて逢ひなん、たゞ雪の晨花の夕二百里遠き古里の空、ひたすら君が成効を祈りつゝ孤影悄然として佇める親しき友あるを忘るゝ勿れど。

親しき言の葉は猶耳底に存して約せし友はずでにあらず。山河依然たり、自然の色は長へに老いじ。しかも散りにし花は再枝にもとす可からず、逝きにし人遂に歸らざるを如何せんや。嘗ては關山萬里山河遠くへだてしをかこちしもの今や幽明境を異にして長へに相見るの機なし。嗚呼悲しからずや。

あはれ覺束なき世の運命や、空に浮べる白雲の風のまに／＼たゞよふごと。あはれ儂かなき人の命や、曉の星一つ／＼朝日の光りにうすれ行くにも似たらずや。

夜ごと／＼夢は飛ぶなる戀瀨川のほとり、あゝ我歸りて誰と共にか遊ばん。(終り)

## 落葉籠

野田 鳴水

## 一……曉の八幡

夜はほの／＼と、「鳩が峯」の頂より明けそめて、餌をあさる鳥の三つ四つ北の方に飛び行くがありやがて鶯の聲、鶯の聲なごかはる／＼谷間に聞えて、「八幡」はこれより漸く晝ならんとす。

夜中まで降りつゞきし雨の名殘未だ消ねど、晴れ模様の空のさまじいと頼もしく、どぢこめたりし霞は本津川の岸より晴れそめ、比良、比叡の山々なつかしう紫に匂ひ出づるに、驅けり行く雲の行方眺めては、都の方いとも戀しうなりまさりつ。

さては鶯の一羽、庭の面の梅か香なつかしさに、枝うつりいと面白う、春のうたうたひそめたる見るからに心からるゝ眺めかな。

「淺みごり糸よりかけて」とうたはれけん柳の、枝ぶりたかしく池の面に垂れたるほどり、一株の緋桃燃ゆるばかりの色に咲き出でたるが、朝霞の中にはの見て、水の面に躍る魚の數いとも稀なり。

と、見るかなたに、一人の少女の裾か／＼けなから、芝の朝露ふみしだき來るあり、曉の風はやさしく少女の長なす髪をなぶりて、そが口すさむゆかしき歌聲を吾に傳へつ、その人未だ戀を知らず。

## 二……友の許へ、

僕は今、嘗て君等と楽しく語つた僕の書齋の、其の隣りの室の風琴に凭つて、「五月雨」の曲と、「牧童」の歌とを奏し終つた所である、軟かい風は僕の書齋の庭前の若楓の緑したる嫩葉をそよ／＼とそよがせて、玄關の先きの白薔薇のゆかしき香を僕の書齋に傳へて来る、僕が此の手紙を書いて居る中にも、一羽の親雀が二羽の可愛い子雀を連れて僕の庭前へやつて来て、實に可愛い、親雀はしきりと何かあさつては、かはる／＼二羽の小雀にやつて居る、本當に可愛いネ。

又、今日此頃は、玄關の前の小さな僕の「花園」に、「白たま草」、「月見草」などが愛らしく咲き出して、一度君に見て貰ひたい位だ。

實に好い書齋！ 自分で自分の書齋を褒めるのは何だか可笑しいが、僕は本當に僕の書齋が大好き

No.1

それにつけては直ぐに君の書齋が思ひ出される、「男山」の新緑は美はしく君の書齋を蔽ひ、放生川の流は君の書齋に讚美の歌を捧げつゝ流れて居る、實に好い書齋だ、僕は、僕の書齋を愛すると同様の愛情を以て、君の書齋を愛する、イヤ御世辞では無い、確かに愛する。

僕は今でも眼を瞑るとすぐ君の書齋があり／＼と見ゆる、二階への段梯子を上つて君の書齋に入ると、先づ眼につくものは、室の東南の隅の大きな「テーブル」である、其の「テーブル」の上には時候柄（此時はちやうど高等學校の入學試験前であつた）代數や、幾何や乃至は三角、物理といったやうな、僕は名を聞いただけでも震ひつくやうな、震ひつく程に好きな本が並んで居る、然し

又一方には「スコット」の詩集や、「スケッチブック」や、「ウォーズヴォース」などが扣へて居るのには主人の心も推し量られてなか／＼ゆかしい。

此の書齋！ 僕等に取つては實に懷舊多き室である、僕はとても生涯君の書齋を忘れることが出来ない、君の書齋も亦永久に僕等を記憶するに相違無い、彼れは確かに過ぐる日、四人の豪傑が集つて、ジャム／＼と、花の如き未來の空想を悟つたことを、今も忘れずに居て呉れやう。僕等は此時一鐘の「ジャム」に舌鼓をうつて快談した、「ジャム／＼」の形容是に於てか起る、「

僕は昨日の午後「スケッチブック」を取り出して、「釣者」の章と「英國の田園生活」を讀んだ、讀むとすぐ君を聯想した、今日、君に手紙を贈らうと思ひ立つた動機も、全くそれなので、君が若し僕の手紙を受取つて、多少の愉快を感じたならば、君は宜しく僕に感謝するよりも、先づ、僕に此のやさしき心を起さした「スケッチブック」の著者、「アービング」氏に向つて感謝の意を表して呉れねばならぬ。

君は今、確かに「スケッチブック」中の人だ、殊に此の二つの章そのまゝの生活を送つて居る、實に羨望に堪へない。

家から二三丁出さへすればすぐ木津の堤に出ることも出来る、朝霞匂やかに、比叡、愛宕の峯々を包んで、雲雀の聲も浮き立つ今日此頃、舞ひ狂ふ胡蝶の跡を慕うて、「たんぼ」、「蓮華草」などの咲き亂れたる此の木津の堤を傳つて、時に葦の床にうた／＼の夢圓かに、ふと眼覺むれば、天王山は早や夕やけの空に赤くなれるに驚き、家路に急ぐ「牛かひ」の春閑な歌を聞きながら、なつ

かしの家に足を連ぶ折々の楽しさは實に如何であらう！  
さては又日麗らかに、風暖かなる折ふしは、綸を放生川に垂れて、君の所謂世のさまを示すに似たる「うき」を眺めてはこゝに天地静寂の氣を味ひ、時には意外の獲物を得て母上を驚かす時の君の得意實に想ふべしである。

僕は何時も、靡ろに匂へる霞の奥に男山のやさしき姿を眺めては、すぐ君を聯想するが常である君は今、あの書齋のあの「テーブル」に倚つて勉強に余念があるまいか、いや、今は午後だから定めしあの放生川の「溜り」で、「ウォットン」の詩でも歌つて居らるゝだらう、イヤさうでもあるまい此頃は「なまつ」もいつかな捕れぬといふことだから、屹度今頃は詩集でも携へて木津の堤をさまようて居らるゝだらう、それはいゝが先きの日のやうに、又牛に本を踏まれては居られまいか、なごさくさくのことを思ひつゞけるのが例だ、君よ笑ひ給ふ勿れ、是れ人情の常なれば。(以下略)

### 三……宮島の秋、

生は今、日本三景の一にして其の名高き宮島の海邊に立ちて此の書を認め居り候、山の端に春かゝる夕陽は、其の名残の光を、大鳥居の頂に投げて、二三の漁舟一日の業を終りて、今し彼方の濱に錨を下し居り候、かゝる中にも夕の色は漸く遠きより至りて、四顧人籟を聞かず、唯靜かに寄せては返す波の音のみ此仙境の靜寂を破り居候、宮島の景は、兄も既に寫真なごにて飽くまで御承知の事故、詳くは申上げず候、たゞし、只今恰も満潮に向ひ、社殿廊廊水上に浮んで、さ

ながら寫真そのまゝを見る心地に候、神鹿兩三頭水を涉れる、亦畫中のものに候、殊に社殿は前に海を叩へたるが上に、後に山を負ひ候ことゝて、山水能く其の調和を得て、まこと絶景の名に背かずと存せられ候、殊に只今は期秋に屬して、後山の楓葉の霜に飽きたるもの、配置よく翠松の間に點綴して、今一段の眺めを添へ申候、たゞ怒むらば社殿修繕中にして、些か殺風景の氣味あることに候。

潮は今全く満ち終りぬ、海面は恰も膏の如く靜かにして、たゞ海月のあちこちに微光を放つのみ候。折から帛を裂くが如き一聲、吾か頭上を掠めて、余音は遙か彼方の松林に没し候。

明くれば拂曉、彌山に上りて、眺矚の快を恣にすべく、紅葉瀾を訪ふは何れ明日の午後と存じ候余は后便、匆々。

### 四……夏の嵐山、

「……春は嵐山、御室の櫻」と俗謡にまでも歌はれる位で、誰しも嵐山と言へば必ず櫻を聯想する、實に尤千万のことで、嵐山は由來櫻の名所に相違無いのである、天氣がぼか／＼と暖かくなりて來て、野邊は一面の糸遊である、た庭の櫻も咲きかけたと來るときあ行くは、「猫も杓子も」といふことを世間で言ふが、春の嵐山には所謂猫や杓子の行列である、といふと僕は何だかステキに上品な貴公子のやうに聞えるが、實申せば僕も其の杓子の一員で矢張陽氣になれば、ゾロ／＼出かける連中なのである、満山是れ花とも言ひたい程の嵐山の麓を水晶のやうな大堰川の流が洗つて居る様は、實に何とも言へない好い景色である、眼も醒めるやうだとは、こんな景色を謂ふ

のだらう、だが、花と水とだけならばいゝのであるが、あちらにも、こちらにも掛茶屋が造られて、「た休みなさい」、「たかけ遊ばせ」と嬌かしい聲があそこにも、こゝにも、喧しい程であるが上に事によると、料理店の二階には、時に絃歌の音を耳にしないにも限らぬので。……先づかういったやうな有様であるから、春の嵐山は言はゞ殺風景で、花を見るんだか、人を見るんだか分らないのである、殊に、春、嵐山に遊ぶ人の多くは、「酒無くて」の連中多きに於てをやである、之れだけ言へば春の嵐山の摸様も大体は察せられるが、之れに反して、夏の嵐山の景と言つたら、それは實に天下の絶品也、夏の景色殊に初夏を以て最も優れりとするのである、翠色滴らんばかりの若葉青葉の下蔭を傳つて、大悲閣の方へでも登つて見たまへ、時には又立ちとまつて、渡月橋の方をも眺めて見たまへ、清い／＼透き通るやうな大偃川の水面には繪にかいたやうに、筏がこゝに一つあそこ一つといふ具合に浮いて居つて、岸に近い岩かげには、若鮎が六尾七尾、打ち群れて、いかにも樂しげに遊んで居るのが見られる、又渡月橋の方から、向うを眺めると、恰好の好い松の樹ばかりで出来て居る松林を隔て、温和な比叡の姿が、なつかしく現はれて居る、比叡、松林、渡月橋、それが又、非常に配置よく位置を占めて居つて、殊に夏に於ける色彩の具合といつたら、無いネ、畫師でも詩人でも、此の初夏の嵐山を一個のカンバスの上に表はし、一首の詩の中に現はすことが出来たならば、彼等の天職實に悉せりと言ふべしだ、僕の言葉が法螺と思ふなら、まあ一度来て見たまへ、殊に大偃川に沿つて、山の岨を傳つて、保津の方へ溯つて見やうなら、又實に一般の趣きがあらう、殊に夏は遊ぶ客も稀であつて、自ら別天地に入る思ひ

がある。吾人をして叫ばしめよ、夏の嵐山を知らざる者は、未だ其に嵐峽の勝を語るに足らず、況んやこゝの名物、「花より團子」は、夏に於て其の味殊に一段なるに於てをやである、(マサカそんな事は無い)

## 五……軍港の朝、

予は今吳軍港の一角に立てり。

「富士」を始めとして、港内に碇泊せる艦艦幾隻、心地よき朝の風は、富ましく其の軍艦旗をあわつて、帝國の前途を祝するものゝ如く、時に一羽の隼、まつしぐらに下し來れる、げに折からの眺めかな。

軍艦附屬の小蒸氣船は、せはしげに軍艦より軍艦へと航し、輕快飛ぶが如き様、見るからに心地よし、

見よ、「富士」は其の巨大なる烟突より黒烟を吐き出せり、水兵のせはしげに甲板を來往するを見ずや、艦は今何處に向つてか其碇を抜かんとするなり、

今、彼方の島陰より現はれ出でたる巨大の一艦を見ずや、悠々として四邊を睥睨し來るが如き其の態度のいかに壯嚴なるよ、是れ過日來神戸に在りし「八島」の此處に來れるなり。

嚙腕たる喇叭の響は、松杉鬱蒼たる彼方の丘の海兵團より起り來りぬ、朝の課業の始まらんとする也。

港内波は靜かにして水面鏡の如し。



表に平和を唱へて、裏には軍備擴張に汲々たる、理想と現實との撞着をどがむることを措いて、君よ、先づ來つて我が帝國の隆盛を謠歌せよ。

## 京みやげ

刀 水

關東に生れ關東に育てる身の歴史をくり返す度毎に是非とも京の名所こそ見たけれど想ひしが道の程も遙かなれば、とかくさわることも多くて心にまかせず。然るにこの金澤に來たりしより漸く日頃の願を達せしこそ喜しけれ。これも友の情にて。

學年試験の重荷もまづ無事に取り去られて待ちに待ちたる夏休みは來たりぬ。殊に本年は大坂に博覽會も有ればとて京の友鴨水の君は是非にと誘ひぬ。欣喜雀躍、誘ひに應じて京見物に出發せしは六月二十七日、歸國の途の折なりき。

夜の氣未だ全く去らざる金澤停車場内、驛夫が吹く勇しき笛の音と共に瀛車はゆるぎ出でぬ。

いざさらばし別れん犀川の下ゆく水よ金澤の城

ふを訣別の辞ともして見返る間もなく金澤の市はいつしか後になりぬ。城の松も姿を隠しぬ。折しも五月雨の頃とて陰雲地にたれて空模様何となうただやかならず。さはれ

さみだれの雲間をいで、雪ながら瀛車に向へり越の白山

これもしばしの別れを惜むかとなつかし。手取川を渡れば松の木の間海の陰顯するもにくから

ず。何の奇もなき田野山間をぬひ行きて例の杉津に至れば幾多のトンネルをへて向ふ敦賀灣浮ぶ白帆も珍らしや、

トンネルにあける旅人なぐさめてつるかの海の美しきかか

斯くて山又山と過ぎ行きて程なく來たれるは琴瑟の靈水也。北國の旅路も終へて南日本に出でしかと思へば漸く世間に出でたる心地しつ、米原にて乗り換ふ、右に漫々たる靈湖をながめつゝいつしか逢坂山のトンネルもぐぐりて山科と過ぎ稻荷と走りて早くも京都々と勇しき聲の聞えぬ。あゝなつかしや身は今しも夢にのみうつりし故都へとはつきし也。瀛車を下れば早くも鴨水の君は迎へられてプラットホームにあり。嬉しとも嬉し。市街を縫ひ行くにも何となく歴史の跡を歩むが如し。相携ひて東寺に至る。縁りいやこき老杉のひまに高く聳えたる五重の塔をぞろに古の面影を示す。これより東西本願寺に詣で遙か東山の麓に清水寺を望み比叡の高峰も仰ぎつ。日もはや傾きぬれば阿彌陀ヶ峯を右に見て寺町通りなる友の宅に至りて宿す。夜河田、中井の二子遊びに來たる。京の三十其にその山水秀麗優美なるを吹いてやまず。氣焔萬丈當るべからざるものありや。

翌朝雨降りしも後晴れたればとて友の案内にて見物に出づ。柳の影なつかしく涼風吹くよと思へばこれ鴨川なりき。

聞くだにもその名ゆかしき鴨川に京の少女きぬ洗ふ見ゆ

美しき大極殿を左に拜して南禪寺に入る。萩の上葉に露多きは朝來の雨の名残りなるべし。秋の

頃やいかにと問へば見物にくる人多しと友答ふ。しかもその節ならざるを如何せん。とくすかの疏水工事の施されし地なり。本堂は數年前烏有に歸せしも山門の巍然たる尤にはこるべし。こゝを出でて永觀堂に至る。江葉の頃はいかにと忍ばる。法念寺は法念上人の遺蹟とか。幽邃の情云ふべからず。

ちりの世のけかれも消えて苔清き京の御寺のかけなつかしき

鹿ヶ谷などこのあたりと云へど急げばえよらす。直に銀閣寺を見る。幾多の寶物など見終れば小僧茶菓を出す。壯麗と思ひの外名の捨分の一にも及ばず。贅澤とはいふものゝ足利時代はさすがに未だ質素なる哉。寺を出でて右の方に白きは白川の里なりと。吉田、黒谷、眞如堂と過ぐ。総じて京は名を聞きしのみにてなつかしき限りなし。大學より高等學校の傍をへて寺町に歸り、午後は更に仙洞御所及び御所を拜す。御園の緑なつかしき間に敷きつめられたる白砂いと清し。長く長く立ち連なれる塀に老松の掩ひかゝれるなど古畫をそのまゝ也。衣冠束帯の月卿雲客も忍ばれていと貴し、これより町を縫うて北野に至り天滿宮に詣づ。神殿は中々壯大なれども森林のこれをかこむものなく市人むれをなしていとにぎやか也。あはれ京の名所にも似合はず、俗氣滿ちたるものかなと云へば友も惜しがる。官幣大社平野神社を伏し拜み郊外に出づればこゝらが所謂西陣にや機の音聞ゆ。そゝろに故郷の風光の忍ばれずしもあらず。と見れば愛宕、高雄の山々西に高く聳わたり。こゝや何の名所、かしこや何の舊蹟と友が教ふるを盡く暗記せんには餘りに多かりき。兼好法師が住みしと云ふ双ヶ岡を左に見て御室村の仁和寺に詣づ。遠く塵埃を離れて鬱

蒼たる森林にかこまれたる幾多の古堂その静けさ白晝とも思はれず。げに天狗でも住みそうな所なり。月見に名高き廣澤の池、さては大覺寺、釋迦堂等の前を過ぎ、茂れる木の間を行きつくせば大堰川の清き流れ昔乍らの琴をしらぶるもなつかし。吐月橋畔よりながむれば幾年の間繪にのみ見たる嵐山は水をへだて、吾等を迎へたり、やがて橋を渡り急峻なる山麓をたどり行けば今迄の汗はいつしか取り去られていと心地よし。傍に清泉の落ちくるあり。しばしとて休む。友曰はく花か紅葉の條ならざるを恨むと。余答へて曰はく、

大井川花も紅葉も何かせん吐月橋畔河風すゞし

急げばとてすぐもと來し道へ出で花より團子とて名物の團子を味ふ。風味殊によし。休むこと拾數分立て天龍寺に詣づ。京都五山の一、足利尊氏の建立せる所なり。靜御前の庵を結べるもこのあたりとかや。西北に小高きは今一度の御幸またなん」とよめる小倉山なりとぞ。このあたりが即ち有名なる嵯峨野にて小督局、祇王、祇女、佛御前等の舊蹟を初め幾多歴史の遺物至る所に散在してそぞろに遊子の情を動かす。やがて京都鐵道の嵯峨驛より乗車す。今は京より丹波の方に出づる氣車がこゝを通過するなり。時に日は嵐山の後に没して夕もやかすかに立ちこめたり。山も川も森も里もただ薄絹のその如く。われは思はず深き懐古の情にその身を忘れし折り柄けたたましき汽笛一聲、ピーとひびきわたりぬ。われはふとわれに歸りて。

琴の音のいづこの松に残るらむ氣車の笛なる嵯峨の山里

なつかしき嵯峨の里もいつしか後になりて花園を過ぐれば二條なり。こゝにて下車し行く／＼二

條城を松の木の間にながめつゝ、歴史をくり返す間もなく足は早くして寺町に歸りぬ。今日はいたぐつかれぬればとてしばしねころび夜は京極の雜沓を見、四條大橋を渡る。祇園の夜櫻しかも葉櫻を賞して祇園の社に詣で再び京極に出で、氷屋に入り其の甚だ盛大なるに一驚を喫しぬ。」  
 次の日は天氣いとよし。まづ鴨水の君と第三高に至りて學年試験の成績を一覽し歩を進めて下加茂の社に參拜す。森靜かにして泉清く、神殿古びて時に喃喃たる鳥聲を聞くのみ。氣自ら澄みわたるを覺ゆ。こゝが即ち糺の森なりと友教ふ。

人の世の心の底もたゞすらむ糺の森の神のましまひづ

去て鴨川を渡り松風に涼をととりつゝ所謂加茂の堤を行く壹里ばかりにして上加茂に達す。晝なほくらき森、朱の鳥居、行きつくせる所にちぎ高き神殿は仰がれたり。こゝをかこめる清き流れ、流れにのぞめる小さき黄なる草花びに一点の俗氣あるを見ず。

空を掩ふみいつの程も仰がれて夏なほさむし上加茂の森

參拜し終へてもと來し道を歸れば正午近き日光は遠慮なく吾等が頭上を照して暑さいふべからず。情なや鴨の河風も吹かず。比叡のね嵐も枝をならさず。たゞ汗のみ、水の如く瀧の如し。止を得ず途中より電車に乗りて歸る。午後は知恩院に詣る。老松大杉の鬱蒼たる、山門の巍然たる本堂の壯大なるさすがに淨土宗の總本山、京都名物の一なるかな。有名なる傘もあれよと教はり梵鐘もながめて圓山公園に出で更に四條より電車の便をかりて七條停車場に達す、時に四時過ぎ、余はなほ大坂の方へまわらむとするなり。情あつき鴨水の君はわざ／＼プラットホームに迄送ら

る。瀛車は動きぬ。余は君が數日の勞を謝し西に向て去る。あゝなつかしき友、ゆかしき京都、はや別れならむとす。

友のかげプラットホームと思ふまに東寺の塔もはやかすかなり

これより余は武庫山下、茅渚の海邊、灘の里に長部の君をとひ君の案内にて、大坂、堺、住吉より奈良等をめぐり幾多珍奇の土産をさげて利根河邊なる故郷へと歸りしは七月の初めなりき。この行や、實に友の情によれる事多し。依て拙き筆ながらもその謝禮にまでとてかくはものしつ。」

(歸郷日記より)

## 思 出

斗

牛

江南の橋も、之れを江北に移せば、枳となるとかや、我は江南の橋に非ざれど、花の都に流離ふ事十又五年、しかも父母の若心焦慮を以て、貯へ給へし黄白を、徒らに費し、外には能とせしところ無く、一葉の征衣、藹然たる淺間の嶽麓を辭してより、得たるものは、之れ正に拭ふにやしなき萬丈の紅塵!

消えなんどせる短檠の光、復榮え返へりて、今や最後の一燦、眩きばかりに輝き亘り、廣からぬ一間の隈々を、割然と見せしも一瞬、見え／＼瘦せ細り行く焔は、壁上に印せる幻の如き我が俤を、闇より闇へと奪ひ去りぬ。

「泣かんかな、泣かんかな、」

されど我は男子なり、丈夫なり、いかで妄りに袖を濡すべき。

「さなり、我は男子なり、丈夫なり、よも木石に非ず、泣かざらんと勉むるも、人に拔んで、脆き我か情、他に越えて觸れ易き我が感の、あはれ能く之に抗すべきもあらず、まよふ女々しと笑はる笑へ、男々しからすと誇らば誇れ、我は泣かざるを得ず」

向が陵ふく秋風に烈しく、木々の嫩葉の誘はれて、或は遠く西海の波濤に漂ひ、或は宮城野の芳草に交はり、さては花薫る洛陽東山の裾にも、散りくとなりし其の中に我は又、越路の雪深き荒野原に、松の葉ならぬ一人桐の葉、恩愛の東京に留るを今宵を限り、明日よりは、瓌玕たる北斗の下に、家郷の天を仰ぐ身となるを……

「泣かんかな、泣かんかな、吁遂に泣かざるを得ず」

吁、東京！ よしや其處には、紡績會社、石油會社より投げ出す、石油の細粉、石油の青泡の、病しき臭を放つて、水面遠く漲れる隅田川、昔し男の風雅は、一錢蒸氣のスクリーパーに破られて、磧に生へる叢草の花、潺湲として、群青を溶かしたらん、千曲の川面に、雪かそこぼれて、波のまにまに流れ行く岩鼻のあたり、白鷗の夢安らかなるの眺は望まれざるも、而して又、天うつ煤煙砂塵の八百八街を蔽ふて、喧しき車馬の軋り、器械の音に、聾ひ身を置くべき、閑雲低く垂れて野鶴の聲を聞く、桑梓の山村水郭は無くも、竹椽茅舎は有らねども、我は東京を愛しども、厭はしとも思はぬなり。

これ、其處には、長はに融々たる春光を浴びて立てる、エデンの樂園、武陵の桃源を其まゝなる、我家の有ればなり。其處には常に燃ゆるが如き愛を以て、只管ら我を羽含み給ひ、雨の晨風の夕、我が健全を神に祈らせ給へる、マリアの如き母刀自の在すあればなり。其處には、我が胸の、憂愁に結ばれたるのとき、來つては嫣然滴らんばかりの嬌愛を、白薔薇の色なす、双の豊頬に浮べ、其の清しき眼は、たとしへなき光を絶えず我が面わに注いで、我が最も好めばとて、奏するバイオリンの妙韻！ 悄悄の雲霧は晴れ、恍惚として、さながら我を天國に誘ふ、エンヂェルの如き妹のあればなり。其處には、我が惑を解き、迷を醒し、我が手を取りて、或は文の林に、或は學の海に、孜孜として、我を導き給ひ、以て我が智を増し、能を發き、數ならぬ我を惠觀して、今日あるに至らしめ給ひし、恩師のたはすあればなり。其處には、我が鬪鬚の折より、同し學の窓の下に、扶けられつ扶けつ、螢雪の苦を凌ぎては、花麗はしき晨、月明らかなる窓、共に稱へ共に賞で、共に吟じ、共に謠ひし、肝膽相照らし、意氣相投せる、刎頸莫逆の舊友あればなり。さては又、我が理想を高め、思想を養ふ、千古不滅の雪冠を戴き、十三州の青空を磨して聳ね立つ、富士の高嶺の壯觀あればなり。さるを、いかあれば、我は今、此の懐しき、慕はしき、戀しき、將た又我が生にもかへ難き、彼等の凡てを打捨て、重山復水都の空を隔つる、北辰會の寥原に、天外の孤客とはならざるべからざる、一日三秋とさへ云ふものを、まして、一千九十五日を——三年を……いかで堪へらん、堪へられん。

一葉の端書——夫れにはかの流罪の宣告を記せる——を抱いて、我が体は、野分に慄く薄の如く、

わなくと震へ、胸うつ鼓動は烈しく轟き、煩悶は更に煩悶を生じ、今や千條の血管に熱湯を注がれたるの思ひ、吁我か萬事は茲に休矣、失意喪神の逆浪は五尺の小軀を没し去らんとす、なご運命の神は我に斯く冷酷なる、此の時此の瞬間、止めんと欲すれど、はふり落つる兩眼滂沱の紅涙を奈何せん。

流光飄忽として、月は三度更りぬ。悄然として、獨り寒聴の下に、流星の行衛を贖むれば、さし來る感慨は千萬無量！ 識らず我か魂は今果して、何れの處にかさまよへる？ 二十五弦夜日に彈じて、悲壯の曲を調べ、葉上の寒光白露冷かなり尾山城外の秋！

橘裡山川

秋の神いつしか梢頭を訪づれそめて、まさに消えんの虫の音は、唵として乾坤漸く寂びなむとす、  
「左なきだに簾を片手の風流を野くれ山くれ恣にして、刈田の案山子を吊ふ底の慈悲心はあるものを、今や俗臭滿ちし氛氳も、上りては九阜の白鶴が涙とも凝るべき秋、それよ落穂を漁る雀が囀りも、態どならぬ調べとしも聞き得つへき秋、この秋にして我等豈雅懷一日の清遊を企てざらめや」

こは甲の述懐なりき、乙のあごうつめるは

「越の浦風は白鷗の夢を乗せて吹く、我等天地の清澄に浴して、ここに歌なきを得むや、詩なきを得むや、豈夫れ文なきを得むや」と。げにや天下の秋の風、孤影寒き瘠せ法師が短袴を吹けば、天高く馬肥ゆと叫び出せし四貧生、曰く秋風、曰く外圃、曰く窓月、曰く紫光、頃はなが月二十四日、明暗相半ばしぬる由の秋季皇靈祭、一ヶの行厨を腰にして、四影漂然として東南に向ふ。

老杉に日影もる六斗の林をすぎ、藁葺きの軒いとど風流なる地黄前町をよぎれば、こは田圃闊けたる一徑路、

遠ち方の部落、なほ惜むに余る青葉に埋もれて、ひとり魁けし櫛の梢には、稍、色を流して、飛び交ふ鴉もいや黒う見ゆ、玉蜀黍いつの間にか畠の畦に枯れて、驕れるものはたゞ芋の蔓、

野菊は路もせに亂れ咲く、  
朝日うつらふ露の下に、なほ鳴き飽かずとや蟋蟀のかなしき調べ。仰ぎ見れば、高く高く而して高く澄みのぼりたる秋の空、古のなにかしが詠じけむ「蕩々たり秋穹落、一碧寸塵を留めず」の風情、恍惚として眼を平地に落せば、忽然として世は鮮なる油繪と化す。

駄馬の鈴、昌平の音を傳へ、  
田五作が鼻歌、余韻天上の告天子を驚かす、  
我等は欣然として天光の熹微に浴して進む。

制服に下駄を重ねなる、三ッ紋の茶色に褪せし一貫羽織、高足駄の楮も似通ひたる案摩ぶり、未の

刻ばかりなる破れ袴、氣のみ驕りし四影は、輿に乗じて且つ語り、且つ語り行く。窓月近眼を一閃して、勵聲して曰く、乞ふ過ぎし七旬、乃公窮親ら實驗せし催眠術を語らん哉と、衆拍手として應といふ、

得意満面、喋々として語り出せる窓月、口角泡飛んで時ならぬ虹を吐き紫光まづ誤て溜渚に入る。外圃必死となりて肩上一の荷を保つ、何ぞやと、問へば曰く、乃公が仁慈、郷等やがて仰ぐを得むと、秋風發きて曰く「ア、外圃が仁慈、蓋し煎餅二十錢」

途五丁、長からむや、さはれ湧きて流る。談海の、洋々として尽きぬ樂を野もせの千草に注ぎつゝ行く程、いつしか山科温泉に着しぬ、新に築れりと虎屋の二階、八畳の間、苧繁き原を前に、山又山の眺を右に見て、こゝに小天地を開闢しぬ。

菓子は取るべからず、温泉には一回入るべきこと、かくて天も焦げよとばかり氣焰は燃わ上りぬ。

外圃が死を賭して守りにし所謂仁慈の賜物は開かれつ、赤色せる茶を啜りて蘿葛の秋峯に對す、溪聲玉瀾に響きて楚辭を讀むかと疑ひ、落葉を焚きて愁腸を賺す底の偏狂なきを怨む、外圃と紫光まづ浴す、「温泉水滑かにして凝脂を洗ふ」の風情はなしと雖も、仰いで「清澄の賦」を吟ずるの快はこれあり、

浴成りて歸る、紫光昨夜不眠の哀を訴へて片隅に横はれば、窓月いつしか本氣になりて無何有の郷に入る、鼾聲雷の如くにして呼べとも起たず、外圃秋風嘆じて曰く、ア、窓月、夫子自らよく催眠の術を完うせりと。

時辰十一点、紫光夢よりさめて、連りに秋の蚊の恐るべきを説く、窓月夜、白河に舟を浮へて未だ歸らず、こゝに残余の三者まづ行厨を開きて食す、秋風が卷餅を最とし、紫光が油揚、外圃が白髮昆布、頻々としてこれ天下逸品の珍膳、相顧みて莞爾、須臾にして平げ了んぬ。

秋風咳一咳して曰く、「動を好むものは雲電風燈、寂を嗜むものは死灰枯木、須らく定雲止水の中、鳶飛び魚躍るの氣力あるべし、窓月とこしへに眠りて天地轉た寂寞、乞ふ吾曹をして動中に寂を求め其寂靜に處して一片の文辭あらしめよ」と。外圃即時應ふらく、「長へに憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼くところに百花香ばし」悠々として禪三昧にあるものゝ如し。

紫光起て窓月を促し、夢より蘇へりて筆に覺めよといふ、窓月不平滿腹、睡たき眼をこすりて曰く、「夢を驚かして文を作れといふ、乾竹に汗を絞るといづれぞや」と、紫光聲に應じて曰く、「いざさらば扶けて斷橋の水を過ぎり、伴ふて無月の村に歸らん」と。

衆快と叫び、乃ちわのがじと題を出して好む所を作る、左の二三は即ち其即題なり、即ち即席の文詞、未だ推敲の作にあらず、讀者其文姿筆脈の不調を恕して可なり。

「紫光ひねくりて曰く、我れ乞ふ獨文に譯して出さんと、三者驚きて曰く、汝紫光、夢を見しかと」

## 夕白露

秋風生

九十

南の渚風<sup>ふり</sup>姿面白き老松のまばらな林のかなたに流れのごかに碧も清い清瀨川、岸は一面の蘆むら秋もまだ浅い折なから早や枯れ初めて水に落す影は亂れて居る、川の向ふは枯草の堤を越へて裏枯の雜木林、冷たい露の深さうな小路がその下陰に消え入るのが見ゆる。

どんよりとした秋の夕空、今や名残の日影もやうくうすれ行く雲のうら淋しい瘦山の頂に低う垂れて、折からの風細やかな川波たてなから水面をかすめてはや此方の蘆むらにサハハハとの音、清瀨の川邊はやがて淋しう暮れやうとするのである。

あたりの静けさを破る潑瀨の音に振かへれば、蘆間がくれに見ゆる渡舟のかげ、渡守といふのは禿頭に腰も曲つた老翁で、今しも垂れた釣糸の端にキラリと一尾の魚、その波紋はまだ消えずに静かに廣がり行く時しも、南の岸邊に深張の洋傘の影か木の間に洩れて見えたので、老爺はやをら立上つてさす水馴棹靜かに舟は岸邊に。

見上ぐれば洋傘の主は早や渚に下り去つて居る、頬のあたり紅の花は散つて眉根に愁の雲は掛つてはゐるが、愛くるしさは伏目がちの睫毛や艶あせた唇洩る、眞白い齒なみの口元にもほのめいて居る、今年の春、花吹雪の中を此邊の村では稀な美々しい行列で川一つ向ふの素封家<sup>もとのま</sup>河田へ嫁いだのである、其夜は圓かな夢を結ばれなかつた村の若衆は二人や三人でなかつたとのこと、年は十八、名はた敏。

「サア、乗ろよ、ソレ危ねい。

「た邪<sup>せ</sup>広でも一寸と向岸<sup>むかえ</sup>までネ 爺さん頼みますよ。

た敏はすぼげた傘を舷によせかけて胴の間に敷いた赤毛布の上に坐ると、爺が棹で夕日が美しくきらめく川面を掻き亂しながら。

「お敏坊！ 今日<sup>こんにち</sup>は實家<sup>まじ</sup>のたッ母<sup>はは</sup>アの乳飲みに行くだかね、モウ暫くすると飲まさなくちやならぬやうになるだかう今の間に鱈腹飲んで置きなヨ。アハ、、、

た敏は舷に手をかけながら見るともなしに眼は水面を、

「ソソナに氣樂<sup>きらく</sup>なのから マア どんなに嬉しいだらう

答へるともなくつふやいた語か震へて居たので、爺は訝かしさにふりむいた時、た敏の眼からは涙の露がキラ／＼と落ちて舷に碎け散つたのでこは唯ごとでないといじらしさに流石聲もしどろに。

「マア どんと立<sup>た</sup>座<sup>ざ</sup>したのだから、コレた敏坊！

「ワ妻はたん出されて來たんだよ

慰められてかよわい女の身は反つて悲しさ胸をついて袂を顔に泣き伏したのである、やがてやう／＼あげた涙の頬には鬢のわくれ毛夕風に亂れかゝつて居た。

今早やくも舟は川の中程に出て見返れば夫の村も物かけに見ぬやうになつた。

彼方の森のかげこそ我が懐しい父母の家であると思ふ心に今更ながら萬感胸に滿ち來るのであ

る。

ア、自分から妾ほど不幸な者はあるまい、幼少の折はや母様に別れして、今は唯妾を膝に抱き上げてお伽噺をして下すつた昔の色白でにこやかな顔を感じて居るばかり、それも此頃は何か斯う臆けになるやうな氣持、繼々しいた母様に仕へしたはともかく、此春嫁入の折にははその仕度など敷へたてゝ村の人々誰れ羨まぬものもない幸福の的になつた身の聞もなく妾を飽くまで可愛がられた祖母様の安心せられたせいか、思へがけぬ敢ないたかくれ、たゞ一夜歸つて御介抱上げたばかり、それに縁づいた夫も初めこそやさしかつたが國會議員の撰擧とやらで度々都へ上られたので、いつしか悪風の染みやすう、洋盃ヨウブツの持方や都々逸やを覺えられてあれ程物堅いと評判の人が么麼してと恠ぶまるゝ迄の變りやう、終には土臭くてふつゝかな妾を厭ひなさるゝは無理もない事、やさしい言葉も少うなつて、はては碌々た用もた仰らぬやうになり、此頃は出て行けがしの御所業、何れは妾の至らぬからと實家の父母にも云はず獨せつなさを堪へて胸に秘めたも、これも一時いつか又、どの望からであつたが、とうとう今日の仕末、汝の所へはもう云つてあるから一先歸れとの言葉にせん方なく心を定めて來たが、姑御の玄關まで送つて出られ有難や涙ぐまれて、心配せずと居なさい又何とか妾がと手をとられた時、胸がせまつてごうかよろしうもたゞモウ口の中であつた、聞けば莫大の運動費にた財産も少しは減つたとのこと妾の身はとまれ、此儘で行けば終にはた氣の毒な事にもならうもの、ア、！

實家へ歸つても早や白髮の眼にたつやうになられた父様に么麼して此御心配をかけられやう、い

つもの様にサア〜此方へ旦那もやさしいか、た前も風邪でもひかぬかのと仰られたらマア何と申上げやう。

いつそもう此舟がいつまでも向岸へ着かねば！

涙の眼をあげれば舟はいつか岸近うなつていた。

春此川を渡つた時にはあの峯にも霞がかゝつて花も美しう草花のちり浮く川瀬も澄んで舞ひ上る雲雀もさえ〜と聞かれたに、今日のさびしさ！ 悲しさ！

ア、と深い溜息一つ思はずも舷近う立上つた時た敏の青白い顔はさゝめく波紋に亂れながらも底の底からのやうに寫つて、それがいつか亡き母の顔のやうにも見えた、た敏は何となうそれを見入つたのである、渡守の爺はふと此を見て、

「おんさんでもねい、コレサ、ジツと坐つて居ろよ、危ねい。

流石に老爺も悄どしながらもさす棹の手は止めなかつた、暮れかゝつた日は今しも彼方の森かげに半ばかくれて俯伏したた敏のま白い襟足も照らされぬやうになつた、舟はモウさら〜と蘆叢を分けて岸の砂にサツと、其拍子にた敏の身体はユラ〜とはしたが立上らうともせぬので、爺は

「サア 着きましたでがす ドレそこまで送つて上げますべい

サア、

た敏は夢心地に云はるゝまゝ茫然ほんんの後に於いて機械のやうに、林の中の草深い小路を駒下駄の



音もたてずに歩いて行くのである、物思に亂れに亂れた頭を深くうなれたながら、先だつ爺の落葉ふむ淋しい草履の響に耳をすましながら。何處を玄塵して來たのやら夢に夢みる思。

「サア來ましたよ」

高聲に驚かされてふと見上ぐれば早やわが家の玄關先、たゞモウ胸は迫つて悲しさのあまり眼に涙もなう、其場に立ち縮んだまゝの折から玄關に可愛らしい足音。

「ヤア姉さんが來たよ、姉さんはモウ河田へ行かないんでもよいんだと、僕ア嬉しいなア、此を聞つけて立出る父親、娘の哀れげな姿に先づ涙ぐんで、

「サアお敏上れよ、何にも心配することアないぞ」

お敏はモウ夢が夢中、つとかけ上りて父の袖に絶りついたらまゝ

「たゝた父さん、か堪忍して！」

とばかり板敷の上に泣き伏したのである。

折から門前の樺の大木に一羽の鶯が血吐くやうに泣叫びながら、羽音高くとんだので、夕白露の一雫二雫其下に垂れ伏した萩の花むらにハラハラと。 (完)

### 乳母車

外 圃

(幼子失ひたる母の心を)

葦摘みつみやわ草を、

踏み勞れては小車に、

笑み暖かくねむる子の、

夢は蝶とや成りにけん。

繪日傘かざし花園に、

車止めて白薔薇の、

蜂に泣きたる俤も、

今はいづこにしのお草。

葡萄の下の夕づく夜、

愛に酔ひたる母と子が、

涼しき窓に手まくらの、

昔ばなしも昔かや。

桐の一葉を先だて、

返らぬ朝の初あらし、

花の姿は新ばかりの、

鶏頭の露と消れ果てつ。

あはれ花敷く草庭に、

轍の跡は残らねど、

したひて去らぬ蝶見れば、

落のる涙のあつき哉。

女と生れしたこが身は、

秋のあはれの追懐の、

起きて果敢なき恨をば、

拂ふにあまる心かも。

見よ澄みわたる大空に、  
天の川原に石積みて、

亡ふ子の魂か新星の、  
母の名呼びて遊ぶらん。

なれし車にいとわづらひ  
芙蓉の鬮にこのゆきん

秋の千里の床しをてい  
下りまほす佛迎ふなほ。

DER SPÄTHERBST.

J. Kiso. [Schikō]

Es giebt keine Antwort.

Der über dem alten Zederbaum hängende Halbmond erleuchtet die unglückliche Dame Mizu—ko, die von dem kalten Herbstwind zittert.

„Dame Mizu—ko“ sagte ich, „haben Sie sich! Seien Sie nicht mehr so besorgt! Warten Sie meine hoffnungsvolle Nachricht.— Herr Kimura hat vielleicht etwas missverstehen..... Zweifellos Will ich sie beide versöhnen, ja, sicherlich.....“

Die einzige Antwort aber ist das zitternde Haar, das eben von dem kalten Wind bewegt wird.

Plötzlich kniet Mizu—ko, meine geliebte Base, nieder auf den Boden, weinend und schluchzend,

als ob die Thränen ihr Leben sei.

„.....Schon, aber.....ge.....sheden?! oh—oh—

Und sie wird zur Tiefe der Thränen wieder sinken.

Unglückliche Dame! Heute vor einem Jahre war Sie eine schöne, muntere Schülerin! Heute, aber,

ein zerbrochenen Spiegel! das umgestürzte Wasser! ah! eine zerbrochene Perle!

Eine Windgans fliegt durch die helle Luft über das träumerische Feld mit so trauriger Stimme. Es

muss vielleicht eine verirrte sein.

Weil nichts sie trösten kann, schweige ich still.

Das Mondlicht ist so blau, und der Herbstwind ist so kalt.

× × × × × × × × × ×

Am 24 August von Meiji 36, empfang ich einen unvernuntheten Brief.

Mitzu—ko, die nach jenem Aufstande verdrben irgendwo sich aufhielt und ihre Eltern, Freundin und Verwandten bekümmerte, sendet mir einen Brief:—

Meine geehrter Vetter!

.....ich erinnere mich. Mein Leben ist sehr schwer. Mein Sicksal ist so traurig. Aber dieser Unfall muss die Folge meiner vergangene Sünde sein. Daher bleibt keine Groll gegen Herrn

Kimura—der war einst mein lieber Ehemann.

Mein geehrtet Vetter, aber wie traurig und wie strafbar ist es, zu küssen das Haar vor dem Spiegel! Danna's schaute ich in den Spiegel,—wie verwirrt mein Herz war……

Weil so etwas niemand lieber hört als der liebe Buddha, habe ich meine Freundin in der fernem Stadt besucht. Und durch deren Vermittelung bin ich eine Nonne geworden.

Ich schor meine Haare, die mein einziges Kleid waren und die einzigen Lieblinge so lang bis zum 17 Jahre! ja! ich weihte mich ein. Jetzt wohne ich nicht in der gewöhnlichen Welt, sondern in der geistigen Welt.

Ich heisse mit meinem buddische Name, Mizu—yo!

Da bleibt nur ein irdisches Erinnerungszeichen, *Mizu*.

Deine Dich ehrender Mizu—yo.

Woher dieser Brief kam, kann niemand wissen. Er trägt den Stempel Kyoto.

Der Sommer kam und ging zweimal. Es wurde zweimal Spätherbst, und Dattelpflanzen sind so rötlich reif.

Eines Tages besuchte eine Pilgerin mein Haus. Und als sie ihre Pilgermütze abgenommen hatte,

wen musste ich sehen?

Kann man sagen diese sei die neun zehnjährige Dame? So grau ist ihr Kopf, und so schwarz ist ihr Pilgerkleid!

Nur stehen ihre einzig hellen, schwarzen Augen und allerliebste Grübchen als irdisches Gedächtniss still.

Und nur ein Wort:

„Oh! geliebter Vetter, so lange Zeit habe ich Sie nicht gesehen—ja ich bin die Nonne Mizu—yo von Kyoto.“

(*Das Ende*).

## 無花果

秋

風

小川に沿へる賤が家の

紫とみてふくよかに

垣根に繁る葉がくれに

露にはくもむ無花果や。

その實をどると下りたてる

世にも清けく妙なるに

少女よ姿は貧しきも

なごて憂に沈むらん。

あはれいちぢく汝が花は  
もゆる思を包めども

緑もふかき葉がくれに  
潜めば蝶も訪ひよらず。

胸に満ち来る悶えをも

うしや花なき啞の身は

心にこもる戀しさも

あはれつたへむ術すべもなみ。

少女はひとりさびしさの

あまき木の實を草かごに

巳が上のみ忍ぶなり

つむ手もいつか忘れつゝ。

山科秋吟

外

圃

くるま

物さげて遅き瀛車まつ夜さむ哉

朝露や市にひき入る瓜車

いさゝかの家越車や枇杷の花

草花や車ひき出す異人の子

秋の寝さめ

稻妻に母衣下したる車上加な

椽近う菊并べたる寝さめかな

霧はれて山車に旭の照る大路かな

伯爵の菊を愛する寝覺かな

灯をつけぬ車を叱かる夜寒かな

朝寒の新聞よむや夜具の中

蹶然と起きて讀書すそゝろ寒

湯の烟

破鏡の少女

立山や秋白々と湯の煙

木犀やうらみの琴のいくかなで

湯の煙紅葉の奥に上りけり

石女の去られて須磨に砧かな

朝寒の温泉望めば烟かな

秋海棠ふみ倒されて無殘なり

湯の烟輕うふかるゝ紅葉哉

木犀や尼となるべき物思ひ

漢 文

木村博士頌拜引

村上 函 峯

金澤醫學專門學校教授木村孝藏先生。曩奉<sub>レ</sub>命游<sub>三</sub>獨逸國。歸朝之明年六月。文部授<sub>三</sub>博士學位。蓋以<sub>三</sub>其有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>發明於醫術<sub>一</sub>也。弟子受<sub>三</sub>薰陶<sub>一</sub>者。二百六十四人。相謀贈<sub>三</sub>貼金屏風。及狩野周信畫幅。欲<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>頌以慶<sub>レ</sub>之。囑<sub>レ</sub>余。先生夙入<sub>三</sub>大學。醫學治術。超<sub>三</sub>越群衆<sub>一</sub>。爲<sub>三</sub>諸老博士<sub>二</sub>所<sub>二</sub>推重。明治十六年五月。爲<sub>三</sub>金澤醫學校一等教諭。尋任<sub>三</sub>高等中學校醫學部長<sub>一</sub>。每<sub>レ</sub>釐<sub>三</sub>革學制<sub>一</sub>。累<sub>三</sub>進位階<sub>一</sub>。榮光加隆。聲譽益著。其游<sub>三</sub>獨逸<sub>一</sub>。與<sub>三</sub>碩學名醫<sub>一</sub>相周旋。廣收博採。益多<sub>三</sub>心得<sub>一</sub>。其於<sub>三</sub>畸形關節病<sub>一</sub>。發<sub>三</sub>古人所<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>發<sub>一</sub>。其功偉矣。抑外科之術。利刃截割。爭以<sub>三</sub>毫釐<sub>一</sub>。要在<sub>三</sub>乎目得手應<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>經

明師之指授。不<sub>レ</sub>謬者少矣。乃受<sub>二</sub>先生之薰陶<sub>一</sub>。以成<sub>レ</sub>器者。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>勝數<sub>一</sub>。何可<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>此頌<sub>一</sub>乎。頌曰。

於戲先生	醫術秦斗	年積力久	學優德厚
曾游獨園	究精入神	發人未發	歐士爭傳
蒙叟有言	道進乎技	博士學位	豈茲徒爾
天下三樂	育英成器	進頌贈物	維衆之志

書源烈公畫高游外像并讚後

村上 函 峯

源烈公天資英邁。方<sub>二</sub>幕府之多難<sub>一</sub>。卓然不<sub>レ</sub>動。論<sub>二</sub>天下之大義<sub>一</sub>。隱然爲<sub>二</sub>國家之重<sub>一</sub>。豈非<sub>二</sub>所謂真豪傑<sub>一</sub>哉。高游外風丰蕭散。東馳西奔。非<sub>レ</sub>儒非<sub>レ</sub>釋。一<sub>レ</sub>鬻<sub>レ</sub>茶翁耳。公之英邁。翁之蕭散。殆相背馳。而公像<sub>レ</sub>之讚<sub>レ</sub>之。追慕如此。豈有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>感而然歟。冲野君珍<sub>二</sub>藏之<sub>一</sub>。使<sub>二</sub>余題<sub>二</sub>一言<sub>一</sub>。顧余一窮措大。而得<sub>レ</sub>係<sub>二</sub>名其末<sub>一</sub>。亦何幸也。明治壬寅七月。

漢 詩

初 秋

齋女驚秋一草亭。家童閑却掃荒庭。昨朝何爲只願涼。今夕徒愁木葉零。

露 波

同

客舍破窓月影傾。枕頭涼氣夢魂驚。無聲秋至梧桐落。露下千山万壑清。

聞 笛

吹笛西山月色清。風過池上片雲輕。回頭遙持鄉關遠。總此行人易悼情。

詣泉岳寺

門前風靜渺雲濤。精舍林深杜宇號。義士芳名千載下。高輪台上巨松高。

東尋防池之感

遙望滄溟意緒寬。俯臨幽岸骨毛寒。昔時雲袂入波底。近代高僧溺宴安。

和 歌

ひ め 萩

秋 風

さりげなう睡を花ふうつしてはいふべしもなし秋の夕やみ  
思寝の閨の灯かげに床の間の瓶の枯梗の花のうつろひ  
夕月夜蜂の梢そむれ渡る子猿の聲を聞き忙ふるかな  
月清き紫苑の椽に端居して眼病みし人に日記よみきかす

河をひの小草のやみに鳥なきて蓼の香寒き夏の夕くれ  
まごかなる月影きよき里川の岸邊に香ふ木犀の花  
木の間もる月をたよりて露草の山路を虫に辿りつつぞ行く  
朝髪を欄に流して庭もせの露の小萩を眺め居るかな  
窓の下黄菊白菊朝雨にいとわびしき秋の寝さめや  
白帆行く筑紫の海に潮さしていまか上らむ夕月の影  
朝寒の庭の小川に花瓶の水を捨てます髪長き君  
萩のやの月よし今宵君と我れいざ夜をこめて歌かたりせむ  
ふみ迷ふ秋の夕野の細小路古塚のかけ蟋蟀のなく  
月を浴ひて馬を牽きつゝ歌ひ行けば我れまちなから妹もつれふし  
川添の野路さびたる夕月夜岸の大木に白鳩のなく

朽葉集

幼子のリボンに風のふく見わた小鮎さばしる夏の夕川  
巡禮の薄き衣に風ふれて鈴の音ひくし犀川の冬

盥ふね浮へて池に君とわれ渡るは易きものと思ひしを

偶感

昨日まで共に飯事してし身を何耻ぢ給ふ花の夕野に  
つた蘿しからみかゝる常磐木のやがてぞ枯るゝ我身なるらん  
み空ゆく雲にぞ告げむ胸の思どもに語らむ人しあらねば  
はらからの屍ついはむ荒わしのあるゝを誰か見てや過ぎむ  
君かため國のためなる此身なりいざや行かなむ遼東の野に

折にふれて

木の葉ちる片のゝ秋の夕くれに聞ゆる馬子の追分のふし  
月落ちて靄たちこむる海の邊を鳴く聲高し五位鷺のむれ  
秋祭り村芝居する山里を稚子ごちつれて老人のゆく  
裏庭に後れ咲きぬる梨の花に小雨の今朝よ我病重れ  
夕映もはやうすれゆく秋のくれ思に沈む聖書抱く友  
心なく眞玉手のべて手折る枝か露ぞこぼるゝ棗木のもと、  
雪消わて水嵩も増して橋断わて舟一つ見ゆる春柳の影  
木も萎わて小簾にも風はなく蟬のこゑ喧しき夏の眞晝時  
かせそよく木蔭すゝしき門川に瓜一つ浮きて子等の游くよ

竹椽に麥酒召します父上と語り更かして夜も静かなり  
工夫らの守る板屋の火も消えて肌寒けき曉の嵐車

笛ふきて異境のわれに聞こゆるかと

幼き妹の母に問ひたりと聞きて、

○ 笛の音の聞ゆるこそよかりけれ月たに物を思はする庭は、

水衣

夕月をすすきにたくる領のあなた遠き野原をつらみ小狐

秋やけふの尾花にそよぐ風のゆくへあやにくわれの袖の露たる

めせな友さまであはれは途の命こよひいざよひ萩の色よき

やせし水を流すにをしきさくらばし、しくれに袖の香をこそうすれ

薔薇さく宿は、霧をまよはせて、ゆんでにふさふ萩もかすかよ

みたびいま、よたびにさむき雁の聲たもとなきし橋やこゆるむ

○ 「こゝの里うつらにあさぬ都こひし」大路に冴ゆる小鼓の音

清美

やまみどり深紫の朝潮に初鯉魚みる倉鎌の濱

芭蕉葉の影にねむれる草苺の利鎌きらめく夏の午かな、

あさまだき曇面白き朝顔のあさひにうつる淡き花びら

秋あさく由井が濱邊にイみて古りし跡思へば波語る如、

鎌を脊に家路をいそぐ稻苺の野ら歌高し月山の端に、

野も山も淡き霧のたれこめて月圓かなり越の大野に、

秋たけて小荷駄が馬の背に甘き柿の實重く市に賣り行く、

秋のたもひ

其月

しよぼくくと小雨ふるなり此の夕父母に逢ひたき心切なや

父母もまた吾に逢ひたくたぼすらん心づくしの雨の夕ぐれ

夕月は二本松にかかりけり君が氣入りの二本松に

君と吾と歌うたひつゝ眺めてし其夜の様よ夕月の影

ふる里に歸りし夢のさめ果て、いよゝ身にしむ萩の上風

同胞は今宵の月に團居して噂し居らん旅なる吾を

吾を思ふ人の心も十五夜の月いはねども月に悟りぬ

椽に出でく沖邊を見れば今日もまた帆船行きかふ吾に帆もかな

鳥ならば空かけりても行かましを二百里の道われ如何にせん

新体詩

たもと草

水衣

露 虫

星にゑむ 玉露の  
露になく 露虫の  
夢もなき 野末より  
あけ近き 鐘のさえ

いざと野を 風まふや  
葉にみだる 白き露  
名にのるか 音もほそぎ  
露虫よ 其かげに

散る露を 音にわひて  
あなよわき 虫の身の  
息つけば ひんがしに  
かげ消れぬ 紫微の宮

さまよひ

ますほのすゝきそこはかとなく  
まだ落ちやらぬ月をしるべに  
たもとにぬるゝ露をはらひて  
まよひの行方とほき野の水

そひつゝゆけばあはれたがさび  
やま風さむうとやこゝちせぬ

なつかしところ聞き聞けば  
雲こゝろなくみんなみの方  
はしるにたはむ名残の征矢か  
無韻のうたに遊子たゝすむ

ああそのしらべ賤がふせ屋の  
こよひやいかに柱なき小琴は

そのほごり

峯のねの

まだあたらしき奥津城の  
あたりにくるゝしるき蝶

秋の野は

たゞみだれたる女郎花  
神籠さむき虫の音や

よもすがら

忍ぶにあまる人の身の  
せめては眠れ其の露に

れもかげを

どひてみしやに白菊の  
ゑみにさびしき村里の

身にはしむ

きぬたの響消えゆけど  
松風のみは音にかへて

霧もなき

月なき里の奥津城に  
はえある蝶のちさきかな

俳 句

白萩に朝の灯洩るゝ草屋哉  
院に通ふ小萩の逕や月の露

紫雲生



遠砧歌の名所の月夜哉  
沼尻や蓼穗亂るゝ秋の風  
ぶつくと柚味噌の焼ける薫り哉  
蜻蛉や垣に懸けたる鍋の尻  
夜を寒み隣は通夜の壁一重  
籠城の水汲みに出る夜寒哉  
流れ矢の芒に亂れ野分哉  
朝寒や埒に首出す馬の息  
鼻かけの地藏や野路の霧時雨  
碑や轡虫啼く草の雨  
秋瘦や湯槽を出づる肩の冷  
朝顔の露やゆかしき嵯峨硯  
石窪の水に落ち合ふ木の實哉  
残月や小梅を出づる植木賣  
枝豆の殻干す胡塵や赤蜻蛉  
行く秋を巡禮に立つ親子哉  
蟬やた母屋に通ふ萩の道

唐辛子西日に乾く晒布哉  
流れ矢の芒に落ちて鳴立ちぬ  
柳散る裏街道や馬の糞  
砂利船や蛇籠崩れて野菊咲く  
朝寒やた百度を踏む石疊  
燭秉りて詩僧と語る月の秋  
虫の音や駒に任せて月の道  
草芝の野菊に露や捨車  
白萩や加茂の小家の外圃  
月は佳し秋歌に佳し芋の味  
草刈の鎌忘れたる野菊かな  
朝寒に鼻毛を抜けば嚏哉  
蜻蛉や櫓を立て懸けし苦廂  
垣の露月に冷たき葉蘭哉  
芒穂や月の狸の腹鼓  
園守の小舎ほの見ゆる芭蕉哉  
窓に干す蒲團に赤い蜻蛉哉

草の戸や菊の香匂る小袖垣  
 三尺の庭や芙蓉の露朝日  
 澤潟のうらがれ秋の泥田哉  
 干葛や媪糸うむ菊日和  
 月薄う男鹿のありく芒哉  
 月落ちて鹿黒う見ゆ山の鼻  
 朝霧や野末に細きちよろ火  
 貝殻や砂よけ柴に秋の風  
 塵塚に虫いろくの月夜哉  
 稻十里鳴子に残る夕日哉  
 秋の水漂母と語る遊子哉

○

山門や杉の落葉の永平寺  
 風董る江樓に灯のともりけり  
 義仲寺や玉卷芭草窓に入る  
 廻廊に晝寢の笠や智恩院  
 橋や雨に香の満つ南圓堂

K、N 生

御木曳く御裳川や青嵐  
 五月雨や崖崩れたる水車小屋  
 家十戸谷を夾んで栗の花  
 蟻螂が覗く障子の破れ哉  
 鯨釣の小舟ならびぬ河の口  
 賢や愚や蛇竹林の孔に入る  
 磯臭き橋下に憩ふ残暑哉  
 敗兵の野道に病むや秋の風  
 謎々に子供集まる圍爐裏哉  
 鉢叩六波羅殿の門を過ぐ

外 圃

○  
 釣鐘に石投げて去る若葉哉  
 疾く起きて脚氣の人の蓮見哉  
 秋の蚊や白の目立つる膝かしら  
 賜なくや寫生して出る寺の門  
 川霧や朝湯に通ふ京女  
 詩を能くす漢醫貧なり蘭の花

火を擦つて小鏡を捜す夜寒哉  
用ありて沖の舟呼ぶ夜寒かな

四高俳句會（時習寮）

(一)

柿澁う異人の顔の歪み哉  
乳母が里訪うて柿喰ふ一日哉  
きざ柿や村の長者が高土塀  
旅繪師が柿忘れゆく岩の上  
暇路を柿喰ひながら馬上かな  
寄宿舎の紙屑籠や柿の皮

(二)

冬の夜や赤い灯掛けて饅飩賣  
島影に夜網の漁火や鐘凍る  
掛乞の提灯走る米屋町  
橋上の瓦斯燈に雪しきりなり  
宴はてゝ電燈寒し五十疊  
島通ふ船の灯や鳴く千鳥

浪五琴寒小百 紫紫寒琴五浪  
奴洲川郊琴合 嶺雲郊川洲奴

寒の雨獄屋に細き灯かな  
灯にうつる鯨の肉や市の雪  
行燈や安火抱わて受験生

(三)

夜神樂の笛の音もるゝ杉木立  
鮫鱺の料理になやむ嫁御哉  
鍋焼や爐に管鮑が温め酒  
豊年を祝ふ鎮守の神樂哉  
背の子が怖がつて泣く神樂哉  
物ねだる妹弟やクリスマス  
杉飾る聖母の像やクリスマス  
尾花枯れて壁の孔見ゆ國分寺

紫啞浪百琴紫寒五 紫啞紫  
嶺蟬奴台川雲郊洲 嶺蟬雲



雜報

卒業證書授與式

七月一日至誠堂に於て大學豫科第九回（本校創立以來第十五回）卒業證書授與式は舉行せられぬ。式は文武朝野の諸士が列席の間に終始嚴肅を以て終りぬ。

吉村校長の告辭、

卒業生諸子、本校は本日茲に諸子の爲めに卒業證書授與の典を擧げ、以て諸子が正に本校所定の課程を修了したることを證明す、是れ實に諸子の榮譽にして、亦予が大に祝する所なり。今や文明の進歩に隨ひ世間百般の事何れの業何れの職を問はず一として専門精熟の士を要せざるはなし、諸子は是れより進みて帝國大學に入らば、夙夜刻苦勵精して各々其の志す所の學術技

藝を攻究し以て國家の須要に應じ、益々社會の文明を發展することを期すべし。

予は今諸子が本校を去るに方り茲に特に諸子に望む所のものあり、乃ち品性人格の修養是なり、凡そ士たる者は縱令其學術技藝に於て精博を極むと雖も、苟も其品性人格にして崇高ならざらんか、決して社會の上流に立ち文明の指導者たること能はざるなり、方今學術技藝を以て名譽を馳するもの恟に其人に乏しからず、然れども窃かに其の品性人格の如何を察すれば或は遺憾なき能はず、此れ其起因する所固より一端にあらざるべしと雖も、抑も亦其人の立志高尚堅固ならざるに由らずんばならず、諸子幸に深く此に鑑み益々其志を高うし其行を磨かき、日夕敢

て怠ることなくんば庶幾くは健全なる學徳兼備の人となり、他日必ず大に我が國光を發輝することを得ん、諸子旃を勉めよ。

明治三十六年七月一日

第四高等學校校長正五位勳四等吉村寅太郎

卒業生總代の答辭

我第四高等學校茲に生等の爲に卒業證書授與の式を擧げられ、朝野貴賓の寵臨を辱うす、誠に生等の光榮なり、生等國光八紘に輝き皇徳四海に洽きの盛世に生れ、校長閣下の嚴肅なる監督と教職各位の懇篤なる指導とに依り此の榮譽を享くるを得たり、何の幸か之に過きん、今又閣下授くるに訓誨の辭を以てせらる、生等感激措く所を知らず、品性駑鈍にして此重任を完うすること能はざらんことを恐る、進みて大學に入らば謹みて閣下の高論を遵奉し、夙夜淬厲して他日の大成を期し、上は以て 聖上獎學の主旨

に順ひ、下は以て閣下の鴻恩に報ひんとす、謹んで茲に謝辭を述ぶ。

明治三十六年七月一日

第四高等學校第十五回卒業生總代勝山秀尾

幾年苦學の功成り卒業證書授與の榮を得たるもの左記の如し。

第一部 英法科

- |    |     |    |     |
|----|-----|----|-----|
| 東法 | 氣駕  | 高次 | 富山平 |
| 京法 | 富山  | 單治 | 新瀨平 |
| 同  | 小池  | 寛次 | 東京平 |
| 同  | 小野君 | 太郎 | 愛媛平 |
| 京法 | 白男川 | 讓介 | 鹿島士 |
| 東法 | 前川與 | 太郎 | 石川平 |
| 東法 | 秋月  | 種英 | 宮崎華 |
| 京法 | 堀木  | 常助 | 三重平 |
| 東法 | 逢坂元 | 吉郎 | 石川士 |
| 同  | 高木  | 章  | 福井士 |

京法	石井光雄	三重平	京法	中田久	富山平
同	前田幹雄	石川士	同	西野勇喜智	石川平
東法	宮崎又治郎	三重平	東法	松岡虎吾	岡山平
京法	林慶太郎	三重平	同	下山晋太郎	三重士
同	加畑一吉	福井平	京法	小川長春	新瀉士
東法	小原貞吉	石川士	東法	南達吉	富山平
京法	高橋泰次	岐阜平	第一部 文科	生姜塚慶量	新瀉平
第一部 獨法科	清水庄松	富山平	東文	須田正雄	新瀉平
同	藤田直一	兵庫平	同	高島喜三郎	石川平
同	須田近思郎	富山士	同	森岡喜三郎	福井平
東法	相良顯三	沖繩士	同	赤祖父順雷	富山平
京法	小林精實	富山平	同	吉水俊道	長野平
東法	河村久米次郎	北海道平	同	菅千秋	高知平
京法	矢部克己	石川士	同	觀山覺道	廣島平
東法	塚原忠兵衛	栃木平	同	青木存義	宮城士
同	砂野卓	京都平	同	坊城堅了	石川平

第二部 工科

同	竹津義圓	石川平	東藥	龜川兼吉	佐賀平
同	小泉幸治	大坂平	東工	野口耕一	新瀉士
同	楠法龍	岐阜平	同	稻垣多束男	三重士
同	武鎧龍真	福井平	京理工	高松謙	三重士
同	大瀧靈超	新瀉平	東工	寺島良太郎	富山士
同	龍溪觀興	新瀉平	同	小山田彌三郎	山形士
第二部 工科	森祐吉	石川士	京理工	川越篤	石川士
東工	中村秀太郎	石川平	東工	中村博	神奈川平
同	安倍邦衛	新瀉平	京理工	入江繁太郎	京都平
同	大澤次三郎	福井平	同	今井喜代志	福井士
京理工	今村奇男	奈良平	東工	窪美温	富山平
同	三上房吉	新瀉平	同	伊藤小二郎	石川士
東工	横山要三	静岡平	同	中大路氏爲	北海道士
京理工	池田季苗	京都士	京理工	原辰司	新瀉平
同	内山俊太郎	石川士	東工	金子庄太郎	福岡平
東工	島山一清	石川士	同	三代貞太郎	島根平
雜報			同	竹内六藏	德島平

第二部 理科

東理 勝山秀尾 福井士  
 同 野田勢次郎 和歌山平  
 京理工 玉井五岳 岐阜平  
 東理 仲佐貞次郎 千葉平  
 京理工 森半吾 岐阜平  
 東理 粟野宗太郎 石川士  
 京理工 戸田靜雄 福井士  
 農科  
 東農 庄田作輔 石川士  
 同 正木信次郎 石川士  
 同 早川千次郎 島根士  
 同 岡崎義明 岐阜平  
 同 小野定志 新潟士  
 同 安部成廉 石川士  
 同 渡邊十三郎 新潟平  
 同 今井熊治郎 福井平

第三部 醫科

東醫 大津 康山梨平  
 京醫 磯部喜右衛門 富山平  
 同 島津 眞 新潟平  
 東醫 和田 倜 北海道士  
 京醫 田島清十郎 愛知平  
 同 阪田清造 島根平  
 東醫 飯田房次 新潟平  
 同 瀬戸國治 静岡平  
 京醫 河村叶一 岐阜平  
 東醫 小倉文彦 千葉平  
 同 澤 靜夫 鳥取士  
 同 政野梅吉 福井平  
 同 長澤義郎 新潟平  
 同 館 正之 新潟平  
 同 木村敬義 三重平  
 同 松林健策 静岡平

同 秋山謙治 新潟平  
 同 竹尾協一 廣島平  
 京醫 眞弓甚之助 三重平  
 同 丸山俊二 新潟平  
 同 内藤民之輔 島根平  
 同 中村秀一 廣島平  
 同 高村政太郎 福井平  
 同 市川定盛 神奈川士  
 福醫 矢澤俊一郎 長野平  
 同 上田 鈞 石川士  
 同 山添喜代藏 京都平  
 同 池上五郎 三重平  
 同 渥美重三 三重平  
 同 野口政秀 新潟士  
 同 武内長太郎 福井平  
 同 牛島敬太 熊本士  
 同 水野鸕達意 新潟士

第二部 農科 (明治三十六年九月追試業)  
 東農 前田左吉 石川士

特待生

勉學鞠躬以て本學年特待生の榮を負ひたる俊髦左の如し。

英法三 澤永 太吉 獨法三 小原 時雄  
 文三 古道 秀 二、三 渡邊 周  
 二、三 高橋 鎌 三、三 松橋 紋三  
 一、二 荒木 彦弼 一、二 得能 佳吉  
 二、二 清水與七郎 三、二 野口 理朝

北辰會役員の改正 (特別會員)

三十六年九月就任

會長 吉村寅太郎  
 副會長 今井省三  
 理事 本間好茂  
 委員 吉村政行 藤井鏡

講話部

川島 俊 若林久太郎  
山瀬時吉

宮川熊三郎 藤井乙男  
八波則吉 垂水延秀  
鶴清吉

長 河合義文

弓術部

西 英盛 村木維夫

長 中野嘉作

演說討論部

赤尾直松

劍道部

宮地彦八郎 楠 正可

長 本間好茂

長 高橋郁治

語學部

佐野安磨 永井靜雄

柔道部

日下庄太郎 石川龍二

長 長屋順耳

長 中俣 匡

村上 珍休

藤井乙男

西田幾多郎 吉村新六

三竹 欽五郎

エミル、ユンケル

ベースボール部

水芦幾次郎

村田金太郎

長 田部隆次

雜誌部

浦井鏗一郎

遠足部

磯田正謙

宮川爲三

長 磯田正謙

遠足部

磯田正謙

宮川爲三

長 磯田正謙

吉崎佐次郎

山田喜久良

一ノ二丙 脇田 武矢

二ノ一甲 吉田 一郎

山瀬時吉

北辰會新委員交名

(明治三十六年六月就任  
但級名ハ新學年級ニヨル)

漕艇部

長 田中 鉄吉

竹田留次郎

森内 政昌

講話部

上原菊之助

藤井 國弘

文 三 佐藤 鐵巖

二ノ三 堀 將之

山瀬時吉

加藤 操

二ノ二甲 井阪 勝三

一ノ二乙 増田 惟茂

北辰會代議員の改選

英法三 山川 正治 獨法三千秋 寛

語學部

英法三 山川 正治

獨法三 加藤 靜吉

文 三 古道 秀

二ノ三甲 浦井 鏗三

國 語

二ノ三乙 堀 將之

三ノ三 菊池 正三

文 三 野村 宗朔

一ノ二乙 根津 金吾

一ノ二甲 岩本 秀雄

一ノ二乙 石黒 文吉

漢 語

文 三 高橋 俊英

一ノ二乙 三矢 禪矢

一ノ二丙 中野 並助

二ノ二甲 清水與七郎

文 三 高橋 俊英

一ノ二乙 三矢 禪矢

二ノ二乙 一色誠次郎

三ノ二 野口 理朝

英 語

英法三 安達 勝雅

文 三 五十嵐博厚

二ノ三甲 浦井 鏗三 一ノ二乙 田口 八郎

獨語 英法三 河合 博之 獨法文三 永宮二男造

二ノ三甲 渡邊 周 三ノ三 有馬 英二

雜誌部

英法三 飯森 梅男 英法三 生井 洸

三ノ三 及能 謙一 一ノ二甲 山崎 麓

二ノ二甲 大谷 安吉

弓術部

英法三 生井 洸 二ノ三甲 神谷吉兵衛

三ノ二 内田 稜

劍道部

獨法三 千秋 寬 二ノ三乙 宮所富太郎

二ノ三 神保 金衛 一ノ二乙 石黒 文吉

柔道部

獨法三 里見 寬二 二ノ三 芝沼 榮作

二ノ二甲 白石 喜之

ベースボール部

二ノ二乙 加藤 周藏 一ノ二甲 山崎 麓

ロンテニス部

英法三 清水徳太郎 三ノ三 増田 雷助

二ノ二乙 東郷 外人

フットボール部

二ノ二乙 松橋好次郎

漕艇部

英法三 園田 三朗 獨法三 増田 俊一

二ノ三 堀 將之 三ノ三 有馬 英二

三ノ三 高安 慎一 二ノ二乙 小川 信次

○乘艇規約の改正

第一條 漕艇區域ハ大野橋ヨリ上流栗ヶ崎下ノ橋マテトス  
但シ遠漕トシテ栗ヶ崎下ノ橋ヨリ上流ニ出テントスルモハ  
其旨乘組人連署ヲ以テ委員ニ届出テ許可ヲ受ケヘシ  
第二條 乘艇セントスルモノハ委員若クハ艇長一名以上ノ同乗  
ヲ求メ連名ヲ以テ艇長ヨリ出艇前日午前中ニ委員ニ申出テ乘  
艇切符ヲ受取ルヘシ

第三條 乘艇切符ニ記載シタル端艇ハ如何ナル事故アルモ他ノ

端艇ヲ以テ代フルヲ許サス

第四條 乘艇中其端艇ニ關スル一切ノ責任ハ乘組人連帶トス

第五條 乘艇者ハ乘艇ノ際乘艇切符ヲ艇庫番人ニ渡シタル後ニ

非ラサレハ出艇ス可ラス

第六條 乘艇時間ハ午前八時ヨリ日没マテトス

第七條 乘艇者ハ左ノ諸項ヲ遵守スヘシ

第一項 委員及艇長ノ指揮ニ從フヘシ

第二項 土足ニテ乘艇スヘカラス

第三項 乘艇中ハ水泳スヘカラス

第四項 端艇及其附屬品ハ丁寧ニ取扱フヘシ

第五項 乘艇定員ハ一艇十名以下トス

第六項 漕艇終ラハ必ス端艇及附屬品ヲ定規ノ場所ニ納ムヘシ

第七項 端艇及ヒ附屬品ヲ破損シ又ハ紛失シタルモハ其旨必ス

艇長ヨリ委員ニ届出テ元價又ハ修繕費ハ當日ヨリ二週間以内

ニ會計掛ニ納メ受取書ヲ委員ニ示スヘシ

第十一條 新艇ハ土曜、日曜、大祭日ノ外出艇ヲ許サス

第十二條 本規約ニ違背シタルモノアルモハ委員ノ決議ノ上乘

艇長交名

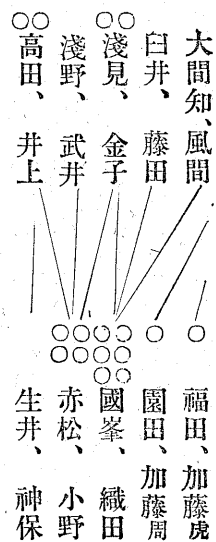
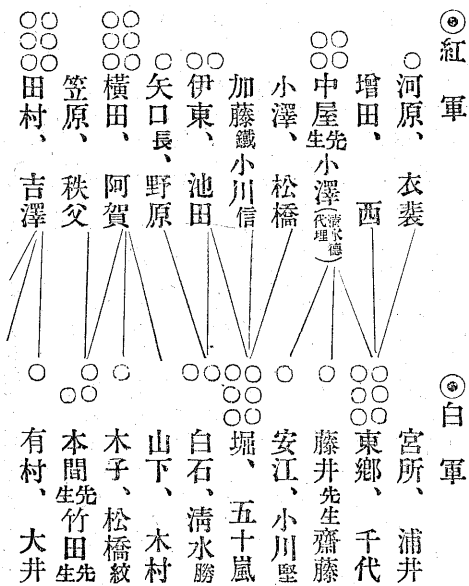
英法三年	淺見與四藏	生井 洸
獨法三年	後藤幸太郎	里見 寬二
文科三年	古道 秀	上野 意純
二部三年甲	板垣 賛造	木村 自老
同 乙	笠原由太夫	神保 金衛
三部三年	松橋 紋三	藤田 孝四郎
一部二年甲	栗本 快一	山崎 麓
同 乙	栗本 清兵衛	根津 金吾
同 丙	中野 並助	山内 秀一
二部二年甲	藤田 圭太郎	岡本 泰
同 乙	西 成伍	松橋好次郎
三部二年	松本 信一	奥田 祐安
一部一年甲	小和田 嘉一	石坂 大慶
同 乙	中村 正	安江 安吉
全 丙	大田原 清美	山崎 亮五郎
二部一年甲	鎌形 勝彌	金子 頼治
同 乙	國峯 專吉	高澤 壽
三部一年	渡邊 信吉	大平 紀陳



テニス部報告

◎紅白勝負。 秋天高く氣靜か、暑からず寒からず、正に是れ運動の好時期!!! 茲に吾がテニス部の健兒率先して。十月十日を卜し、紅白勝負を行ひしも亦故なしとせんや。いざ其愉快なる勝負を左に記載せん。

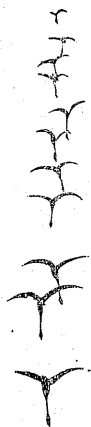
(○印は勝ちシゲーム數)



斯くて當日の月桂冠は終に白軍に歸しにけり。白軍方にては東郷、千代。堀、五十嵐。織田、國峯の三組、紅軍方にては横田、阿賀。田村、吉澤の二組、優待となりて各名譽なる賞品を興へられたり。

吾がテニス部は年々歳々盛大となり、殆んど其底止する所を知らざるものゝ如し。是れ時勢の然らしむる所とはいへ、亦熱心なる諸子の盡力によるといはざるべからず。然れども本年豫算會に於て北辰會の財政困難との理由を以て、ポール代を生徒の自辨となすに決せしのみならず、

ラケット代等をも十分に支給せられざるに至つては何たる不幸ぞや。何たる○○○ぞや。さはさり乍ら幸ひ三百名に近き會員を得て、雨の晴れ間、課業十分の休み中と雖も吾がテニス場裡に人の絶わぬあるとは亦快ならずや。苟くも腦をClearにし、身体を健全にせんとするの諸士來りて之が會員たられ!



該寮ハ生徒心得ノ階梯タリト雖モ之ニ由リテ躬行實踐セハ其レ差ハサルニ庶カラシ

時習寮箴規

凡寮生タル者ハ吾校生徒心得ノ趣旨ヲ躡シ至誠以テ智ヲ啓キ徳ヲ修ムルノ基ト造スヘシ故ニ

- 心意ヲ誠ニシ容儀ヲ正ウシ言語ヲ慎ミ苟クモ輕躁不遜ノ行爲アル可カラス
- 儉素ヲ崇ミ奢侈ヲ戒シメ質樸ニ就キ須ラク其分限ヲ守ル可シ
- 攝生ヲ慎ミ飲食ヲ節シ室内ヲ清潔ニシ起臥出入等其時ニ違フ可ラス
- 常ニ父母ノ安否ヲ懷ヒ狀況ヲ告ケ其心ヲ慰ム可シ
- 時習ノ餘暇ニハ武技運動ヲ勵ミ翼外ニ出テハ遊佚漫戯ス可ラス

時習寮歌

若草もゆる醫王山  
 蘆の花ちる河北瀉  
 到る處に春秋の  
 眺めつきせぬ山河あり。

松にむかむ葛藤  
 古りし大城を昔におひて  
 若き希望にかやける  
 蕪ならべし時習寮。

花の曙雪の暮  
 時をもわかず諸共に  
 文を繕き武をわたりて  
 内外の力養ひつ。

風に轟く潮の音は

血に湧く胸に通ひつゝ  
 理想の波はいや遠く  
 廣くゆくや日本海。

光明限なく北斗星

白雲の雪にうつるひて  
 黒雲影を収めつゝ  
 仰ぐ御空はいや高し。

時習寮生規約等の沿革一班

一、本寮は明治二十六年十月一日始めて之を開き所定の人員を限り志望生徒の入舎を許せり

一、同年十月二十日左記の各室長寮生五十名の總代として寮生規約の認可を請ひ其翌二十一日より之を實行す此規約は本寮に關する本校指前ノ通則及細則の實施を補ふといふ趣旨に出で始めて之を協定したるもの也其第一條を掲ぐれば

左の如し

- 第一條 時習寮生タル者ハ本校生徒心得第一款ノ趣旨ヲ躡認シテ專ラ其躬行實踐ヲ旨トシ以テ常ニ左項ヲ恪守スベシ
- 一 自重親愛及辭讓ノ心情ヲ啓培スルヲ要ス
  - 二 廉耻共同及辭肅ノ美風ヲ涵養スルヲ要ス
  - 三 整理清潔及衛生ノ良風ヲ養成スルヲ要ス
- 室長、國府長松、長餘三郎、渡邊鑄、寺西倫、今井三郎、蛭川行道、武田余藏
- 一、明治二十九年二月十九日を以て從前ノ細則を廢し寮内々則七ヶ條を定めらる、是より先き同年二月十四日を以て左記の各室長寮生總代となりて更に寮生規約の改正増補せし條項の認可を請ひ同月十九日より實行す其第一條左の如し
- 第一條 時習寮生タル者ハ本校々則學生心得第一款ノ趣旨ヲ躡認シテ專ラ其躬行實踐ヲ旨トスベシ
- 室長、栗永貫一、水木常信、中大路正雄、奥山萬次郎、池本四郎、佐藤龜久治、藤田良平、阿部政次郎、中村光吉、田中正太郎、中村孝、築

山眞彦、五十嵐嘉一

一、明治三十年七月其學年末日を限り從來の在寮生悉皆を退寮せしめ次學年より新入の一年級生徒中の入寮志望者を入寮せしむる制となし其人員の比例は定員の三分の二を大學豫科生徒とし他の三分の一を醫學部生徒として志望者數定員に超過するときは抽籤に由りてこれが入否を定められたり従ひて第一學期末に至り缺員を生ずる場合にあらざれば舊寮生の再入を許されざりき

一英、中野深、中村了、松山堅太郎、遠藤八千代、青戸義一、山本秀太郎  
一、明治三十四年四月五日左記の室長寮生總代として規約の改正并に其補則の認可を請ひ同月十八日より實行せり其第一條左の如し

一、明治三十二年二月九日時習寮箴規を撰定し一定の日之を朗讀して寮生の氣風作興の一助としたき趣旨を以て左記の室長寮生總代として認可を請ひ同月十日認可あり同月十一日紀元節をトして之れが創定の日となし始めて其朗讀式を舉行せり(別項箴規看照)

第一條 時習寮生タル者ハ本校々則ヲ遵守シ常ニ本校生徒心得第一ノ趣旨ヲ体認シテ本寮ノ箴規ニ則リ専ラ其躬行實踐ヲ旨トシ自重以テ純良ナル校風ノ發揚者タルヲ期スベシ

室長、栗田貞三、酒井康三郎、小林正旭、尾倉

室長、清水監藏、山岸哲夫、解良幸吉、秋元繁松、池田菱吉、今井正親、山本正勝、山本秀太郎、山崎嘉夫、松原得悟、解良幸吉、上野道故、森岡喜三郎

一、明治三十四年四月改正規約の認可ありたるにより同年九月以後は前學年末推薦せられたる室長候補者中より次學年間室長たるべき者を認可せられたり

一、明治三十六年六月二十四日左記の室長寮生

總代となりて更に規約并に其補則の修正増補の認可を請ひ同年九月十日より之を實行す、是より先き五月大津康、野田勢次郎、園田三郎、清水徳太郎、菊池正三の五室長規約改正の調査委員に擧げらん逐次條項を調査し更に修正増補の案を草して全寮生の議に附し協賛を経て認可を請へり蓋し修正増補を爲す理由は二棟の新築成りて寮生百八十有餘名の多きに達すれば管理上自治上従前に比すれば自から其趣異ならざるを得ざるもの有るればなり其第一條を掲ぐれば左の如し

一、本寮管理者の次第左の如し  
明治廿六年十月一日より三十年一月まで  
舍務掛主幹 教授 木村竹次郎  
同三十年二月より卅四年九月三日まで  
舍監兼任 教授 今井省三  
同卅四年九月三日より卅五年七月十八日まで  
舍監兼任 教授 杉森此馬  
同卅五年七月十八日以後  
舍監兼任 教授 西田幾多郎  
舍監兼任 教授 高橋郁治  
舍監兼任 教授 宮川熊三郎

第一條 時習寮生徒タル者ハ本校々則ヲ遵守シ常ニ本校生徒心得第一ノ趣旨ヲ体認シ自重自治ノ精神ヲ以テ純良ナル校風ノ發揚者タルヲ期スベシ

新入寮生宣誓式  
九月二十日午後一時、入寮宣誓式を至誠堂に舉行せらる。寮生一同席に着き校長職員之に列せらるるや、寮委員園田三郎莊重の調を以て時習寮箴規を朗讀し、新入寮生總代中田昌三宣誓文

室長、野田勢次郎、大津康、千秋寛、里見寛二、園田三郎、清水徳太郎、板垣賛造、石田濟、笠原由太夫、伊藤直、菊池正三、内田穜、

寮 報

を朗讀す。之を終りて校長吉村寅太郎先生、時習寮設立の趣旨を説き、智識の修養、身躰の鍛練は言を要せざれども、品性の陶冶に最も重きを措くべきを懇々訓諭せられ、次に舎監高橋郁治先生、寮生たる者の今後の行動に對して注意せらるゝ所ありたり。中學五年の修養を終り、進んで本校に來れる吾等、其境遇に於ても其思想に於ても、聊か異なる所無かる可からざるや明けし。今や箴規を讀み校長舎監兩先生の訓言を聽くに方り、無限の感謝を表し、重大なる責任を自覺すると共に、内に省みて箴規に耻づる所多きを傷む。次で寮務主任佐野安麿先生寮務に關して報告せられ、こゝに式を終る。

●時習寮現在人員級別

一部一年	六三	同二年	九
同三年	六	計	七八

二部一年	四七	同二年	九
同三年	四	計	六〇
三部一年	三〇	同二年	五
同三年	一	計	三六
合計百七十四人		内 舊寮生 三十三人	
		新入生 百四十一人	

●時習寮生出身中學校別

富山中學	九	東京第一	八	早稻田中	八
福井中學	七	長野中學	五	新潟中學	五
郁文館	五	大成中學	五	愛知第一	五
麻布中學	四	順天求合	四	莊内中學	四
開成中學	四	高師附屬	四	長岡中學	四
錦城中學	四	高田中學	四	京華中學	三
京北中學	三	宇都宮中	三	石川第一	三
石川第二	三	正則中學	三	魚津中學	二
京都第一	三	三重第四	二	明治義會	二
愛知第二	二	愛知第四	二	商工中學	二
鳥取第一	二	天王寺中	二	靜岡中學	二
福島中學	二	東京第四	二	群馬太田	二
神田中學	二	岐阜中學	二	高岡中學	二

取、各三人。大坂、山口、廣島各二人。徳島、和歌山、岩手、兵庫、滋賀、宮崎、宮城、島根、佐賀、山梨、福岡、大分各一〇。以上一道三府三十三縣

●前學年時習寮人員表

高松中學	一	私立東京	一	佐渡中學	一	廿五年九月	七二	月末在籍人員	月末現在人員
浦和中學	一	島根第一	一	上田中學	一	十月	七四		七四
斐太中學	一	新發田中	一	飯田中學	一	十一月	七四		七三
葦山中學	一	徳島中學	一	群馬藤岡	一	十二月	七四		七二
日本中學	一	廣島中學	一	熊谷中學	一	廿六年一月	七三		七〇
長崎中學	一	武生中學	一	前橋中學	一	二月	七〇		七〇
小濱中學	一	石川第三	一	山梨第一	一	三月	七〇		六七
秋田中學	一	高崎中學	一	和歌山中	一	四月	七〇		七〇
水戸中學	一	安積中學	一	宮城第二	一	五月	七〇		六九
松本中學	一	大垣中學	一	富岡中學	一	六月	七〇		七〇
岡山中學	一	同志社中	一	北野中學	一	計	七一		七〇
成城中學	一						七一		七〇
右公私立別									
公立	五十七校	百二十四人							
私立	十六校	五十八人							

●時習寮生道府縣別

富山、福井各十三人。東京二十一人。新潟十八人。愛知十一人。石川十人。長野九人。群馬七人。岐阜八人。京畿、山形各五人。静岡、神奈川、福岡、茨城、埼玉各四人。千葉、北海道、栃木、三重、秋田、鳥

右月末在籍人員 十ヶ月ニテ除シ一ヶ月ノ平均數ヲ求ムレ

七一 強

右月末現在人員ヲ十ヶ月ニテ除シ一ヶ月ノ平均數ヲ求ムレ

六月末現在人員中卒業生二名末一名落第生三名

●時習寮前學年退寮人員表

三十四年九月入寮	舊寮生	一三
	新入生	五九
九月退寮	病氣	一
十二月退寮	修業	一
三十六年一月退寮	修業	一
二月退寮	家計	一
	病氣	六
三月退寮	病氣	一
右退寮總人員		一二
右退寮總人員ヲ十ヶ月ニテ除シ一ヶ月ノ平均數ヲ求ムレハ		一強

第一回大茶話會時習寮創立  
十週年祝賀會佐野寮務主任  
就職十週年祝賀會記事

時は來れり、十月の十日、時習寮創立十週年祝賀會と佐野寮務主任就職十週年祝賀會とを併せて、本學年度第一回大茶話會は將に開かれむとす。

群鳥飛び歸りて城頭の時に息へば、時鐘は五點を報じ、當日の來賓たる本校々長職員諸先生と共に寮生一同卓を圍みて、和氣鬢鬚の裡に晚餐を終りぬ。既にして會場無聲堂の開扉を報するや、集り來る者來賓二十七名寮生百七十余名通學生百六十余名、宏大を誇りたる無聲堂も今や立錐の地を餘さざるに至れり。

場に入りて正面を仰げば、「樂海」と記せる菊花の額の幽香を送りて人を酔はしむるあり、四壁を顧みれば、紅紫の幕色とり／＼に美を競ひ、常磐の緑ゆかしく装はれたる柱の表には雄大の文字の活躍するあり。質朴にして而かも雅を離

れざる此裡に我を忘れて立ては、峯の松風颯颯として吹き寄するが如き幽妙の中より、君か代の崇高の調は起り來れり。衆口和すると一曲また一曲。奏し終りて衆座せば、寮委員板垣賛造壇上に表はれて開會の辭を述べ。其要に曰く、

校長閣下初め職員諸先生通學生諸君の御來臨を忝うしこくは、本夕の大茶話會を催し得るは、委員一同の感謝に堪へざる所なり、そも自治自制以て校風發揚の源泉ならむとするは吾人時習寮生の本領也、然ども校風發揚の事たるや容易の業にあらざるを以て假ひ吾人切磋琢磨意の所あらざるべしと雖も諸先生通學生諸君の誘導を享くるはあらずんば更に一贊を缺くの嘆あらむとす、されば本夕の會も半は寮生相互の親睦を温めむとす半は通學生諸君との和合を固めむとするにあるを以て希くは吾人をして十分の歡を盡し無言裡中握手する所あらしめよ。

時習寮創設以來春秋こくに十たび、自治の制漸く定からむとす本校中堅の誓將に擧らむとす、吾人はこくに聊も祝意を表すると共に將來の完備を期せむとす、

佐野寮務主任は十年一日の如く銳意寮務に盡力せられ寮の盛

大今日の如きを呈するに至れるもの先生の功其の多きに居るは十指の指さす所にして、吾人こくに祝賀會を行はむとするは聊か以て高恩に報ゆる所あらむと欲すればなり、敢て蕪辭を陳して開會の辭となす、

次て寮委員里見寛二立ち、音吐朗々時習寮創立十週年祝辭を讀む。

時習寮創立十週年祝辭

神武以來二千年桃源の夢に酔へる、と見たりし我帝國は、此の間に於て他日雄飛の要素を修養し得たりき、されば泰西の文物一たび我門を叩くや、彼が長を採り我が短を補ひ、整然として一絲亂れざる制度文物は、一大偉觀を呈して我を飾り、未だ幾くならざるに歐米列國を睥睨するに足るべき地盤を固め得たり、此の時に方り、時々たる自嶽の麓、澎湃たる北海の浪、北斗を仰ぎて我第四高等學校は建てられ、我時習寮は起れり、天下幾百の俊秀こくに蟻集し、或者は治亂興亡の跡をたつねて、經綸の才を養ひ、或者は幽妙の理を追及して、救世の愛を蓄へ、或者は科學の深奥を究めて、厚生之道を開かむとす、或者は腐鵠の流を慕ひて、回生の術を修めむとせり。彼等は我第四高等學校に於て其徳を清うし其智を

磨き其跡を鍛ひ、更に我時習察に於て協同の力を養ひ友愛の情を温めたり、由來、城頭の月、園裡の花、幾度か盈ち幾度か散り、俊秀去り俊秀來りて、我時習察茲に十歳の齡を重ねるに至れり、さきには校隅僅に一棟の寮舎あるを見たりしに、今は壯大なるの三棟、古色蒼然たる城壁を貫ひて聳ゆる偉觀を呈し、諸般設備の整頓一も間然する所なきに至れり、豈に祝せざるべけんや、然れども思ふ、祝すべきは設備の完全にあらずして、其實質の如何に存するを、然らば我時習察の實質は如何、先進の後進に對するや薰陶その宜しきを得、後進の先進に對するや恭敬以て従ひ、一人の心事、察の心事となり、察の心事一人の心事となり、加ふるに昨年來自治を標榜するや、人は大人君子を以て我を過し、我は大人君子を以て自ら任じ、自ら爲すべからず信すれば斷じて之を排し、自ら爲すべしと信すれば必ず之を果し、富貴も淫する能はず威武も屈する能はざる大丈夫の精神を涵養しつゝあり、こゝに至りては誰れか我に對して祝賀の一辭を許さざる者あらむや、白獄千秋の雪は我等が心事なり、北海澎湃の浪は我等が元氣なり、杞憂する者希くは安むせよ。

是に於てが天外聲あり、叫んで曰く、汝等は純潔なり、汝等は熱誠なり、然れども大躰より觀察して第四高等學校の現狀

る、我校風にこゝに見る所あり、完備せる演武場無聲堂を建て、これと獎勵したり、然れども這般の企遂に空しく、無盡堂裡眞に無聲、人は舊を厭ひて新を好む、野球足球庭球の戯輸入せらるゝや、全國の青少年走り趨き、我校も亦用具を整へたり、蓋し戶外遊戯の長所は、豊富なる光線に浴び、新鮮なる大氣の中に縱横して、四肢を働かし血行を盛ならしむるに在るのみならず、汗と拭ひて老松の下緑草の上に、調べ妙なる小鳥の歌に耳を澄して遠く落日の影を追ひ、我なく入なく天然と同化し去らむとする時、言ひしらぬ慰藉と感化とを享け得るに在り、斯の如くむば此等の戯武道に比して敢て遜色なしと謂ふべし、然れども校庭草漸く深うして、空しく野犬の馳驅に委せむとす、慨嘆せさらむと欲するも豈に得べけんや、彼等が顔色の蒼白なる彼等が身軀の羸弱なる全く當然の結果に非ずや、彼等の軀軀既に斯の如くにして而かも高遠なる學びの道なごらむとす、眞に無謀の極に非ずや、語に曰ふ、健全なる精神は健全なる身軀に宿るを、身軀の不健全なる我校生徒が、健全なる精神を有せざるは察するに苦しからざるべし、然り、精力集中、堅忍徹底、犠牲献身、忍耐克己、全くこれ彼等に望むべからざる所のものにして、一言以て盡せば、彼等は確乎不動の意志を缺きたるものなり、

は如何、其校風の揚らざる久しからずや、否、天下に向つて呼號し得べき校風の存在すら疑はしきに非らずや、籍を此校に置く汝等の覺悟果して如何、と、然り我校風の揚らざる、否其存在の疑はしきは何人と雖も否定し得べき所にあらざるなり、見よや、半千の青年が擁抱する理想の如何に低きかを、彼等が欲する所は學位にあらずんば陸給にあり、名聞にあらずんば權勢にあり、學位可なり陸給亦可なり、名聞不可なく權勢亦不可なく、然れどもこれが爲めに正義人道を顧みざるに至りては、豈に宥恕すべき事ならむや、また彼等は學科に勤勉なりといふ、そは落筆を恐るればなり、疑ふ者は本校設くる所の圖書館が恰も字書と註釋書とを貸出すに過ぎざるが如き狀況を觀察せば、思ひ半ばに過ぐるあらむ、蓋し教育の根底は自己に存す、人は啓示として訓戒として他より享くる所あるべし、然れども自ら已れを教育せざる者にして、眞に教育の効果を收め得たるものは古往今來未だこれあらざるなり、更に眼を轉じて彼等が體育の方面より如何に働きつゝあるかを見む、そも武道は我國の精華にして長く人心を支配したるもの、恩義と重んじ、卑法と耻ぢ、伎倆と尚び、死と見る歸するが如き精神は、これによりて養成せられたりき、今や古の精神は其影を失ひつくあれども、猶以て神身を鍛練するに足

而して彼等が將來の舞臺たる社會の有様は如何に、西歐文明の潮流一たび東海の濱を洗ふや、巨嶂層巒を縫うて走るべき鐵路は陸に敷かれ、万項の波濤も瞬時に破るべき汽船は海に浮べられ、一柱立ち一線張られて遠隔の地猶は相親しむべく、モートルの力よく暗夜に光輝を興へ、大廈高樓軒を並べ、珍器奇貨店頭に列せらるゝや、人は此文明の皮相に眩惑して、悉くこれを金錢の力に歸したり、是にてか恭禮勤儉の美風地を拂ひ、人に信なく義なく、只利に趨く、こゝ水の低きにつくが如く、一世擧りて黄金の奴僕となり終りぬ、見すや、國民普及の學問に關する事が、はしなくも一大疑獄を起せるを、見すや、七堂伽藍空しく實主の住家となり、十字架前徒に教義の販賣に忙しきを、一國の中心、人心の歸点を稱すべき此等の方面に於ける状態既に斯の如し、其他の方面に於て怪訝の事象々堆積するものある豈に怪しむに足らむや、更に眼界を廣めて世界列國の行動如何を觀察せよ、さきに萬國平和會議を主唱して天下の耳目を聳動したりし者、今は兇器を振うて呑噬飽くなきのみか、キシチフに罪なき猶太人を屠り刀を杖つては、えめるを見すや、非利賓の民義旗を翻して獨立と自由を求むるや、巧にモンロー主義の假面を被りたる巨人斧を擧げて、一撃の下これを挫き去り、志士の血涙今も

猶滂沱たるを知らずや、腥風血雨に沐浴する。こ二年有る、彈丸は盡き劍は折れ、利慾と暴戾とに虚けられたる南阿十萬の士が、半夜天を仰いで正義と人道とに叫ぶ、悲壯の聲を聞かずや、あゝ列國道義の廢頽既に此の如し、而して社會全般に互りて甚だ憎むべきものあり、貧富の懸隔これなり、世に富豪といふ者多く遊惰の徒にして、飛樓傑閣は其住む所なり、美酒佳肴は其食ふ所なり、外にありては駟馬空を走り、内にありては美姬嬪使に甘んず、其子は遺産を承け嗣きて、父よりも更に遊惰ならむとし、遊惰の子遊惰の子を生みて其底止する所を知らざる共に、一方富の増殖亦其底止する所を知らざるなり、醜て貧者の身の上を思ふに、憫憐の情に絶ゆるものあり、見よかの營々として耕す者を、彼等は富者の田を鋤きて漸く其口を糊する者にあらずや、而して其の刈入れを終りて、これを富者の藏に納めむとする時、星を戴きて出て月を踏みて歸る程になして得たる勞働の結果は、已れ口を糊するより以上に値ひせずして、日夜酒食に沈湎して何等勞するなき者の徒費する所なるを思はば、天を仰いで浩嘆せざる無からむや、若し夫れ地下幾百尺の深窖に幽かなる燈をつり、槌を振ふ坑夫の如きに至りては、其幸なきや比類なし、彼等は富者によりて大馬認せられ猶然るが如く使役せらる、

あゝ彼等も亦人の子に非ずや、而かも一け深闇燈あかき處に女子と喃喃私語して徒に夜の明け易きをかこち、他は冥府の如き暗黒裡に苦楚を嘗めて時の移り難きを嘆ず、貧富の不均幸不幸の懸隔も亦甚しからずや、  
上來聊か社會の狀況如何を説き得たりと信す、是に於て起らざるべからざるは、彼等果して何事とを遂げ得るやの難問なり、其理想の低卑なる、其軀軀の脆弱なる、其意志の薄弱なる彼等、世路の風霜を凌ぎてよく挫けざるを得べき乎、世情の冷淡を顧みずしてよく已れを保ち得べき乎、世事の顛倒に遮ぎらるゝなく直前として功を收め得べき乎、思うてこゝに至れば、嗟嘆の聲口を衝いて出でざらむと欲するも、豈に得べしや、  
然れども思はざるべからず、彼等とはやがて我等なり、我等如何に濁流に泛はすに信するも、猶籍を此校に置くもの、等しく汚名を被るべきや明けし、而して我等は何者ぞ、自治を標榜して立つ勇士なり、小にしては我々の師表となりて校風を顯揚し、北辰直下猶頼むべき革進の健兒あるを知らしめ、更に大にして外觀美して内容腐朽せる現時の社會を廓清して、正義の旗を翻へま凱歌を高く奏せむは、實に我等が双肩にかゝれる天職にあらずや、然り我等が天職は大なり、然れども事

は言議にあらずして實行にあり、依て思ふ我等は如何にして此大なる天職を果すべき乎、曰く自治にあり、言を更ふれば自制自動にあり、命令規則の有無を問はず、苟く爲すべからずと信すれば、利福以て我を誘ふとも、危害以て我を脅かすとも、牢乎として抜くべからざる底の剛毅心を保ちて、これを爲さざるは則ち自制なり、勸誘強迫の如何を顧みず、苟も爲すべしと信すれば、巨敵遂に當りて横はるとも、大洋後へに波立つとも、確乎として離へずべからざる底の勇猛心を振へて、これを爲すは則ち自動なり、此精神にして盛ならむや、校風の顯揚や社會の廓清や期して待つべきなり、然れども、自制といひ自動といふ、もこの容易の業にあらずまて、これを執れば隱遁避諱となり、狂暴放恣となり、甚だ恐るべきが如しと雖も、我等が天職の重且大なるを自覺し、恭敬以て師長の訓戒を奉じ、友愛以て切磋琢磨せば、必ず以て自制自動に近づくを得む、蓋し外物の刺戟、經驗、試煉によりて人の資性を教養し得べくんば、何んぞ自制自動の精神に於てのみ然る能はざる理あらむや、  
耶を上げて大局の形勢を察し、頭を垂れて我々の現状を觀、こゝに我等は我等の天職を自覺し、これに對する覺悟を定めたり、今茲に時習寮十週年の祝日に際し、猥りに其長壽其整備

にめくらめきて、驚き措く所を知らざるが如きは、我等が探る所にあらざれば、校長閣下初の職員生徒諸君の面前に所志を開陳し、併せて自ら誓む、  
明治三十六年十月十日 時習寮生総代理見寛二  
朗讀し終れば、寮務主任佐野安麿先生正面に立ち、寮委員中野並助進み出でゝ先生に對する祝辭を朗讀し、紀念品目錄を進呈す、

祝 辭

廣漠たる北陸の野に聳え常に白雪の冠美しきは白山にあらずや、吾人はを仰ぎ其千古不變の姿を見ては覺ゆる崇嚴の念にうたれ、純潔なる白雪の雲際に輝くを見ては胸中幾多の罪惡消滅する心地す、是れ白山か吾人に與ふる偉大なる感化にあらずや、  
而して今や我時習寮々務主任佐野安麿先生、寮の爲めに盡さるる事茲に十年、此長年月猶一日の如く勉められし先生の功勞に對し、我等寮生聊祝辭を述べて先生に謝せむとす、  
あ、先生や櫻散る春も葉みのれる秋も朔風寒き日も暮雨急なる時も、常に寮に在りて寮務を監視寮生を督し、其熱誠人として服せしむるものあり、宜なるかな舊寮生の今猶先生の徳を説くや、我等之を寮の先輩に聞く、抑此時習寮の創立に當りて

や百般の事未だ整はず、察生或は放佚屢々規律を犯して止まらず、獨り此時に當りて是を督勵し涙を振つて説諭して導き、墮落するなく好成績なるを得しは實に先生の功に依るこ、あゝ先生が此の如き勤勉此の如き熱誠に依り察は今日の如く三察黨を列べ二百の健兒相親睦して自治を行ふの盛大を見るに至りとならずや、誠に先生が十年倦まず屈せず勤勉せられは以て白山の姿千古不變なるに比すべく、先生が清き熱誠は白山の頂に帯べる雪の汚れ無きに似たらずや、

又我等思へらく現時教育界に於て最も乏しきは献身的に教育する人はなりと、誠に多様多趣以て人を樂ましむる盆梅の如き人世に多し、而かも轟々たる事杉の如く一の變化なく唯至誠以て猶偉大なる感化を興ふる人は是れ最も我等の畏敬する所たり、然り十年一日の如く子弟と履食を共にし、或は子弟の父となり、或は子弟の兄となり、或時は俊嚴なる事秋日の如く或時は慈愛なる事春風の如く、以て青春の意氣未だ定まらず常に邪道に陥らむとする學生を導き精神智識共に修養せしむる人現時に多くあるを聞かず、獨り此点に於て我佐野先生は實に成功せられたるものと謂ふべく、而かも此長年月身軀に病む所無く精勤せられし事眞に祝すべき事ならずや、あゝ實に此愛すべき察は我等が第二の家庭、佐野先生は我等

壁未だ乾かざる日より察務主任として十年一日慈母の赤子に於ける如く身をく察の改善と察生の訓育とに委れ給ひ察の今日ある一に先生の資なり一たび察に入りたる者誰か先生の厚恩を忘るゝ者あらんや況哉生等察にある三年先生の膝下に教を受け先生の徳に浴したる者謝するに何の辭かあらん日夜高教を奉じ他日先生の渥き恩澤の幾分に酬ゆるの時あるを覺悟するのみ

翹て又思ふに察の今日の進境一階段に上りたるに過ぎずこれより一層の飛躍をなすべく恰もこの帝國がこの十年の進歩と現在の地位とに於けるか如し正にこれ樂園の草木漸く實を齎らしたるの時ぞ其花を開き實を結ぶの時は何れの日なる其前途尙遠遠察の諸賢か任愈重大なり希くば益徳を磨き智を啓き軀を練り更に他日の大成を期せられ以て佐野先生始め諸先生が多年盡し給ひし厚恩の萬一に報ぬられんとを  
今や天高く氣清しこの整然たる察の擴張期に際し又察の地北には遙に滿州に對する北海を望み南に魏峨たる白山を仰げば以て愈志氣を鼓し膽を鍛ふるに足る所にあり加ふるに諸先生と察生諸君とが親和を以てすこの天の時地の利人の和を得たり嗚呼快なる哉察の現時嗚呼勇ましき哉察の將來

在東京舊察生 今井 正 親

か第二の父と頼むべき人たり、  
而して我等は朝な夕な此愛すべき察にあり、外には察の樓上より萬嶽を壓する白山を望み自然の感化を受け、内には慈にして嚴なる佐野先生あり懇篤なる教を受くるを得、あゝ我等幸福何にか比せんや、  
聊蕪辭を呈し我佐野先生十年の精勤を祝し併せて先生の勞を謝す云爾、  
明治三十六年十月十日  
時習察生總代中野並助

次に察委員園田三郎、在京舊察生よりの祝辭祝電を朗讀す、

祝辭に代へて

時は十月十日朝夕忘るゝ能はざる我時習察其創立十週年紀念と佐野先生察務主任就職十週年祝賀とを兼ねて大會を開かる生等この千歳の好機に際し筵の末席に列するを得ず遙に察の長久と先生の萬歳とを禱り一言を述べ  
今やこの察二百の健兒を容れてこの盛況に至りたるも昨は其數五六十僅かに校の十分の一に過ぎざり幸に良師を戴き毎時の察生日夜奮勵斯る小團體にして恒に校の内外に重きを措かれこの盛運に及びたるなり其緣其由一に足らざるへしと雖佐野先庄が十年の昔今は他の新察に比すべくも非ざる南察其

大津 康  
野田 勢次郎  
山岸 哲夫

本日此處に佐野先生察務執職十年の祝賀會を開かること聞か神聖にして儼乎眞率一遍の教室に在りては只管に學術攻究に汲々たらざる可からず而かも察に歸りては温かにして穩かなる氣に接觸して安慰を得るに非らずんば察生の生涯は寔に無味乾燥のものと謂はざる可からず機械的生活は吾人の頗る忌む所而かも放逸にして規律なき生活も亦吾人の取らざる所なり故に察は一言にして盡さば家庭の擴大なるを理想させざる可からずされば察務の事や實に至難の業是れに當る人にして其器に非らずんば察生の不幸これより甚しきはなし幸に先生は能く察務に適應するの人なり先生の個儻なる性質は事實として懇切丁寧に察生を庇護せらるゝに顯はれ先生の善良なる感化力は年を追うて察風の振擧するに依て顯はる先生十年の經營畫策は已に芽を發し今や花開き又實を結ばんとす察生たるもの、決して忘却すべからざるの師父なり不肖も幸に察に在りて親しく師が下に在りし者當時を回想して無慮の感禁じ能はざるものあり一言祝辭を述べ

舊察生 高木 章



是に於て佐野先生靜に進み出で寮生一同に對し  
て挨拶せらる、其要を摘録せむ、

校長職員各位寮生諸君の面前に敢て謝辭を陳するを得るは余  
の大に光榮とする所也、さきに寮務主任の任を拜受するや果  
して其重任を全うし得へきは心中大に苦慮したる所なりし  
も、幸にして疾病の侵す所ともならず日職務に従事するを  
得たりしも、職掌上さしたる不都合を生ぜしめざりしは、主  
として校長初め職員各位の誘導補助と寮生諸君の自制勤勉と  
に由るものと謂はざる可からず、然るに本日こゝは大茶話會  
を開き併せて創立十週年祝賀會と催さるるに方り、就任以來  
十年を経過したりといふを以て余の勞を慰め給ふに至りては  
御厚情の程唯々感泣の外なき也、

今感謝の辭を呈すると共に本の沿革を略述せむと欲す、これ  
あながち本日の席上と於て無用の業にもあらざる可き、希く  
は御靜聽あらむとを、

抑も本寮は明治二十六年十月一日の創立にかゝる、當初本校  
見る所あり、寮則四十五條と定めて逐一指示教導となり、月  
の下旬寮生は自ら規約二十五條と協定し、時の室長國府長松  
(東都文壇に名ある厚東)、寺西倫(亡)、今井三郎、長餘三郎  
(石川縣立第三中學校教諭)、蜷川行道、渡邊鏡、武田久米藏

ても本校に於ける生徒休業騒動の餘波の寮内に及ばむとを憂  
へ、之が爲めに論議する事一再に止まらざりき、概していへ  
ば第一期に於ては舎監等は有形の管理上又寮生規約實行上  
と關して頗る干渉する所ありしは明として、廿九年新年茶話  
會席上福引に佐野安慶と題して甘薯を出したるを以て、這程  
の事情と推察するに足らむ、第二期に至りては、本校所定の  
細則を漸次抹殺すると共に寮生自重自治の領域を廣め來れり  
又此期の當初文部省より派遣せられたる長井會計課長の勸告  
もあり爾來再三本校長より時習寮増築に付き稟議する所あ  
りとも、國家財政上の都合もあり未だ増築を許されざりき、  
然るに北條前校長の熱心盡方により第三期末に入りて漸く現  
在中、北二寮の増築を見、現任吉村校長に及びて諸事の整頓  
其所を得たるに至れり、

然り而して現在の寮生諸君は此完備せる時習と受け繼ぎた  
る者なれば、其責任も從つて重且大なりと謂ふべし、されば自  
重自治以て校風の發揚を期すべき規約第一條の精神に恃らざ  
るやう勉むべきは言ふを要せざれども、願くば内、本校生徒  
心得を經てなし、寮生規約を繕てなし、且つ諸君が朝夕日に  
誦する校歌寮歌と文となし、外、舊寮生は勿論通學生の補助  
を得、以て北斗長章の光をして、東北は第二高校の上より西

寮生五十名を代表して之が認可を請ふ、廿九年二月に至り寮  
は所謂第二の家庭なれば宜しく自制の區域に進ましむべく、  
寮則の拘束を受けざるべからざるが如き幼稚の状態に在ると  
耻づべしと、從來の規約の條項を増して三十九條となす、  
寮則の大部分は不要に歸したるを以て本校は之を削除し僅々  
十五條となしめたり、自己の行動を律するは宜しく自己を  
以てすべしとの寮生の意氣旺盛にして、三十四年更に規約を  
修正して四十一條となし加ふるに補則五十條を以てし、從て  
本校再び寮則を減少して益々寮生をして自治の領域に進まし  
めたり、

斯の如くなれば今假りに之を三期に分たむが、廿九年迄を第  
一期とし、三十四年迄を第二期とし、三十六年迄を第三期と  
すべし、而して第一期に於ては一利一害一長一短ありて其得  
失に至りては一々之を詳陳し難ければ、勉めて簡單に述べむ  
に、廿六七年の交生徒中に文武二派起り、武派の跋扈文派の  
厭ふ所となり、往々衝突を來し、又廿七八年征清役に學國敵  
愾心の勃興せる時、我校に於ける水陸運動會開催の準備と口  
實として休業を要求して一給擾を醸したる以來、惡習自然に  
發生し生徒間不規律無謀の舉頗りなりき、此等の時に際して  
は今井舎監の苦慮を煩はしたる事跡なからざりき、又余に於

南は第七高校の上に至るまで照り輝かし、進んでは東西最高  
學府の一に入りて益々之を發揮せしむる底の覺悟を固めよ余  
は斯く希望すると共に諸君に於ても期する所あるを信じて疑  
はざるもの也、敢て無辭と陳べて謝詞となす、

先生の態度は謹嚴なりき、先生の語は莊重なり  
き、先生が滿腔の熱誠人を動かさずんば止まざ  
りき。未だ校規の羈絆を脱する能はざりし當時  
と、既に自重自治を標榜し萬難を排して猛進せ  
むとする今日とを思ひ比べては、吾人寮生たる  
者其責の重且大なるを感せずんばあらざる也。  
然りと雖も吾人の胸中また一個定見の存するあ  
り、庶幾くは先生の心を安するを得む乎。

次に壇上に顯はれたるは校長吉村寅太郎先生な  
り。茶の事より説き起して親和の美に及ぼし給  
へる一場の説話、人をして慈父の膝下に耳を傾  
むくるかの感を懐かしめたり。次で舎監宮川熊  
三郎先生及び講師水蘆幾次郎先生の演説あり、  
共に吾人に與ふるに懇篤なる訓戒を以てせら

る、吾人豈に軽々に聴き過ぎさむや。かくて休みなき時の進みに、寮生通學生の演説は遮ぎられたれば、委員告げて曰く、こゝに我等の舞臺を一轉して、輕快なる餘興に耳目を慰さましめよと。一坐爲めに動きて拍手の聲は起れり、彼處よりも此處よりも。

## ○餘興

忽ち見る一丈夫蒼龍を腰にして場にあるを。風姿凜然、人をして襟を正さしむ。時に妙音の吟すらく、「蒼龍猶未昇雲上……」丈夫感極まつて立つて舞ふ、光鋸電閃、劍に聲あり。吟する者は誰、舞ふ者は誰沈痛の吟、剛壯の舞、人の血をして沸かしめたり。良々久しうして入神の美調の響くあり、衆の抱腕爲めに崩れ、恍惚として酔はむとせり。美調那邊よりか來れる、たゞみるに小使某端坐「竹生鳥」の曲を奏するを。

此日三寮各々獨特の餘興を催さむとの計畫あり、而して其何を演じて人を驚かさすべきかに至りては、二他を知らず、他また他を知らざる也。今や中寮餘興の時は至れり。題して仙境といふ、彼果して何を演せむとするか。第一幕は途上の場なり、里見寺の住持法衣の装ひ正しく、六尺の軀幹をゆり動かして前に進めば、鶴童とやらいふ白衣の青道心ヒョコ〜と其後に従ひ來れり。途にして矮小の一田紳に逢ふ。件の田紳曰く、當村に小學校新築の議あれども、吾、貴僧の寺を以て其校舍に充て貴僧を以て教師に任するの議を提出せむとす、貴意如何と。遂に幾何かの運動費に蟻付きたり。幕代れば村會議場の場にして、村長の報告村助役の説明あり、小學校新築派と里見寺借用派との論難激甚にして容易に決すべからず。兎に角村の先生某に謀らむと相率ゐて先生の宅を訪はむとす。第三幕は先生宅の場なり。ハイカラの先生兀然として机に對

すれば、大根一束を携へたる生徒を先頭として總勢六七名の生徒手に手に讀本を携へて來る。先づ恭しく大根を呈すれば、先生相好を崩して喜ぶ。讀本の課を授くるに方り、先生一句を讀めば生徒同音に之を繰返す。先生元來朗讀に妙を得たり、奇聲を發して一音は高く一音は低く、一音は長く一音は短く、讀み來り讀み去る所、人をして捧腹絶倒せしめたり。生徒悉く去り、村會議員次て訪問す、先生厚遇にらざるなし。先生は勿論新築説に賛成なり。先生の口滑りて新智識云々といふ、議員の面々其意を解せずして之を問ふ、先生得意然として之が解釋を與へむとし、却て其辭に苦み、矛盾また矛盾、漸く御茶を濁し得たり。第四幕は里見寺の場なり。先生議員相携へて里見寺實地視察と出掛けたり。鶴童茶菓を運び住持の應接湛だ滑稽。兩派の議員再び議論に花を咲かせ、口角泡を飛ばすもひ

と時にして、某の一撃こゝに一大立ち廻りを演出せり。肥大の住持狼狽爲す所を知らず、泣面してうろ付き廻る所へ、飛び込んだる巡行の查公、そば杖二つ三つ喰ひしも漸く取り鎮め、議決し難き時は首引の勝負によりて決すべしとやらいふ怪しき法律に照して、兩派珠數つなぎの首引をなさしむ。エイヤ〜の中に幕は閉ぢたり。其滑稽其頓智、よくも人の腹を繕らしめたる哉。歡呼の爲めに喉は潤れたり、笑ひの爲めに頸は疲れたり、然れども此時分ち與へられたる茶菓は之を醫するに餘りありき。喫茶の騒ぎ少しく静まれる頃、洋々として響く樂の音は、時に潺々として苔の下行く清水の如く、時に寄せては返す磯の浪、巖に觸れて挫くるが如く、更に轉じては颯々たる峯の松風梢に餘韻を留むるが如し樂終りて侍に装ひたる者一人出で、薩摩踊を演ず、輕快にやつてのけたる所頗る妙。次に

は平野國臣あり南寮の餘興なり。茫々たる草野の中、月の將に傾かむとするを見、夜色沈々たり。草葉の露を踏み分けて、一偉丈夫の表はるゝあり。行く／＼吟すらく、「花の都も秋は猶夕淋しき風情なり名は流れたる清水や落ち來る瀧の音羽山あきの葉色の溝ごと散るや紅葉のちり／＼と亂れ行く世の浪花江や蘆のさはりは繁くともなほ世の爲めに身を盡しつくさむとても筑紫瀉……」。其調や悲壯、人をして身のをの／＼を知らざらしめぬ。これを終りて某の劍舞あり。斯兒捨てざらむか、斯身の飢ゆるを奈何せむ、斯身の飢ゆるは猶忍ぶべし、斯兒の育たざるを奈何せむ、去りて良家の門に托せむと欲すれば、更に別離の悲みに傷む。嗚呼これ一篇の悲劇、哀婉の吟調悲痛の舞技、共に其表情に於て缺くる所なかりき、や／＼暫くして白幕は眼前に張られたり、これ北寮餘興月世界の準備なり。燦然

たる電光倏忽として消ゆれば空には月色皎々地には白露團々。忽ちにして月心一奴僕の映出するあり、袖は短くして裾をばし折り、手に毛槍をさ／＼げ、馬の如き長鬃を空に舞はして歩む毎に、後頭の丁髷はね廻る可笑しさ、宛然舊幕時代の姿。衆其意外に一驚を喫すれば、續いて來るは侍、大名、また奴。何れ劣らぬ奇態百出、觀る人の頭の鍵は／＼づれ横腹の筋はつりぬ。さすがに月の御神もこらへ兼ねほ／＼と微笑を洩し給へば、こは如何に、大名行列を見たるは、箒をさ／＼げたる奴、洋傘を腰にせる侍、蚊帳の馬に跨れる大名、まつた行李を肩にせる奴の一群が、身振り可笑しく踊り行くなりけり。月は再び照りぬ。某の海を踏み跨ぎて立ちしといふ巨像も斯くやと思はるゝばかりの巨人、ジャイアント 大手を廣げて屹と立つたり。かの巨像は風に倒れたりとか聞けど、この巨人はさにあらで不思議や次第

に小さくなり行き、常陸山……子供……と見る間に、はや一寸法師の仲間入りして、果ては黒子となりて消え失せぬ。此間實に一瞬。一瞬また一瞬。地より湧き出でて歩毎に肥大しゆく數百の豆法師、追ひつぎ追ひつぎ天を指して昇り行き、更に天より降り來れば、この度は歩毎に元の豆法師に還りつゝ、地の何處にか紛れ込みたり。次で顯はれし、着服のこなし襟の高き下界の紳士とやら申すに似たるを誰とかなす。疑もなくこれ月界の奇術師。聞くが如くんば彼幼にして夙に他界に遊び、人の目を眩ますといふ魔術を清き聖き月界に輸入したる元祖なりといふ。空より落ち來れる卓子を軽く受け取り更に金盃を取りて其上に置き、先づ金盃の底を叩いて何物も存せざるを示す、其身振手振の奇妙なる、進みては其中より大小數多の器物を取り出し更に之を元に納むる魔法の妙不思議、人をして歡

喜措く能はざらしめたり。最後に奇術師金盃を舉げてボンと叩けば、月界忽ち崩れ、電燈の光隅々に照り渡るこの世となりぬ。これも奇術の御蔭にや。觀る者の顎は更にも言はず、氣もはや疲れたれば、マーチの譜に合して舞ひ出だせる黒奴踊にて、餘興の幕を閉ぢたりぬ。

委員出で、閉會の辭を述べ、一同立ちて寮歌を奏す。奏し終りて宮川舎監一步を進めて、兩陛下萬歲、時習寮萬歲、佐野先生萬歲を唱へ、衆之に和し、喝采更に起る。

斯くして樂しき會は終りを告げたり。我等が今宵の夢や如何ならむ。向ふの小山か背戸の小川か。櫻かつ散る芝の上、妹が唱歌のひと節も、笹舟浮かす水の岸、弟の頬の笑の波も、よなよな夢に親めど、せめてひと夜は、新しき友とのまごゝるに再び歡を盡さしめよ。

第一回鐵脚隊遠足記事

白露黄葉既に秋の老いんとするを示し鴻雁水田に鳴いて野興愈多からんとす。此に於てか我察鐵脚隊は第一回遠足を催し余亦幸に加はるを得たり。時に十月二十五日。

午前五時二十分友に起されて床を離る。硝子窓より眺むれば天猶昏く梧葉音なく曉寒肌を刺す。六時寮を出發す。犀川の岸に沿ひ行く數丁。積原に生ずる雜草紅葉して細り、凹みに溜る川水の鏽色を帯べるも秋なれや。かくて丘を上り兵營を過ぎ野田山を左に沿ふて山道を行く。蕭條たる落葉赤土に印して、左側の崖より黄なる野花、我等が頭上に手を伸し松檜茂れる幽林に禽聲を聞く。道や、開け白絹を裂きたらんが如き犀川を樹間に見しも暫時やがて再び登り坂となりぬ。山の冷氣襲ひ來りしと覺ぬしも、やがて

流汗襯衣を濕すに至りぬ。國道の開築未だならざると見えて人夫數多山を掘りつゝある所を越え右に曲る。路愈峻、磊々たる岩石草鞋を噛み猶昨日あたり雨や降りたる泥土踵を沒せんとする所少からず。然かも名に負ふ鐵脚の一隊既に先驅して林間に姿を隠し、我等同人最後れぬ。山間の孤村、住吉村にて水を請ひ、柿持ちて子を負ひ不思議顔に眺むる小女に道を問ひたれども語解せず、其まゝ高低せる畑道をたとる。露草を濕して激する小川の石を越ゆる事二回ばかり此あたり微に人道なるを知るのみ、唯鐵脚隊の勇士等が草鞋に踏み破られたる雜草の泥に委せるを見る。鞍ヶ嶽の頂を仰ぎ得しと思ふ間もなく道は全く登りとなりぬ。泥愈滑に、熊笹茂る小川邊を越へ漸く麓に達す。是より路なき叢林をよづる也。

電線の如く縦横せる枝を分けつゝ、臺に身を托して大石を躍り越ゆる亦危からずや。かゝる中に悠悠樹幹に身を寄せ「あけび」の實求めんとて餘念なかりしは誰なりけむ。

如何にしけん、我等三人道を失ひぬ。友皆姿無く聲だに無し、蓋し遅れし爲め方向を失せしなり。さらば詮方なし志す方は同じ頂きぞかし今は一直線に登らんと既に林中に身を投せしは例の氣早の中野半脱なり。山内忠堂是に續きぬ余亦續かざるを得ず。藪を脱け灌木を分け進む。既に疲れし身の五尺なる巖石を越ゆる能はず。友既に數十の上に在り我を呼ぶ僅に答へて聲は上に達すれども身は自由ならず。

漸くにして稍平坦なる處に出づ。樹間より見れば日本海清く澄みて天に接せり、覺るす微笑みてぞ聲を發せし。

是に力を得て頂に達す。あゝ我れ今「北陸」と稱

する巨人の一部を見たり、漠々として畑續けるは其肌か、碧流一條長く續ける手取川は其れ血脈か。たとへば水仙の葉を翻したらんが如く、ならば取り來り小女の髪に飾らばや。

此處にて晝食す。白山遙に群山を壓して銀冠をうかがたるが靦ある。寮生枯柴を焼いて暖をとる。蓋寒きが故に非ず無聊なるが爲めのみ多田露波最盡力し居たるを見る。罪無き若殿原や、歸途に就く。林先生、夫人と同道して下山さるゝに逢ふ。ユンケル先生ウォルハルト先生亦在り共に青竹の杖を掲げ、我等と異なる林徑に入らる。巨大なる洋服姿見る見る枯尾花の中に沒し去りぬ。

鶴來街道に出で稍疲れし足を踏み直して寮に歸る。時に午后三時。此夕、食堂歡呼の聲、寮前の老杉に響き、浴室寮歌の聲、濠畔の五位鷺を驚かす。あゝ快なりしかな鐵脚隊。(や、ふ)

一 高崇拜熱を戒む

新に入寮せる諸子の甲、特に東京附近より來れる諸子中一高崇拜熱にかゝれるあり。或は金澤の地僻遠なるを罵り我が時習寮の設備整はざるを嘲り、其比するや常に第一高を以てし遙に羨望の語氣を漏すに至る。あゝ憐む可き輩にあらずや。諸子是を思へ、此處に二人の大工あり。共に壯麗なる家に住まん事を争ひ甲は是を得乙は是を得す唯一の破損せる茅屋を得たりとせよ、然れども乙は壯麗なる家屋を建築す可き材料は多く與へられたりとせよ。若乙が猶自己の用ゐ得可き材料を用ゐずして唯甲の家の壯麗なるを羨望し居らば諸子奈何となす。必ずや乙の意氣無きを憤り其暗愚なるを憐むならん。

新入寮生が一高崇拜熱にかゝれるも亦然り。然かも始めより第四高は必しも第一高に劣らざる

く新に増築されし寮に一年生全体入らんか、無聲堂裡竹刀の響き、柔道の掛聲轟然騒然として青春の活氣堂に滿つるならんか、然るに思はざりき卿等が來るや、無聲堂の寂寞舊に優るものあらんとは。卿等に運動せん事を説かんか日課に追はれ宿題に苦められ到底其餘裕無きを云ふを常とす。吾人亦獨逸語の暗誦の困難なるを知り數學の宿題の多きを察せり。然かも果して餘裕無きか疑ひ無き能はず。試に寮を徘徊せんか、日未だ没せざるに菓子食ひに出づるあり、多く集合して教師の非難批評に全く午后を費し盡せるを見ん。然かも卿等が餘裕無きを云ふ是れ口實のみ多くは柔弱にして運動を厭ふにあらざる無きを得んや。運動の重す可き事今喋々を要せず皆卿等の知れる處、然かも今此の如し。寮委員等が憤慨する亦故なからんや敢て新入寮生に告ぐ。(や、ふ)

をや。壯麗なる校舎、學識ある教師、完備せる時習寮あり。猶一高に劣る處あらば是に優らんと欲する唯郷等の奈何に依るのみ。何ぞ材料を持てる大工の如く是が建築を計らざる。然かも常に不平を起すは何ぞや、曰く東京の如く甘き食物無し曰く電燈の消滅に制限ありて自由に夜半に勉強し得ずと、放逸なる生活に慣れたる學生が規律あり制裁ある處に生活すれば其困難を感ずるは固より論なし、然かも放逸なる寄宿舎生活羨み徒に輕浮なる東京っ子風を吹かさんとす。吾人何をか云はんや。

記して新寮生の一高崇拜熱を戒む。(や、ふ)

新入寮生に告ぐ

從來我が時習寮生は僅に七十餘人、武藝を勵むに於ても多少其寂寥の感無き能はず、無聲堂裡幾多の健兒其過半は通學生なりき。余等思へら

舊寮生通信

舊寮生なる在東京文科大學今井正親君より寮務主任佐野先生への書信中吾人の參考となす可き節あるを以て先生に乞ひて左に掲ぐると  
となしぬ

(前略)當地は毎日曜日諸學校の運動會有之青年輩は東奔西走日もたらざる様子に候大學の運動會は皇太子も御臨幸にて盛に候殆んど撰手の競争にて大學全般の運動會といはむよりは撰手の小運動會といふ方適當に御座候端艇競漕は四月にて是も撰手に非常に責任を負はしめ若し勝利を得れば其科は一週間祝賀として休業いたす習慣に候此の如き様子故撰手連は既に十二月頃より明年の競漕の準備に取りかゝり申候隨分撰手連は困却いたす次第に候

總長山川博士は運動熱心家にて種々盛にすべき

方法を常に講じ居られ候また総長は日本人の智識の一方に偏するを憂ひられ毎土曜は午後六時より講話會なるものを開かれ醫學の事農學の事文學の事法學の事等種々なる題目に關し博士等の講話有之候之により思ひ出し申候先年小生等在寮の節發起創立いたし候土曜日の講話會も此目的に外ならざれば寮の擴張せらるゝと共に一層盛にいたしたきものに候

九月上京いたし直に學校に至り申候に揭示場に五六名の學生暑中休暇中に死亡せられし由報告有り申候文法科だけにて五六人に候へば全躰加ふれば十餘人の多き數かと存候これには種々原因もあるべしと存候へども過度の勉強不規則生活運動不足先天的虛弱など其主なるものと存候とにかく前途多望の青年をして不歸の客とならしむるは惜みても餘りあるとに存候此頃ある統計表に大學々生の死亡數を記載いたし候に付御

参考まで申上候へば

科	學生總數	死亡者數	百分比
醫科	八一五	九一	一一・二〇
農科	四九八	四七	九・四四
理科	三九二	三四	八・六七
法科	一、四八一	八六	五・八〇
工科	一、二〇〇	六六	五・五〇
文科	六〇九	三〇	四・九二

の通りに御座候また卒業生の總數四千九百九十五名中死亡者三百五十四名すなはち一割に缺くる所百餘人驚くべき多數に候これによりても中學校高等學校には十分に躰育の養成に勉めざる可からずと存候(以下略) 十一月一日認

(察報終)

書窓雜感

教育の要義は表示にあらずして啓發にあり。然り唯啓發にあるのみ。宗教を問ふ者には、歴史的釋尊を講ずるも可なり、道德の範圍を求むる者には、學說の異同を説くも亦可なり、更に藝術の意義を問ふ者に對しては、形式美の批評をなすも不可にあらず。人生の意義を問ふ者を叱して、哲學史を讀ましむるも亦不可にあらずるなり。

歴史的釋尊を説く者あらば、學說の異同を説く者あらば、形式美を批評する者あらば、耳を此等に傾けよ。哲學史の繙讀を強うる者あらば、眼を之に曝らせよ。其講義の中より、其書籍の上より、自ら宗教を得、自ら道德の範圍を定め、自ら藝術の意を知り、自ら人生の意義を悟るは、實に吾人の務にあらずや。

徒に先進者に求むるに、有らぬるものを表示せむを以てする勿れ。吾人の求むる所は他に

あらず、唯金鑛の所在のみ。先進者一たび吾人を金鑛の麓に導かむか、吾人が先進者に對する要求は既に終れりと謂ふべし。是に於て鎚を手にして立つべき者、坑を穿ちて鑛脈を追ふべき者、金鑛を抱いて坑口を出すべき者、更に之を精煉し、燦然として人目を眩せむばかりの金塊を得べき者、吾人を措いてそも誰とかなす。ああ吾人を措いてそも誰とかなす。

二

建部水城子其著西遊漫筆に述べて曰く、「獨逸の勤勉なる學生も墮落學生も、一人の除外なく有する所にして、而も我國の頗る多數の學生に全く缺けたる長所特質唯一あり、他なし、獨逸の學生は、決して夢にも他國學生の長所如何なぞ問ひ、之に摸して進徳を計らむなごの情なき卑屈なる氣風なく、自國の傑物ピスマルク、ギョエテ、モルトケの少時如何を鑒み、獨逸氣質、

獨逸魂を發揮して、以て宇内の指導たらむと擬するの意氣山の如き事これなり」と。あゝ之を讀む方今我邦の學生以て奈何となす。抑も大和魂は我邦の精華にして、至誠の念之より發し、剛毅の志之より流るゝに非ずや。然るに方今我邦の學生は萬事の基礎たるべき大和魂の發揮に勵むべきを忘れ、却て英國學生の長所は斯くあり、獨國學生の長所は斯くありと説きて、之に摸せむとを勉めむとす。その意氣地の無きと驚くに堪えたり。而して徒に之を口にして些も之に事實の上に摸せむとせざるが如き者多きに至りては、豈に、嗟嘆の聲に次いで熱涙の滂沱たるなきを得むや。(紫蘭)

### 永 訣

人生の悲、死より大なるはなし、然れども櫻を結

び劍を首にして國君に殉し甲を被り鋒を執りて三軍に斃るゝが如きはこれ男兒の榮とする所死して尙能く瞑するを得む、獨り彼の青年妙齡多望の身を以て中途二豎の犯す所となり一生の希望を空しうするに至りては人生の恨事死して能く瞑するを得んや、一部英法科三年佐和貞柏君の如きは豈其人ならずや、君は天資英邁友情に厚く常に同學の爲めに推され師父の屬望を負ふ特に君は本會端艇部委員として能く其責を盡し端艇新造艇庫新築の企あり今、清流蕩々たる大野河畔、辰章旗翻々たる艇庫樓上に在りて水上飛燕の趣ある新艇の快走するを見れば誰か君の勞に謝せざらむや、然れども君や不幸其完成を見ず半途溘焉として駿州靜浦病院に逝く、愁雲漠々山河爲めに暗し嗚呼悲い哉

### 明治三十五年度北辰會費決算書

△印ハ朱書ノ分

科 目	區 分	豫 算 額	決 算 額	流 用 増 額	流 用 減 額	残 額
第一款 經常 收入		一、一九七五	一、二〇六二〇			△ 六四九五
第一項 特別會員寄付		二五〇〇〇	二五〇〇〇			
第二項 通常會員會費		八七〇〇〇	八七〇〇〇			△ 八〇〇〇
第三項 預金 利息		五六一五	五四六〇			△ 一六五五
第四項 春期運動會乘艇申込料		一、二六〇〇	一、二七五〇			△ 〇一五〇
收 入 合 計		一、一九七五	一、二〇六二〇			△ 六四九五
第一款 經常 支出		一、〇六五七〇	九八〇一九八	二七三〇〇		△ 六三六七
第一項 講話 部 費		二五〇〇	〇六一七			△ 一八八三
第二項 演說 討論 部 費		三五〇〇	一、二四八			△ 二三五
第三項 語 學 部 費		一三〇〇〇	一、二六四九			△ 〇三五
第四項 雜 誌 部 費		二八〇三五〇	二七、六五五			△ 八六九五
第五項 弓 術 部 費		二八〇〇〇	二八〇三三	〇〇三三		
第六項 劍 道 部 費		四二〇〇〇	三、六六三		〇〇三三	△ 二三五
第七項 柔 道 部 費		四〇三〇〇	三、九四一			△ 〇八〇九
第八項 ベースボール部費		五五〇〇	五、二九四			△ 〇二〇六
第九項 ロンテニス部費		七三〇〇〇	八、七六八	九〇〇〇		△ 〇二二

第十項	フットボール部費	一三四〇〇	一一九〇			二九〇
第九項	遠足部費	二六三四〇	二六一九〇			〇〇五〇
第八項	漕艇部費	一一五七〇	一一五三七			〇四三〇
第七項	春期運動會費	一一〇〇〇〇	一〇二〇〇〇			一七九九七
第六項	秋期運動會費	二二〇〇〇〇	一七五五九二			二四四〇八
第五項	會務費	八〇〇〇	二四五四九	一八三〇〇		一七五一
第四項	臨時支出(ロソテモ)	三二〇〇〇	二二二六二	〇二六		二三八五
第三項	豫備費	九二四五	五二〇〇〇	〇二六		三二四五
第二項	端艇新造基金	六〇〇〇〇	六〇〇〇〇			
第一項	端艇新造基金受入	一、一九九七五	一、二二三六〇	〇二六		八六五七
支 出 合 計						
追加豫算						
第二項	臨時收入	七五四四	七五四三四			
第一項	端艇新造基金受入	一五二〇六	一五二〇六			
第二項	端艇新造費受入	六〇三三八	六〇三三八			
第二項	臨時支出	七五四四	七〇二八四			
第二項	端艇新造費	七五四四	七〇二八四			
第二項	追加豫算					
第二項	臨時收入	一、〇七四〇〇	九七八〇〇			
第三項	艇庫新營費受入	一〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇			

第四項	臨時會費	三七四〇〇	三七五八〇			一八〇〇
一、	特別會員臨時寄付金	二〇〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇			
二、	通常會員臨時會費	一七四〇〇〇	一七五八〇〇			一八〇〇
第五項	舊艇庫賣拂代	一〇〇〇〇〇	五〇〇〇〇〇			一〇〇〇〇〇
第六項	會費	五〇〇〇〇〇	五〇〇〇〇〇			
第二項	臨時支出	一、〇七四〇〇	一、一三三六九	一〇七四五九		四七八〇
第三項	艇庫新營費	一、〇七四〇〇	一、一三三六九	一〇七四五九		四七八〇
一、	敷地々上權買収費	一〇〇〇〇〇	九二〇〇〇			八〇〇〇
二、	艇庫新營費	八九一八〇〇	九五五九九九	八二八九		一七六〇〇
三、	レール布設費	五〇〇〇〇	七九六三〇	二五六三〇		
四、	雜費	二八二〇〇	六〇〇〇			二二一〇〇
北 辰 會 基 金		八八七六六	七五四三四	一〇〇〇〇〇	八二五四四	三三三〇〇
	前年度ヨリ繰越高		追加豫算臨時收入へ組入高	第二追加豫算收入へ組入	三十五年度支出合計	殘額(三十六年度繰越高)

三月以降寄贈雜誌

一橋會雜誌 第一號 東京高一  
 第二號 東京高一  
 第十全會雜誌 第廿六號ヨリ 金澤醫學專門學校十全會  
 第廿九號マデ

學友會報 第十九號ヨリ  
 信 仰 界 第三十二號マデ  
 城 北 第十號マデ  
 校友會雜誌 第四十號  
 第二號  
 山口高等學校學友會  
 淨土宗傳道會  
 東京府立第四中學校々友會  
 長野縣立飯田中學校々友會



六合雜誌	第二六七號ヨリ 第二七四號マデ	ゆにてりあん弘道會	矯々會雜誌	第八四號	福岡中學明善校矯々會
學友會雜誌	第四十號	東京府立第一中學校學友會	同窓會報告書	第二九號	福岡縣立安積中學校同窓會
國士	第五十四號ヨリ 第六十一號マデ	造士會	脩養會雜誌	第六號	新瀨縣立高田中學校修養會
校友會々誌	第三號	第六高等學校々友會	校友會雜誌	第七號	大成中學校々友會
校友會雜誌	第五號	長野中學校々友會	校友會雜誌	第八號	三重縣立第一中學校々友會
無盡燈	第十一號ヨリ 第十四號マデ	無盡燈社	華陽	第廿二號	岐阜中學校華陽會
坂東太郎	第十一號ヨリ 第十四號マデ	群馬縣立前橋中學校々友會	校友會雜誌	第十二號	千葉中學校々友會
嶽水會雜誌	第廿二號ヨリ 第廿四號マデ	第三高等學校嶽水會	鯉城	第十號	廣島中學校々友會
校友會雜誌	第十一號	麻布中學校々友會	校友會雜誌	第六號	京北中學校々友會
和融誌	第八號ヨリ 第九號マデ	曹洞宗大學林發行所	保惠會雜誌	第八十號	松山中學校保惠會
七生	第八號	鳴根縣立第三中學校々友會	九十九會々誌	第五號	千壽縣立成東中學校九十九會
校友會雜誌	第一二四號ヨリ 第一二九號マデ	第一高等學校々友會	信青年雜誌	第二號ヨリ 第四號マデ	信州松本信青年社
尙志會雜誌	第五十三號ヨリ 第五十六號マデ	第二高等學校尙志會	六稜	第廿三號	大坂府立北野中學校々友會
校友會雜誌	第二號	石川縣立第二中學校々友會	有斐	第四號	岐阜縣立斐太中學校々友會
校友會々報	第三號	石川縣立第一中學校々友會	校友會雜誌	第二號	山口縣立總山中學校々友會
學友會雜誌	第七號	札幌中學校學友會			
龍南會雜誌	第九七號ヨリ 第一〇二號マデ	第五高等學校龍南會			

# 投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せむ
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さざるべし

明治三十六年十二月廿一日印刷  
 明治三十六年十二月廿四日發行

編輯兼發行者 吉村政行  
 印刷者 生沼倍男  
 印刷所 明治印刷株式會社  
 發行所 第四高等學校々友會

石川縣金澤市早道町五十六番地  
 同縣同市穴水町二番丁二十九番地  
 同縣同市高岡町九十番地

